
東方天地人 ~ The Legend of Total Eclipse

田中色眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方天地人〜 The Legend of Total Eclipse

【Nコード】

N29260

【作者名】

田中色眼鏡

【あらすじ】

未確認飛行物体の異変のあとの夏の幻想郷。ありふれた日常、そこへ暮らす少女達の前に現れるもう一人の自分達。そして歴史を修正する事で、歴史の闇に消えた男、天道総司。巻き起こる新たな異変。彼らの目的は？ 仮面ライダーカブト、東方Projectの二次創作です。劇場版 仮面ライダーカブト GOD SPEED LOVEから天道総司、他が幻想入り。仮面ライダーカブトのストーリー・詳細、ワームやライダーシステム、東方の戦闘

形態・能力などについて独自の解釈が入ります。どちらの作品を知らない方でも楽しめるように書く所存ですが、力量不足のために配慮が足りないことも十分に考えられます。その点は、ご容赦下さい。改行や字送り、構成などを若干編集するために、Arcadiaにも転載しております

天の甲虫、魔女の幻（前編）

/ 0 1

肩と腰の間まで金髪をたらした金眼の少女が一人。

「うーん……すっかり夏だな。憎憎しいくらいに夏だ」

そう言つて、少女　白黒の魔法使い　霧雨魔理沙は手で陽光を遮り、空を見上げた。太陽がさんと輝く……などと言う程度ではなく、はつきり言つて燃えていた。

幻想郷は外とは違い光化学スモッグの影響が少ない為、太陽が非常に輝かしいのだ。

もつとも、その輝きに比べて、暑さはそこまでもない。それも光化学スモッグがないおかげだ。月ほどではないにしろ大気の揺らぎが少ない。結果、熱線は余計に広がらず、混ざらず、反射せずに地上に届く。

そこまでもないと云つてもやはり暑い。

このときばかりは自分の服装　正式な魔女を思わせる尖がり帽子に白いシャツに黒の洋服、ばんわりと長いスカート　が悔やまれた。

紅白の巫女のようにぱつさりと肩口から二の腕にかけてを落としてしまえばきつと涼しいだろう。ただ、その部分だけ日焼けすると云うのも好ましくないし、彼女ほど羞恥心がないわけではない。流石にこの

暑さに、黒色と云うのも光を吸収してよろしくない。流石にこの暑さで「光合成だぜ」と嘯^{うそぶ}けるほど、魔理沙に余裕はなかった。

そこまです意味のない事を呻りながら、魔理沙は首をかしげた。
光化学スモッグ……煙^{スモッグ}なのに余計に暑くなるのは何故なのだろうか。

香霖が「光化学スモッグの所為で外の世界は暑いそうだ」と言っていたからそれ自体は事実なのだろうが、やはりその理由はよく分からない。彼に聞いても推測（殆ど妄想とも言つ）の答えしか期待

できそうにない。

ともかく、外の世界は良く分からない煙に包まれて暑いらしい。
うーん、と頭を捻りながら、魔理沙は箒を肩に担ぎ、あたりを眺め見た。

「……いかん。熱中症になったみたいだ」

それか、外の世界の光化学スモッグが流れ込んできて、ブロッケン山の妖怪でも作り出したのかと首を捻った。

ただ、どう見ても像が投影された様に平面的じゃない。明らかに実体がある。まるで鏡を合わせたかの様だが、鏡のように前後が逆転していると云うワケでもなかった。

木陰からこちらを見つめる自分に視線をやり、ひとしきり呻った後、見なかった事にしてその場を去る事を決めた。

が、箒を肩から下ろす間に、自分は消えていた。

やはり見間違いか白昼夢か。それとも光化学スモッグか。

狐につままれたときのように唾を眉毛に持っていていこうとして、魔理沙は、再び動きを止めた。

自分が、いつの間にか後にいる。

狸か貉か、悪戯好きの妖精にからかわれているのかも知れない。

だが、それにしても背後の気配は現実的過ぎる。

逡巡し、

「妖怪か？ 弾幕ごっこは夏季休業中なんだが……」

肩越しに背後へとそう言った。

いや、と背後の自分は言葉を区切り、

「欲しいものがあるんだ」

と答えた。

これで、光化学スモッグ説は否定されてしまった。煙と煙の細かい粒がぶつかり合って出る音というには明瞭過ぎる上に、なにより、そんな話 煙が音を出すなんて聞いた事がない。

それに妖怪でもない様だ。とすると、妖精だろうか。（それなら、

心当たりはあった)

ますます狐に抓まれる様な気分、魔理沙は誰にでもなく問いかける。いつそのこと抓まれしてくれたら妖精の仕業でもない断定可能だ。触覚まで誤魔化す事は出来ないはずなのだ。

ただ、もしそうなつてしまったならますます答えに窮するだろう。あとは茸によるトリップくらいだが、ここまで正確で現実味のある幻覚を味わった事はない。やはり、謎になる。

「なんだ？ あいにく露店をする気もないんだ。欲しいなら誰から借りればいいじゃないか」

と、聞いた人間が思わず鼻白むような応答をすると、もう一人の自分は、指で帽子を持ち上げ、言った。

「『緋々色金』、借りたいんだが。おっと、もちろん死ぬまでだぜ」
『緋々色金』 由来は知らないがもの凄くいいもんらしい。

自分の、ミニ八卦炉（マジックアイテム。小さいが異常な火力を持つ）に使われている。宝物の样なくず鉄（の山）と交換で手に入れたものだ。

どうやら、この幻影は物の価値が分かる幻影の様だ。ますます幻影らしくない。

少し考える素振をして、魔理沙は応えた。

「死ぬまでって言われてもな。お前が私ならそれは私が死ぬまでって事にもなる。

それじゃ結局盗られたようなものだ。知ってるか？ そう云うのを泥棒って言うんだぜ」

そう述べて、もう一人は「それぐらいはなんでもない」とでも言いたげに訂正した。

「いや、違っぜ。たしかに私はお前でお前は私だが、借りるのはお前が死ぬまでだ。

死んだら、それから貰う。私のものだ。『セニュウによるシヨウケンの移転』って奴になるな」

その言葉が終わるのが先か、魔理沙は飛びのいた。

懷に手をいれ、スペルカードを引つつかむ。

「弾幕ごっこは夏季休業中って言った様な気もするが……まあいい。急遽開店だ」

と、振り返って視線を向ければ、もう一人の自分はおらず

「休業のままで構わないぜ。そのまま閉店になるが」

背後から猛烈な蹴りを喰らって、強かに、地面に胸から倒れこんだ。

どうやらトリップでも妖精でも幻影でもないんだな、と詮のない思考を飛ばしながら立ち上がると、もう一人の自分は手を開閉し、彼女自身の体（魔理沙と同じものである）をまさぐっていた。

「うん、こつちも具合がいいな。幻想郷……中々良さそうだぜ」

それは何についての言葉なのか邪推してしまう様な奇妙な、正直、気分が悪い光景だ。

だがどうやら、このもう一人の自分は自分と同じ知識や記憶を持っているが体験はしていらしい。そう魔理沙は断定した。

となると、外来のもの。

光化学スモッグは幻想郷に来ると実体を持つてしまうのかも知れない、などとやや現実から逃避しながら、魔力を手から放射する。

が、簡単に避けられてしまった。

時には、素手で弾き返しながら、地を這う動物の様な速度で距離をつめてくる。

「……光化学スモッグは光り物が得意なのか？ それなら」

まさか光化学スモッグなどと本気で思っていない。間違いなく、何らかの妖怪だ。

光線がどれほど効果があるのか分からないが、箒に跨って突撃すると云うのには些か不気味すぎる。

『緋々色金』が目的なら、それを見せてやっても良いだろう。メイドではないが、冥土の土産という奴だ。帽子を手早く放り投げ、

ミニ八卦炉を取り出すと

「ああ、光り物は大好きだぜ。まさか冥土の土産にしてくれるとはな」

いつの間にか、その八卦炉は手の中になく、横に立つもう一人の自分に奪われていた。

一瞬、取り出す事、魔力を集中させる事に意識を回したために散漫になってしまったとしても　まさにそれは瞬間移動と云って差し支えない動きだった。

もっとも冥土の土産ってのは逆かも知れんがと笑みを受かべるもう一人の自分。

腹部に、蹴り。今度は何とか受身を取ったが、強烈な鈍痛。

殺しに来ている　魔理沙は確信した。

内心に湧き上がる不安や怒りを抑え、魔理沙は飄々と呟きながら立ち上がる。

「おいおい……そいつは誤用だ。しかもそれ、借りるんじゃない強盗って言うんだぜ」

「安心しろ。もうすぐ私だけになる。それなら盗んだ事にならないだろ？」

やはり、この外来変化妖怪（妖怪変化ではなく変化する妖怪）は自分を消すつもりらしい。

今ので、箒も奪われた。

箒がなくても飛べるが、それとこれとは話が別。非常に、腹立たしい。

啗えて虎の子のミニ八卦炉がない為に片手落ちとなってしまおうかどうか　と云う考えも癪なので表に出さず、魔理沙はスperlカードを切った。

「いや、その前に悪い子にはお仕置きだ　星符『メテオニツクシヤワー』」

桃色、黄色、緑、青　色とりどりの星形の弾幕が外来変化妖怪に殺到する。

先ほどまでの、夢でも見ている様などこか地から脚の離れたような感情は持たず、威力の制限を緩めながら発射　ただし表情自体にその重みはまるで出さない（やはり癪だからだ）。

当たり所が悪ければ、絶命する事も在り得るだろうが　まあ、しょうがないだろうし、ましてや相手は妖怪。人間ならともかく、当たり所が悪くても絶命までは行かないだろうと思いをめぐらせながら星の行き先を睨む。

「やれやれ……夏季休業でそのまま閉店って言わなかったか？」

と、外来変化妖怪は口元を吊り上げ　回避しようとせず、全ての弾に命中した。

「やれやれ……夏季休業ののち急遽開店って言ったはずだぜ」

相手にはもう聞こえてないかも知れない、と弾幕で巻き上がった煙の先をねめつけながら、あたりに意識を払う。

ミニ八卦炉が傷つく心配はない。多分。

相手もこれで死にはしないだろうし、まさか何の策もなく全てを受けるはずがない。魔力でガードしたか、それとも先ほどまでの様にワケの分からない回り込みをしたか。

前者なら一時的に魔力が切れるだろう、後者なら全く問題なく姿を現すだろうがもう完全に集中している。自分の動体視力での見落としはありえないはずだ　零時間移動・空間移動でなく高速移動の類ならば。

と、煙が晴れ……両手をだらりと下げて口笛を吹く自分自身の姿を発見した。

服が多少擦れているが、他に外傷は見当たらない。

驚くべき事に、この変化妖怪は　防御も、回避もしていないのだ。

「やれやれ……これで残機が2になっちまったぜ。まあ嘘だが」

そして、薄ら笑いを浮かべながら手をかざし

「えーっと、こうか？　黒魔『イベントホライズン』」

先程よりも多量な、星の弾幕　地平線が形成された。
なっ、と息を呑みながら、魔理沙は左右に回避を始める。

そこまで自分をコピーしておいて、自分の番だけ使うスペルカードを変えてくるなんて卑怯な奴だな、と睨みつける。

だが今に始まった事ではない。そもそも最初から卑怯なのだ。

木陰からこつちを覗き見たと思えば背後に回りこみ、強盗宣言をしたかと思えば背後に回り込み人を蹴り飛ばし、乙女の体をまさぐったかと思えば横に回りこみミニ八卦炉を奪い……何から何まで卑怯づくしの図々しさだ。

きつとコイツはカツコウのように幼生から図々しく人様の領域に踏み込んでいるんだろう、と光の弾を躲しながら魔理沙は変化妖怪を睨みつけ　その視線が自分より後に行っている事に気がついた。なんとなくパターンが読めるので（元々、自分のスペルなのだ）余裕の出来た魔理沙も、後方を見やった。そして、驚愕した。

手に金属の容器を載せた白い洋服の男が、悠々とこちらに歩いて来るではないか。

全く恐怖が見えない　ひょっとすると眼が見えてないのか、頭が利いてないのかも知れない　動きで、直進している。

だが、男の方へとそれた弾幕は一つとして命中せず。まるで男の前に立ちはだかるものはいないかとでも言う様に。

男の周囲の地面が爆ぜる。

どうやら威力の制限はしていないらしく、中々の威力だ。碌に力も持たないただの人間なら、それだけで死んでもおかしくはない。

だが、男の歩みにそんな爆発にも臆する様子はない。

いつしか回避を忘れた（それでも弾幕が命中しないと云う事は偽者も発射を忘れたのだろう）魔理沙に向かって男は呟いた。

いや、争う二人に向かつてかどうか分からない。

全人類、全妖怪、全妖精、全生物　それらに宣言するか、或いはあらためて言い聞かせるかのごとく。

「おばあちゃんが言っていた……俺は天の道を往き、総てを司る男」
耳辺りの良い低音を響かせ、さも当然とばかりに天を指差す。
男のパーマのかかった髪の毛と、端正な顔立ちが太陽に輝いた。
豆腐が、容器の中で揺れていた。

天の甲虫、魔女の幻（後編）

/ 0 2

「天の道……？」

反復し、魔理沙は男を見た。

妖怪特有の邪気や妖気は感じられない。多分、魔法も使えない。

恐らく日本人だが、服装からして外来人とも思える。

それなのに先ほどの言葉　いかにも自分が神の使いか、或いは神自身であるかと宣言するが如きものだっただ。

パーマのかかった黒髪、強い意思を湛える黒い瞳、岩から削り取った様に整った顔立ち。

身長は魔理沙から頭一つ半か、二つ分ほど高い。ひよっとしたら、神の写し身かも知れんな、と思わせるほどの気品がある。

「何の道だか知らんがここは私の道だぜ。それに今は取り込み中だ！」

と魔理沙は言い放ち、その場から大きく跳んだ。魔力の塊が地面で爆ぜる。

会話中に殺そうとするなんてやっぱり無礼な奴だな、とミニ八卦炉と箒を奪った変化妖怪を睨み、男にここから逃げる伝えた。

危険なのだ。

恐らく、あの変化妖怪は幻想郷のルールに構わず自分と男を抹殺するだろう。

そんな事を許す心算つもりなどさらさらないが、背後に足手まといが居てはそれも叶わない。

かと云って、見殺しにするには気が引ける。

「兎に角ここは私の道で、今絶賛光化学スモッグ発生中で通行止めだ。通るなら余所にするんだな」

言って、スペルカードを取り出そうとしたところに、大型の高速魔力弾　箒を銃身の様に発射されたものが撃ち込まれて来た。

もう飽きたのか、遊ぶ気が失せたのか　変化妖怪は宣言をせず
に攻撃をする心算らしい。卑怯で無礼で無粋だった。

同じ自分とは思えんな……と苦笑を浮かべる魔理沙に、宣言を辞
める気などはない。ルールを破ってまで遊びを続ける事はとても粋
なものとはいえない。遊びでなく明らかに命を狙われているのだが、
それでも変える心算はない。

何故ルール違反をする外来妖怪の為に、自分までがルールを曲げ
なければならないのだろうか。態々こつちが流儀を曲げてまで相手
に付き合う道理はない。こっちはルールを守ったままで相手をブチ
のめす。それが一番良いし、それ以外の手段を取る気はなかった。
となればいつもの弾幕戦の様に回避・グレイズし、敵に攻撃を打
ち込めば良いが……背後の男　魔理沙が避ければ、恐らくこの魔
法が直撃するだろう。

仕方ない。

魔理沙は掌に魔力を集中させ、受け止める事を決意した。

「く……やっぱり流石は私の魔法だ。一級品だぜ」

言って、魔理沙は唇を歪めた。

障壁と魔力のぶつかり合いで生まれた風が、どこかあどけなさの
残る頬を撫で、髪を舞い上げる。

何とか止める事は成功したが、ガードブレイク　魔力が焼き付
き、一時的な出力低下となってしまった。

ジリ貧だな、と臍をかむ魔理沙の横を、件の男が通り抜けようと
する。今見た光景も、全く考慮していない。

バカか、めくらか、余程の大物だな　とうんざりする様な気持
ちで男を見た。

視線には　表立って言う気はないが　ブレイク覚悟で巻き込
まない様に防いでやったのに、お前は一体何をしてるんだ、と云う
明らかな嫌悪の念も加わっている。

「一つ聞く」

前方を睨みながら、男が言った。

「なんだ？ 名前も分からない奴からのデートの誘いならお断りだぜ」

魔理沙の軽口も気にせず、男が続ける。

「何故防いだ？ お前なら躲す事も出来ただろう」

ちよつと予想外の質問だ、と魔理沙は目を大きくした。傍若無人で厚顔無恥だと思っていたが、そうではない様だ。

やや、置いて、

「私の魔法で誰かが殺されたら寝覚めが悪いだろ？」

と、笑みを浮かべて答えた。

男は、そうか、と呟くと豆腐の容器を魔理沙に押し付け、天を指差した。

まず一つ、と男は言う。

「あれは光化学スモッグじゃない。ワームだ」

次に、と男が続ける。

「俺の道は俺が決める。俺の通る道は、総てが天の道だ」
そして最後に。

「俺の名は天道総司 天の道を往き、総てを司る男だ」
言つて、太陽を指差した。

また、その男の横で爆発が上がる。変化妖怪は慣れていないのか、魔法のコントロールが甘いようだ。

それとも、男 天道総司が本当に天の道を往っているのか。

その余裕の溢れる態度に魔理沙は、知人で異変解決のライバルの紅白巫女 博麗霊夢を重ねた。あれも確かに何者にも囚われない自分自身の道を往っている少女である。

「やれやれ……それで、その天道さんはデートの申し込みか？」

と魔理沙が立ち上がると、総司は不適な笑みを浮かべた。

「ああ。この辺りで上手い料理屋を紹介して欲しい。新鮮な魚屋と八百屋も教えてくれればもつと良い」

「おいおい、随分と色気のないデートだな。そんなエスコートじゃ

私は満足しないぜ」

ふん、と総司が一笑。

「安心しろ。お前は絶対に満足する。なんせこの俺がエスコートするんだからな」

そして、ジャケットの前を開いた。金属製の、ベルトが腰に巻かれていた。

総司が手をかざす。

空　空中、或いは空間に波紋が浮かんだ。

拳よりやや大きいほどの甲虫が、淡い青色の光を撒き散らしながら総司の周りを飛び、勢い良くその手に収まった。

カブトムシ　だが、ここまで大きいのは見た事がないし、色も赤い。全体的に金属で作られたかのような光沢を持ち、のっぺりとしている。

外の虫はこんななのか、と思案する魔理沙の横で、総司は甲虫をベルトにスライド・挿入した。

「　変身」

《HEN・SHIN》

男の声にあわせ、カブトムシが罅割れた声を上げる。

うーん……外の虫は喋るのか、と感嘆していると　更に驚くべき事が起こった。

男が翡翠の様な光に包まれ、その体を次々に六角形の金属が覆っていく。

そうして　西洋風のものを今風にアレンジした様な白銀の鎧に包まれた、青い目の仮面を被った男が立っていた。上半身は重装甲だが、下半身はぴっちり、光沢を持つ黒い革らしきものを纏っている。

そう云えば、香霖の家でこれとそっくりなものを見た　たしか、

ライダースーツと言ったか。

なら、それを身に纏い、顔を完全に隠しているこいつはさしずめ仮面ライダーってところか、と魔理沙は口端を吊り上げる。

（仮面ライダーカブトムシ……うーん、仮面ライダーカブトか。これならしつくり来るな）

奇しくも、その名前は彼の名前と同じ。

ライダーシステムの一つ、カブトゼクターの資格者　マスクドライダー・カブトと。

カブトが、天を指し示す。自分がまさにそれであるかとも云う様に。

そして、言った。

「おばあちゃんが言っていた……『人のものを盗むヤツは、もっと大事なものを無くす』ってな」

その言葉にハツとしながら、魔理沙はカブトを見た。

魔理沙とワームが同じ格好をしながらも向こうだけが箒を持っている事から、ワームがそれを奪ったと推理したのだろうか。

或いは、もっと別の何かを『盗んだ』とでも……。

魔理沙が必死に習得した魔法を霜でも踏み砕くかの如く簡単に奪い、そして……そう、魔理沙の魔法に対する憧れ　恋焦がれる乙女のような気持ちを、その思いを土足で踏みにじったとでも。

それとも、（男は知る良しもないだろうが）誰かから「死ぬまで借りる」と云う名目で色々なものを盗んでいる自分に対しての言葉なのか。

「往くぞ、ワーム」

カブトが　いつの間にかどこから取り出した　黒白それと紅の、銃把の底がやけに大きい独特の形態の拳銃を構え、もう一人の魔理沙へと向かって行く。

魔理沙の姿をしたワームが放つ魔力弾を、カブトの銃から飛び出す光の弾が撃墜していく。

一撃の威力は魔力弾の方が高い様だが、スピードはカブトの撃ち出す方が上で連射性能も同様。魔力弾一つに数発の光弾が激突し、相殺する形となる。

そしてその動力にも限りはないのか、偽魔理沙の撃つ魔力弾が尽きても平然とカブトは射撃を続けていた。

弾丸で怯ませながらゆつくりと距離を詰めると、カブトが左手で銃身を握った。まるで、銃が斧の様に見える。

なるほど、あの特異な形状はこの為かと納得しているうちに、カブトが斧を振りかぶる。

咄嗟にもう一人が箒で防ごうとすると、カブトは振り落とそうとした斧を止めると手放し 右脚でその体を蹴り上げた。

中を舞うワーム魔理沙を尻目に、平然と斧をキヤツチ。

再び銃として、空中で受身をとるワームへと光の弾。

容赦なく叩き込まれるそれは箒を手放させ、服を弾かせながらワームを木へと激突させた。

「どうした…… そんなにその姿が気に入ったのか？」

天道の言葉に、訝しみながらも一人の自分を見る。

すると、半透明な輪郭を浮かび上がらせ、偽者の自分が醜悪な緑色の怪物へと変貌を遂げた。先ほどまでの可愛らしさはどこにもない、まさしく怪物だった。

あれが先ほどまで自分の記憶を持ち、自分の言葉を浮かべていたのだ。酷く気味が悪い。

確かにワームだろう。一般的な人間が持つ虫への嫌悪と、どこかしら近いものがあった。

ギィィィィつとやはり昆虫じみた声を上げ、周囲の空気を歪めながらワームが茶色へと変色。

「ふん、脱皮か」

それと間近で相對する、カブトには特に動じる様子もない。

そのまま黄色い発光が辺りを包み　ワームは、青と紫色のクモらしき人型に変化した。

脱皮と云う事は、とりあえずこれは成虫と云う認識で良いのだろう。

クモは『フカンゼンヘンタイ』だと聞いた覚えがあるが、ワームには関係ないのかも知れない。

そのまま、クモの怪物が咆哮を上げ、殴りかかる。だが、やはり平然と、カブトは殴打を巧に腕で止め、そして意趣返しとばかりに同じパンチを繰り返す。

よろける怪人（怪しい人型だからまさにそれだ）へと素早く距離を詰め、動き出した瞬間に殴る。

苦しげに振り回す手を避けると、胴体へと一撃。

攻撃・回避・一撃、攻撃・回避・一撃、とあらかじめ打ち合わせでもしていた様な動きで小気味良くカウンターを叩き込んでいく。

強い。まるで、大人と子供。

かなり戦闘　格闘には慣れている事が理解できる。それも自ら攻め入るのではなく、総てが相手に合わせた反撃。相手の拳に対しても、威力の乗るその部分を外して受け止めるなどの技を見せる。生半可な技術・精神ではこうもいかないだろう。

そのまま、カブトが再び斧を構え　そこから、金色の刃を持つ短剣を抜き出した。

かなり便利な武器だな、と魔理沙は口笛を吹く。何もなければこのまま終わりだ。

だが……突然、カブトの体が跳ねられた。

そのまま、細かく位置を調整しながら落下　いや、違う。空中で何度も殴り飛ばされているのだ。

これが、回り込みの正体。零時間移動ではない。あの、クモの怪人は恐ろしい速さで移動しているのだ。

そして、立ち上がろうとするカブト目掛け、見覚えのある極太の光線が放たれた。

カブトは耐え切った。

全身から煙を上げているが、それでも戦闘続行は可能だとダメージをおくびにも出さずに立ち上がる。

そして、ミニ八卦炉を手にしたワームが姿を現す。

加速能力の使用には時間制限があるのかも知れない。だが、再び使われればその時が最後だろう。

魔理沙の動体視力を以つても残像しか見えない。勢い良く回る風車の様に、姿のところどころを捉えるのが精一杯だった。

心の中で毒を吐き、魔理沙は手に魔力を集中させた。

「しょうがない。この貸しは高くつくぜ」

言葉とは裏腹にこれが“貸し”などと微塵も思っていない。

何か事情を知っている様だが、男は巻き込まれた側（自分から突っ込んできているが）なのだ。

魔理沙の言葉にカブトが頷く。

「なら、終わったら最高の豆腐料理を食べさせてやろう」

「それは楽しみだが……豆腐は崩れやすいんだぜ？　全く無茶を言うな」

仮面の下表情は伺えないが、伝わったと判断し、魔理沙は笑った。

「黒魔 『イベントホライズン』」

豆腐の容器を放り、魔力を解放。六亡星を浮かべた黄色の円が魔理沙の周囲を旋回し　星型の弾丸を撒き散らしながら放射状に展開される。

カブトにも命中するだろうが、構わず威力は最大。密度も最大。されど弾幕の美しさは損なわず。

脅威を感じたクモの怪人が、再び加速する。

だが、回避するのは困難だ。仮に自分がやっても同じだろう。

先ほどワームが放ったものとは明らかに質が違う。まさに狂気と云って差し支えのないほどの弾幕だった。

これが魔理沙の回答。

零時間移動ではない　加速による移動ならば、通れる道無くしてやれば良いだけなのだ。

威力は強い。そうは云っても致命傷にはならないだろう。

だが、加速　スピードが乗って突っ込むなら、必然的に威力も上がる。

マスタースパークを使用したばかりならば、魔力も一時的に切れている。

その場に留まり防ぐ事で対処しようとするれば、カブトが攻撃を加える。

打つ手なし　の筈だが。

クモの怪人は、あろう事かそのまま突っ切ってきた。密度の薄いところを狙い、食らうダメージを最小に。

これが弾幕ごっこなら相手は速終了だが、相手にルールを遜守する気はなし。

『イベントホライズン』は弾が魔理沙まで巻き戻るタイプのスペルだが、明らかにワームはそれより早い。

魔理沙の眼前に高速の影が飛び出し　その背中が爆ぜる。

その、動きが止まったワームへ、引き戻す津波の様な弾幕が直撃した。

おぞましい面構えなので直視したくない上に、虫けらなので詳しく読めないが……驚愕の表情を浮かべているだろう空中のワームからミニ八卦炉を奪い返す。

そして、これまでのお返しとばかりにヒップアタックで跳ね飛ばした。なんとなく硬そうだが柔らかげで、尻への当たり心地は良いものではなかった。

「ふう……ちゃんと解ってくれた様で何よりだな」

落ちてきた豆腐を掴むとミニ八卦炉を投げ遊び、カブトに笑いかける。

元々、相手の能力が加速とは決め付けていなかった。

知り合い（異変を共に解決した程度の仲）に時を操るメイドが居る。可能性としては、相手が時を操っている事も直ぐに思い浮かんだ。

何よりそれが確信へと変わったのはマスタースパーク。

落下だけでは、噴射の類で加速しながら落下している事も考えられた。

だが、マスタースパークではそうもいかない。

魔力を流し、発動するまでのどうしても短縮できない予備動作が存在する。如何に高速で動けたとしても、こればかりはどうにもならない。

その動作すら短縮されてしまっていると云うなら それは、自身若しくは周りのものの『時間流』の操作と断定する他はない。

そうなれば、相手がダメージ覚悟で突っ切ってくる事が十分に考えられる。

ならば逆手に取り 弾幕の中にあえて『崩れやすい』、密度の小さい道を作ってやればよいのだ。

その道にも弾はある。衝突する事で弾けていく星が、ワームの動きを知らせる。

ワームはまんまとその罠へと突っ込み、カブトの放った弾丸を撃ち込まれたのだ。

「お前……なかなかやるな」

「そりゃまあ、この道のプロだからな」

と、ミニ八卦炉を握り締めた手でサムズアップする。

「おっと、私の名前は霧雨魔理沙だ。好きに呼んでくれ」

カブトが、頷いた。おそらくマスクの下でも自分と同じ様に笑っているだろう。

「さて　じゃあ」
「ああ」

二人は、よろよろと立ち上がるワームに向き直り、

「本当の太陽の輝きというものを教えてやろう」

「本当の魔法がどんなものをたっぷりと教育してやるぜ」

カブトは人差し指を、魔理沙はカードを天に翳した。

ワームは逃げ切れないと判断したのか、再び時間加速を発動させる。

向かってくる超高速の像を睨み、カブトが赤いカブトムシ　ゼクターの角を稼動。

C A S T　O F F　　というくぐもった声と共に、白銀の鎧が弾けとび、赤いプロテクターを纏った、正しくカブトムシまさの人型へと変貌を遂げる。

器用にその破片群を潜り抜けたワームが、カブトへと爪を向け光に遮られる。

「おっと、通行止めだって言わなかったか？」

魔理沙の手から発せられた光線が、ワームの動きを妨害。

それならば　と言わんばかりにワームは魔理沙に向かって来るが、今度は背後から現れた光が阻む。

不意の攻撃に戸惑った様な動きを見せ、ワームが地を蹴って飛ぶと

「ビンゴ！　邪恋『実りやすいマスタースパーク』だ。逃げ場はないぜ」

幾重にも宙を駆ける光線が、ワームを空中に縫い止めた。カブトが放った白銀の金属のアーマー、それに、導入のレーザーを反射させていたのだ。

いくら抵抗しても最早逃げ場はない。

ワームに出来るのはあたかも蜘蛛の巣に絡め取られた蝶のごとく、終わりを待つだけだ。

空中に張り付けられたワームはレーザーに増幅されたマスタースパークを浴び

「ハアッ！！」

その最終地点で待ち構える赤いアーマー、カブトの剣により一閃。緑色の爆発と化した。

「……とんだ光化学スモッグだな、まったく」

と、気だるげに魔理沙は天を仰ぎ

「まあ、幻想郷の太陽はスモッグじゃどうにも出来ないらしいな」
につこりと、笑った。

「落ち着け。飯屋は騒ぐべき場所ではない」

「太陽が照らさない場所なんてこの地上に存在しない。つまりはそう云う事だ」

「太陽の光はどんなものにも平等に降り注ぐ。もちろん、男女平等だ」

次回、料理は麗しき人間の為に

天の道を往き、総てを司る。

料理は麗しき人間の為に

/ 0 1

「で、どうだ？ 結構、ここの味は気に入ってるんだが」

蕎麦を啜りながら、白黒の少女 霧雨魔理沙が問うた。

「ああ、中々悪くはない」

天道も蕎麦を手繰り、上から一口分ほどを残して汁につけると、音を立てて啜る。

喉がどこか別の生物の様に蠢いた。

「だろ？ ここは二八なんだ。頼めば十割も出来るが……」

「いや、十割だと崩れやすくなる。つなぎと蕎麦粉の割合は二対八くらいが丁度良い」

魔理沙もそれを見て、安心した様に笑った。

「食い方が江戸の方のだが、お前はそっちで暮らしてたのか？ あ

ー……今は確か東京とうけいだったか？」

「……ああ、大体その辺りだ」

総司が区切って、蕎麦を飲む。

江戸では蕎麦は総てを汁につけず、噛まずに飲み込む。喉越し、と云うヤツだ。讃岐でのうどんの食い方と同じ。あれも、うどんを噛まずに飲み込むのだ。

「それで……」

汁に蕎麦湯を注ぎ、あらためて天道を見る。

「ワームってのはなんなんだ？ それにあの赤いカブトムシは」

総司も蕎麦湯をつぐと、魔理沙に向き直った。

少し考える素振を見せたが、一口飲んで、口を開いた。

「ワームと云うのは7年前……地球の外から襲来した生命体だ」

「ふむ、エイリアンって奴か。香霖が持っていた薄い本に書いてあったな」

てらてらと滑る黒光りの体で人間を襲う、と本には書いてあった。

なるほど確かにあれも虫の様なものだ。きっと、ワームの一種が親戚なのだろう。それを狩る狩人と云うものも存在しているそうで、それは色々と未知の技術を持っているらしい。

あのカブトムシもその技術の賜物なのかも知れない。

技術は見上げたものだが、色彩はそうでもないと思う。

そもそもカブトムシは黒色に近く、それ故の風情や重量感がある。カブトムシが紅かったら、おめでただけの奇怪な生き物になってしまう。あれは黒だから良いのだ。

「物事の色には意味があるのだ」と、香霖（客としてではないが馴染みの古道具屋の店主）なら言うだろう。

「あれはカブトゼクター……マスキングライダー計画によって生み出された、ワームへの対抗手段だ」

「ほー、それも『カガクギジュツ』ってヤツか……外の世界じゃあ魔法も真つ青だな」

やはり未知の技術を持つ狩人と異星人はセットなんだな、と魔理沙は笑った。自分たちの場合は未知の技術を持つ異星人と狩人だったが。

香霖が拾ったと云うあの薄いパンフレットという本 「出来事の概要を纏めた道具」の内容は真実らしい。

よほど外では狩人と異星人の戦いは頻繁に起こるのだろう。何せ幻想郷の自分たちが月に行く位なのだ。外ではもつと遠くへ行つていても不思議ではない。

あの本に人間は巻き込まれたと書いてあったが、その後対抗手段を作り出したのだろう。

生身でもそれなりに戦えるとあったのだから、そんな技術があればきつと負けないはずだ。

「なるほど、外の世界も随分と大変な事になってるみたいだな」

今度早苗（緑色の巫女。外から数年前に幻想郷に来た）にでも色々聞いてみるか、と魔理沙は頬を撫でる。

天道の説明で、粗方はなんだか良く分かんが凄い事になってい

ると理解出来た。

だが、疑問も生まれた。

「それにしてもその分じゃあ外にワームが居るんだろ？ 幻想の生物になるには早いぜ」

幻想の生物。

人々との繋がりがなくなったり、環境が変化する事が原因らしいが…… 良くは知らない。

幻想郷で生物が増えると言う事は、外の人間とその生物の馴染みが薄くなると云う事。つまり、幻想郷での急増は向こうでの絶滅を意味している。

例えば狼。幻想郷では割りと一般的な動物だ。ひょっとしたら犬よりも多い。この狼、古い妖怪の言うところでは幻想郷が出来てすぐに急増したらしい。また、外の人間に聞くと、向こうの世界では狼が既に滅んでいるそうだ。

この様に、元々は人に知られていたのに段々と人から離れてしまった生物が幻想の生物となるのだ。

ただ、例外として稀にこっちに紛れ込んでしまうもの、幻想郷が出来の際に一緒に居た生物なども存在する。

だが…… 近年認識された生物がこちらに来ることは考えにくい。

観測されたてのものは「幻想の生物」とは間逆。空想・又は未確認の生物が現実の生物なっただけなのだ。幻想になるには早い。

まさか死んだワーム…… と云うのは絶対じゃない。

死んだら、幽霊が亡霊、はたまた妖怪にでもならない限り実体を得られないのだ。日の浅いワームでは妖怪にはなれないだろうし、あの様子では死ぬときにはライダーに倒されているだろう。

バラバラならまだ良い。肉体と魂は繋がっている。人間の魂と云うのは肉体の状態に拘わらず全身に宿る為である。

しかし、ライダーに倒される際の様に、完全に肉体が消滅してしまえばそれは分からない。特別な理由でもなければ、宿るべきものの繋がりをなくした魂が肉体を持つ事は不可能なのだ。

書いた絵を消したかの様に肉体を抹消されれば、強制的に縁を切られてしまうのだから。

絵なら、消した際に出る絵の具があるからまだ良い。あの、ライダーの攻撃は緑色の爆発を最後に完全に消滅させてしまう。

これでは結界を越える事も可能だろうが、人を襲う事なんてありえない。人魂の様に辺りの温度を下げるので精々だ。

ともすれば本当に偶然幻想郷に入ってしまった事も在り得るが、天道の口ぶりからではそれもない。

天道は、幻想郷に来てから既に十体ほどのワームを撃破しているらしい。

とはいっても大方がここ（里）で暮らす人間であり、自分、霧雨魔理沙の様に不思議な力を持ったものは殆ど居なかったそうだ。

はつきり言って今聞いた限りでは、ワームが幻想郷に現れる理由は不明であり、理解も完全に不能だ。次の天道の言葉がなければ。

「心当たりはある」

その発言に、魔理沙は身を乗り出した。ちょっと、蕎麦湯を噴き出してしまっている。

天道はそんな魔理沙を手で制し、ハンカチを差し出した。

「落ち着け。飯屋は騒ぐべき場所ではない」

天道は蒸籠を重ね、席を立った。

釈然としないながら魔理沙もあとを追い勘定を払おうとしたが、既に二人分払われていた様だった。

「さて、次は八百屋だな。豆腐だけでは寂しいものがある」

と、一足先に店の外に出た天道が魔理沙に笑いかけた。

む、と少し眉を寄せ、魔理沙は天道の胸の辺りを小突いた。

「その前に心当たりってのはなんだ？」

魔理沙の問に、天道は天を指し示す。

「夏が暑いからといって太陽を隠しに往くものは居ない」

そう云う事だ、と答えると天道が歩き出す。

「いや、これからあんまり暑いようなら簾くらいは掛けに往くかも知れん」

が、箒に跨り魔理沙が天道の道を阻む。

少々熱の入った魔理沙の視線に負けたのか、やれやれと息を吐く天道。

渋々、口を開いた。

「原因が分かってもどうしようもない事もある。今出来るのは現れたワームを倒す事だけだ」

「なんだ。それじゃあいつもの異変と変わらないじゃないか」

「いつものやり方でいけるならそれでいいだろう」

「とは言っても人生に変化は必要だぜ？ 水だっていつまでも同じ処に居ちゃあ澱んじまう」

軽い口調とは裏腹に、この件を有耶無耶にする心算など魔理沙にはなかった。

自分が襲われたとか、そう云う次元の話ではない。これまでの異変より、明らかに人妖への被害が出る。

異変ではなく、明らかな事件。それも酷くたちの悪い事件だ。

異変を巻き起こす過程で他者が巻き込まれるのではなく、他者を巻き込む事・犠牲にする事を前提に行われる事件なのだ。

話し出そうとする天道の表情に真剣みが増す。

どうやら、彼も事件についてそのまま、なあなあにする気はない様だ。見損なわなくて済んだ、と内心嘆息する。

「安心しろ。ワームはそれほど多くない。数があるなら、こんな事はせずにそのまま攻め入って来る筈だ」

つまり、外ではそうだったのか。

そう思ったが、それを口に出すのは憚られ、結局飲み込んだ。

「誰かの記憶を読んで幻想郷について理解したんだろう。表立って動けば無事では済まない」と

「なるほど。確かに異変解決の専門家なんて外には居ないだろうしな」

「ああ、そしてそんな行動をすると云う事は……ヤツらには何か目的があると云う事だ」

確かに、表沙汰にしないのは被害を減らす為。被害 即ち戦力の低下を避けようとしているのだ。

『被害』だなんて一体どちらが被害者なのか、と魔理沙は怒りを覚えるのを自覚した。

「恐らく襲い掛かる可能性があるのは……魔理沙、お前の様な不思議な能力を持った相手にだけだ」

「戦力の補強って事か？ ぞっとしないな」

「基本的にヤツらは擬態した相手を消そうとする」

なるほど、さっきみたいにか。

思い出すと、これも腹立たい。

「だがその強さや……或いは俺の様な存在を知れば出方を変えるだろう。擬態して逃げる、とな」

「つまりやつぱり私に出来るのは出て来たヤツを迎え撃つのと、精々知らせておく事だけか」

「ああ、そう云う事になるな」

幻想郷じゃあ噂が巡るのは早いぜと魔理沙が笑うと、天道は手で制した。

「だが、完全に目的が分からない以上あまり噂が広がっても困りものだ。自棄^{やけ}になるとも限らないからな」

天道の言葉に釈然としないものを感じながら、魔理沙は頷いた。

天道は、幻想郷の妖怪或いはその他能力持ちの事を評価している様だ。

だが、擬態と云うのは恐ろしい。向こうにとって未知であるが故に魔力の扱い方などに差が出るが、ワームであるが故に持って生まれた特性と身体能力がある。

それに加え数で押されれば、いくら妖怪・能力持ちと云ってもワームに降る事だって在り得る。

尤も、目の前の男が飄々とそのフォローに往くだろが。

ワームが能力、幻想郷の異変について理解するなら里の人間への被害は軽微になる。だが、それでも無とはいかない筈。

魔理沙は、知り合いの里の守護者に相談しておく事を決意した。

「ところで天道……お前、どうやって幻想郷に来たんだ？」

ふと思いついた事を、聞いてみる事にした。

「それにやけに此処についても詳しいし、さっきみたいに路銀だつてある」

なあ、と云う魔理沙の言葉に天道は満面の笑みを浮かべ

「太陽が照らさない場所なんてこの地上に存在しない。つまりはそう云う事だ」

と、天を指した。

やれやれと魔理沙は肩を竦め、「あるぜ。地獄って場所がな」と苦笑した。

「お、咲夜じゃあないか」

「あら、魔理沙……奇遇ね」

魔理沙が手をあげて、銀の髪の一部を編んでメイド服に身を包んだ少女　十六夜咲夜いざよいさくやに笑いかけた。

「で、そっちの人と買物かしら？」

「ああ、逢引ってヤツだ。全くモテる女は辛いな」

丁度いつも出売りの魚屋がいる辺り。基本的に川魚や養殖の蜆などを売っているのだが、時々海の魚も売っていた。

幻想郷に海はないが、どこから卸してくるのだ。

大方、外の世界で暮らせなくなった海魚が何かの拍子に紛れ込んだか、それとも外の世界に行ける妖怪（一人しか心当たりがない）が気まぐれに取って来る　と云ったところであろうか。

魔理沙の横を歩く天道の手には新聞紙に包まれた野菜が抱えられている。

モテる女に持てる男だった。

「ああ、こいつは十六夜咲夜、見ての通りメイドだ。それでこつちが」

「天の道を往き、総てを司る男　天道総司だ」
魔理沙の言葉を遮って、天道が答える。もちろん、指先は空に向けて。

そんな言葉に、咲夜が「よろしく」と笑いかける。
あの自己紹介で平静を保つなんて流石は完全で瀟洒なメイドだな、と魔理沙は苦い笑みを浮かべた。

そのまま二言三言交わしている内に、三人は魚屋に出会った。
途端に天道の表情が真剣なものとなる。咲夜も、落ち着いた様子だが目が鋭い。

そうして

「この鯖を貰おうか」

「この鯖をいただけるかしら？」

二人は、同じ鯖を指差した。

それから、全く同じ動きで顔を見合わせる。

「悪いけど、どうしてもこの鯖が必要なの」

「俺の料理にはこの鯖が不可欠だ」

お互いの言葉を受け、向き合う二人。

「お嬢様に一番おいしい鯖を食べさせてあげたいのよ」

「俺が料理するのは最も上手い鯖でなければ意味がない」

言って、二人は完全に睨み合う。

そんな二人の様子を見て、おいおい、完全に瀟洒だの天の道を往くだのが随分と些事に感じるぜ、と魔理沙は心で笑う。

「レディーファーストって言葉を知らないのかしら？」

「太陽の光はどんなものにも平等に降り注ぐ。もちろん、男女平等だ」

不穏な二人の空気に、魚屋が笑いをあげた。魔理沙も、完全に笑

いが表に出てしまう。

二人がなまじ真剣なだけに、この争いは滑稽だった。
笑い声をバツクに、そのまま、お互い一步も引かない不毛なやり取りを続け

「いいわ。こうなれば料理で決めましょう」

「望むところだ。料理の真髄というものを教えてやる」

と、良く分からない方法で決着をつける事となった。
やれやれ、魔理沙は苦笑した。

「もう一度言っわ。愚問よ。全ての時間は私の掌の上」

「さあ、お前の罪を数えろ」

「紅魔館の門番、なめないで」

次回、カプトと紅の門番小娘

天の道を往き、総てを司る。

カブトと紅の門番小娘（前編）

/ 0 1

「用意はいいか？」

「あら、愚問ね。私にそんな時間なんて必要ないわ」

「たいした自信だな」

「貴方程ではないわよ。太陽を自称するなんてね」

「自称……？ 違うな。事実だ」

鼻で笑う天道と、微笑を湛える咲夜。

キッチンの端で見ていた魔理沙は背筋に薄ら寒いものを感じた。

二人とも目が笑ってない。

二人の眼前にあるのはまな板の上の鯖二尾と包丁とナイフと各種調味料。天道はどこからか包丁を取り出し、咲夜もいつの間にかナイフを取り出していた。

と云うかナイフで鯖を捌くのかよ、と魔理沙は頬を掻く。人でも切っているナイフなら、それで作った料理は食べたくない。妖精なら案外適度に匂いがついて良いかも知れないが……。

なんでも……この勝負、どちらが鯖を上手く料理できるかと云うもの。最高の鯖を使う料理人を決めるらしい。

確かに幻想郷には海が無い為、外から迷い込んだものか、外の世界に行く事が出来る妖怪（一人しか思い当たらない）が時たま卸すだけで海魚は手に入り難い。

それにしても高々鯖で……と魔理沙は思っただが、当の料理人二人は違う様だ。

何か琴線に触れる事でも在ったのか。

審査員は魔理沙。

残った料理は門番の妖怪、紅美鈴ほんめいりんに処理させるそうだから無駄がない……と云う話だ。

残飯（と呼ぶには高尚過ぎるものだが）処理係に本人の預かり知

らぬ処で任命される美鈴は気の毒だが、時々と云うか初中後眠りかけている門番にはそんな役目が来るだけましかも知れない。

魔理沙と天道がやって来た際も、立ちながら船を漕ぎ始めていた。器用である。

額に刺さったナイフを抜きながら、「それでも怪しいやつが来たら分かりますよ」と涙ながらに訴えていたが、それも果たして……。

「ほう……」

鯖を下ろしていた天道が声を上げた。

咲夜が、鯖を放り投げると、まさに目にも止まらない速さで二つに切ったのだ。

魔理沙も感心した。ただしそれは料理の腕としてでなく、奇術や大道芸を見た様な気分でだが。

そのまま軽く塩で揉むと、まな板の上に鯖を置く。

「確かに手馴れているらしいな」

どう云う事かと説明を求めると、天道も同じように塩と酒を塗しながら答えた。

あらかじめこうやって魚としての臭みを抜き、水分の少ない状態にするのだと云う。いざ出汁に入れると味噌の方が塩分の濃度が高い為、鯖の水分と共に臭みが出てしまうのを防ぐ為にあらかじめ水分を抜いておくのだそうだ。

それだと魚の旨みも出やしないかと聞けば、それを見極めるのが料理の腕だとの返答。

魔理沙も料理をする。だが、自分の腕はこの二人程ではないと思える。

後学の為に気になった点は質問しておくが、それ以外については静観を決め込むことを決めた。

咲夜が、先に動いた。

天道が目を見開き、咲夜の方を見る。

「随分とせっかちな様だが……それで十分なのか？」

「もう一度言うわ。愚問よ。全ての時間は私の掌の上」

既にだし汁は火に掛けられている。

天道のものには千切りにされた生姜が、咲夜のそれには輪切りにされた生姜が浮かんでいる。生姜の仄かな甘さは臭み消しであり丁度良い後味になると、天道は説明していた。

咲夜のだし汁が、沸騰した。手早く鯖を投入すると、その汁をお玉で掬って鯖にかける。

幾度かその動作を繰り返すと、鯖は直ぐに火が通った状態となる。

咲夜の作業を見て、天道がなるほどと呟く。

どうやら天道にも、咲夜が何をやっているのか分かった様だ。

「だが、早い事が必ずしも優れているとは限らない。それを教えてやろう」

「そうやって無駄な時間を使うのもその為なのかしら？」

天道が沸騰しただし汁に鯖を入れるのと、咲夜が自分のものに味噌を溶き始めるのは同時だった。

やはり、咲夜の行程は（いや、行すべき事は行っている）正確に言うなら 行程の“時間”が短縮されている。これは十六夜咲夜の持つ能力 「時を操る程度の能力」に由るもの。

塩が浸透するのを早め、湯が沸くのを早め、熱が通るのを早め、味が染込むのを早める。

これを用いれば、料理にかかる手間と云うものが極限まで省かれるのだ。

また、時間は空間とも密接な関係を持つが故、時を操る事は空間を操る事に繋がる と云うのが本人の談だった。これを利用して彼女は紅魔館（現在魔理沙達がいる屋敷。見た目より中は広い）の拡張、服の中にナイフを仕舞うと云う事を行っている。

改めて、便利な能力だなと魔理沙は感心した。

そうこうしている内に咲夜の鯖の味噌煮は完成したようだ。冷ます時間まで短くしてある。

一方の天道は、漸く鯖を鍋に入れたところだった。

「これで」

咲夜が、鍋に蜂蜜を入れると再び加熱を始める。

「あらかたは完成ね」

うげ、鯖味噌に蜂蜜かよと魔理沙が顔を顰めると、天道がやや驚いた顔で訂正した。

「いや、光沢をつける為に水あめを使う事がある」

「ええ、でも光沢をつける為だけではないわ」

「臭みを押さえ、更に蜂蜜の成分を溶け合わせ……だしと味噌が鯖に絡むのを助けると云う訳か」

「……それが解るなんて貴方も中々ね」

二人が、また低く笑った。

だが、どこか楽しそうだ 魔理沙にはそう思えた。

天道が鍋に味噌を溶くのを、柔らかな笑みを浮かべながら咲夜が見る。

咲夜の鯖味噌が皿に盛り付けされテーブルに置いてあるが冷める様子もない。これも時間操作の範囲内だ。

天道は「先に出来たのだから先に食べさせれば良い」と言ったが、咲夜がそれを断った。

曰く「こういう勝負はフェアじゃないと楽しくないでしょ？」らしいが……。

それなら初めから時間操作するなよ、と魔理沙は内心で苦言を漏らした。

それともどこかで心境の変化があったのかも知れない。相手の力量を認め、それに応えたと言おうか……。

以前香霖堂で読んだ漫画雑誌にそんなものがあつた様な気がする。確か「強敵」と書いて「とも」と読んだったか。

料理の腕が上がるところも面倒な事になるのかと、他人事ながら苦いものを感じた。

そんな魔理沙の思案を余所に、天道の鯖の味噌煮は最終工程へと

突入していた。じつくりと煮込み、それから冷ます。盛り付けで完成だ。

「手際がいいわね……うちで使用人として働かない？」

天道の素早く無駄のない作業を見て咲夜が言った。

それに、「どつちかと言えば、こいつは執事向きな顔をしてるぜ」と、魔理沙が返した。

「執事向きってどんな顔よ……」

「何となくだ。でも扱き使われると云うよりは、執事として主を正して行く方がイメージし易いだろ？」

言われて、咲夜も想像する。

確かにそうだ。やけに毛色の変った少女に付き従う天道総司の姿が思い浮かぶ。

そんな天道が他のお嬢様の執事と名誉を懸けた決闘を受ける

と云うところまで想像が突入した時に、窓ガラスを何かが叩いた。

カブトムシだ。それも赤い。

「俺の料理の時間を邪魔するとは……まったく……」

心底残念そうに呟くと、三角巾と前掛けを外す天道。

「あら……何かしら？」

「虫だぜ。外の世界のカブトムシだ」

「へえ……外の世界のカブトムシは随分と御目出度い柄なのね」

「そりゃあ……主人が特別に御目出度い人間だからな」

「貴女よりも？」

「おいおい、御目出度いのは私じゃあなくて霊夢の方だろう？」

貴女はどちらかと云えば台所に出るあの虫ね、と咲夜が皮肉る頃には、天道は既に居なくなっていた。

火の止められた鍋と丁寧に畳まれた料理服が置かれている。

「随分と人気者なのね」

そんな咲夜の呟きも、細かく纏められた料理服も、勝負が無効にされた残念さを湛えていた。

魔理沙には、その様に感じられた。

「くっ」

舌打ちをして地を蹴るのは先ほど話題にも上がっていた 門番

中華妖怪、紅美鈴^{ほんめいりん}。

その名の通りの、星の飾りの付いた人民帽の下の紅い長髪が翻る。すらりと伸びた健康的な脚が薄緑色の中華服の裾を舞い上げ、宙に踊る。

着地と同時に地を踏みしめると転身、体重と 気を寄せた一撃を目標へと放つ。が、相対する相手も勢い良く地を踏む 寧ろ『打つ』 と、美鈴の足を崩し、威力を、速度を殺す。

そのまま自分の両側を打つ様に、体に水平に両手を手を突き出し迫り来る美鈴の右手を潜りその始点 右胸骨を狙い打つ。

だがしかし、美鈴はそれを伸ばした右の肘で打つと無理やりに体勢を変え、回転。

勢いを乗せて左肘 さらにそれを衝撃の到達点であり始点とするべく、大地の踏みしめを行う。

姿勢に無理が在った為、完全なる威力は発揮出来なかったが、それを受けた敵は無様に吹き飛び、空中に手について受け身を取った。「気で、逸りましたか……」

苦々しげに美鈴が睨む先に居るのは もう一人の紅美鈴。

「自分自身が相手だとやり難いな……」

と、ぼやく美鈴。

自分の知る技は全て知りつくしている。動きも完全に同じ。唯一違うのは『気』の扱い。こればかりは美鈴の方が優れていた。

うーん、でも……と構えなおし

「自分の癖が判ると云うのは丁度良い修行になりますね。どこの誰だか知りませんけど」

水色の眼を細める美鈴の顔は、普段のお気楽さの欠片もない、紛れもなく武芸者のそれであった。

だが、その気合も、

「食事の時間には天使が降りてくる。そういう神聖な時間だ」

謎の言葉に中断を余儀なくされた。

「ましてやその準備など言語道断……それを邪魔した、貴様の罪は重い」

と、男　咲夜が息巻いて連れてきた「客人」らしい　が天を指し、それから美鈴の偽物を指す。

その右手に珍しい赤いカブトムシが収まり　「変身」と云う声と共に腰のベルトへと挿入される。

《HEN - SHIN》

瞬間、男の体が色鮮やかな緑の光を発する六角形の金属に覆われる。

白銀の鎧の戦士が、そこに居た。

「さあ、お前の罪を数えろ」

そんな掛け声を上げ、戦士が美鈴の変化に向かって走り出す。

悩ましげに眉を顰め、「なんだかそれは別の人の言葉って感じがしますが……」と美鈴は明後日の方向へとポツリと呟いた。

彼女は、外の世界の祖国（正確には彼女の居た時の中国とは異なるものが支配しているが）が同様の　正確には、これよりも更に酷い　事を行っている事を、知らない。当然だが。

/ 03

天道　カブトから仕掛けた。

右の拳、だが美鈴の姿をしたワーム（以下W美鈴）が屈んでそれを躲すと、両手を左右へと突き出す。左に避_よけながら繰り出された

カブトの下段蹴り。

それを、後方へ飛ぶ事で回避。同時に、身を伏せながら更に下に行く足払い。

後方へ避けるカブトへと、地を蹴って虹色の気を纏った足で追撃。だが、天道は空中で体を捻り蹴りを放って、W美鈴の足の軌道を逸らしつつ勢いをつけて着地。すぐさま空中のW美鈴へと上段を回し打つが、魔力を放射し空を足場にする事で逃げられた。

着地するW美鈴。

距離を詰めたカブトの、隙のない中段突き。

それを　左手で下へと払いつつ、左手を砲台に見立て加速された　右の突きが、カブトごと潰した。

「崩拳……」

美鈴の言葉通り、相手の突きを「崩し」、相手の体を「崩す」拳。天道　カブトが、蹈鞴を踏んで数歩下がった。

気の入りが甘かった。それが、一撃で天道が崩壊しなかった理由である。

一たび打ち込まれば、最も筋肉の鎧の多い胴体でさえも突き崩す　それが「崩拳」。

ましてや美鈴は尋常ならざる膂力を持つ妖怪。加えて、無双される気の力。

元来通りのそれならば、よろけるだけで済む筈がなかった。

気を纏った拳は、鎧さえも抜ける。事実、不完全ながらもマスクドフォームの、その下の天道の肉体にさえ衝撃を与えていた。

「……かなり厄介な妖怪に擬態したワームだな」

と、何事もなかったかの様にW美鈴を睨む天道の、マスクの下の顔は渋い。今まで戦ったワームの中に達人と云うものは存在していなかった。

肉体は恐ろしく強く、クロックアップと云うどんな達人でさえも屠殺する能力を有するワーム。

それ故に彼らは強力だ。だが、ただそれだけだった。ワームに戦

闘技術と云うものは（自身の能力を使用する他に）磨かれる必要がなかったのである。

肉体は強いが技術は未熟そのもの。獣の戦い方だ。

よって、同じ土俵に立ちさえすれば明らかに技術を有する方が勝つのは自明の理。天道が祖母から長らく体を鍛えられていたのはそれに由来する。

だからこそ天道はどんなワームを相手にしても有利に戦いを進める事が出来た。

だが、このワームは違う。

妖怪は人間とは異なる遙かに長い生を有する。故に如何なる武者よりもその研鑽に費やせる時間は増す。

人間ではどんなに頑張っても数十年しか技を磨く事は出来ない。だが、妖怪はそれよりも遙かに気が遠くなる様な時間も武を鍛える事が可能なのだ。

如何に天道の鍛錬が密であり激しいものだとしても 人間の一生を軽く超える数百年と云う程度のものまでは到達し得ない。

天道が美鈴に技で勝つ事は それこそ天地が引っくり返ろうとも不可能。

美鈴の経験、妖怪やワームとしての強力な肉体、ワームとしての能力 天道には、正しく最悪と云って良い相手だった。

ならばとクナイガンでイオン弾を撃ち出すが 気に逸らされ、光弾で相殺、妖力で掻き消される。

弾幕ごつこと云う性質上、（他には劣るが）美鈴も飛び道具に対しては手慣れたもの。

それに擬態するワームも同様。近接戦闘だけでなく、飛び道具への備えも十分。

「キャスト……オフ」

《CAST OFF》

かくなる上は　と、ゼクターのホーンを倒し、上部装甲を弾き飛ばす。マスクドフォームより装甲が劣るが、その分スピードの優れるライダーフォームへの換装。

《CHANGE　BEE TLE》と云うゼクターの音声と共に競り上がったホーンが、カブトのバイザーを縦断。

カブトムシを模した髑髏の様な顔の　カブト・ライダーフォームが顕在する。

金色の刃のクナイを構え、カブトは再びワームへと向かっていった。

カフトと紅の門番小娘（後編）（前書き）

思いのほか難産でしたが、まあ一つ

カブトと紅の門番小娘（後編）

/ 0 4

これは、男の方の分が悪いな。

それが戦闘を横から睨む美鈴メイリンの感想だった。

装甲を脱ぎ棄て、速さは増している。しかし、体を覆う鎧が薄くなった分、打撃のダメージが通りやすくなっている。

単純な攻撃の速度は自分　及びそれを模した白色の化け物を上回る。だが、技術を組み合わせれば別だ。

男の動きから何ぞかの武術か体術かを納めている事は読み取れる。錬度も十分だし、実戦経験も不足してはいないと見える。しかし、人間を遥かに上回る時を生き、研鑽を積んだ美鈴と比べれば、まさに大人と子供だ。

確かに攻撃の速度は“脱皮”キャスト・オフするより増し、美鈴の拳速を軽く超えている。

そうだとした　ただ、それだけだ。

元来、中国拳法は拳闘ボクシングなどと異なり、連続的・持続的に素早い攻撃を行うものではない。

そんな武を修めていれば、必然的に自分以上の速さを持つ者と死ぬ事だつて多々ある。

長く生きるうちにそんな類の経験を十分に積む事となった彼女にとって、単純な速度で上回られる事程度では苦にはならないのだ。

不得意な遠距離から一方的に攻撃されるとか、奇怪な能力を使われるとか捉える事すら不可能な速度で攻撃されない限り、逆境と云うのは生まれない。

拳の範囲外からの攻撃と云つても先ほどの様な、謂わば“点”での攻撃ならば、さほど問題ではない。

見た処　姿を変えると云うのは奇妙だが　おそらくは人間で、それも外来人。

山（こう言えば幻想郷では妖怪の山を指す）の神社に来た巫女のように能力を持った外来人もいるが、殆どは何の能力も持たず、妖怪に遭遇してはただ食われるだけと聞く。

外の世界に、幻想は最早存在してはいないと言っても過言ではない。

正しく“幻想”
嘗て在ったが、今はもう消えてしまったもの
なのだ。

攻撃を往なしつつ放たれる、美鈴の姿を真似た妖怪の拳が赤い鎧の男を弾き飛ばす光景を目の当たりにし、美鈴は男が能力を持たない事を確信した。

今のは、綺麗に入った。

自身の劣化コピーとでも言うべき妖怪も、漸くあの鎧を徹するのに丁度良い波長の気を覚えたのであろう。

真紅の鎧の男が、地面に両膝を屈した。

うーん、これなら自分が戦った方がいいんじゃないかな……と、眉を寄せた美鈴が踏み出す。

すると片膝をついて立ち上がった男が、痛みを押し殺すかの如く息を絞り心底残念そうに呟いた。

「どこまで出来るか試したかったが……そうも言ってもらえない様な」

どうやら、男はまだ実力を総て出していなかったらしい。

それであれだけ攻撃を受けてたらしようがないんじゃないですかね……と、美鈴は頬を掻く。

だがまあ、その考えは理解出来る。

敢えて拳を使わない弾幕ごっこに興ずると云う事を美鈴も行っただ。（しかもその結果負けたりする。と云うかほぼ負ける）

それに、彼は不思議な道具を持っている。明らかに戦闘を目的に作られた物だ。

見たところあの白色の化け物だけに狙いを定めている為、あれを知っていて、何らかの関わりがあるのか。ならばその性質 変化

した対象の能力・経験を模す事　を知っているのも必然。

幻想郷には様々な住人がおり、誰もが（里で暮らすただの人間という例外はあるが）何かしらの力を有する。その戦闘力を模した醜悪な怪物と彼は身一つで相對するのだ。

あのような道具が作られるくらいなのだから、その数も一体や二体ではあるまい。

故に、特別な戦闘能力を有する幻想郷の妖怪（いじむつにん）に自分がどれだけ通用するのかを確かめる必要があるのだらう。

一見論は通るが、それでもあまりに手傷を負ってしまったら仕様が
がない。

ましてや怪物がまだまだ存在するのならば、それこそ体力は温存
するべきではないか。

よほど切り札に自信があるのか、それとも、切り札が有効でなかつた場合に後がないのか。

両方かな……と直感的に捉えながら、鎧に身を包んだ男を見やる。
ゆっくりと金の短刀を構える男。その姿が

クロック　アップ
《CLOCK UP》

罅割れた電子音声と共に、掻き消えた。

刮目する美鈴にも所々に残像を見る事しか出来ない、将に超スピ
ードだ。

（流石にこの攻撃は……厳しいですね）

と、目の前の様子を冷静に分析した。しかもこれは殺し合いで、
男は良く切れそうな短剣を持っている。

自分なら大“気”の流れや、攻撃に転ずる男の殺“気”、それに
経験に裏打ちされた勘を合わせて対処可能。

まあ、対処と云う程大層なものではないが、とりあえず一方的に
やられはしないだらう。

だが、技術も能力も劣化しているあの妖怪ならどうだろうか。

不可能だ。

技術では男に優るが、拳を繰り出す事どころかそもそも反応も許されない様な速度で迫る相手とは同じ土俵に上がれない。

この速度では、一方的な屠殺だ。

趨勢は決したと、美鈴が肩の力を抜こうとする　　が、思いとどまった。

はつきりとした事は言えないが、これまで培った経験に因るものが警鐘を鳴らしたのだ。ここで、戦闘の構えを解いてはならないと果たして　　激しい金属音とともに、金色の短剣が、宙を舞った。

何故と、妖怪変化に鋭い視線を向ける。なにゆえ

構えにはどこか隙があり、気の練りも十分とは言えない。これで刀を弾く事は、それこそ万に一つもあり得ない事。

先んじて運良く振った手が、偶々剣の軌道と交差。数万分の一秒という一瞬にも満たないタイミングを遅過ぎず早すぎず絶妙に捉える。そんな事は、それこそ運命を操れない限り、起る筈がないのだ。だが、現実には、それは起こったのだ。

あるとしたら理由の一つ。あの化け物には、今の男の動き全てが見えていたのだ。

そうすれば余計に気を裂かずに攻撃に集中し、速度を上げる事が出来る。どこに打ち込まれるのかという迷いが生まれず、集中が可能。

こうなってしまうえば、カウンターも決して無理難題ではない。

それでも並みの身体能力、技術ではそうもいかないだろうが……今、あの化け物は生憎と並ではない。自画自賛ではなく、純然たる事実として自分は人間のそれを遥かに上回っている。

性質を知った上でそれでも行けると踏んだのか、それとも知らなかったとでも云うのか。

どちらかは不明だが、結果はただ一つ　　男の切り札が通用しな

かったと云う事だ。

美鈴の偽物が、ひどく邪悪な笑みを浮かべて男を見た。予想が外れるのはどうだ、残念だろう……？ とでも言いたげである。

そろそろ選手交代するか、加勢するかと美鈴は足に力を込めるが、男が再び加速を始める。砂の上で手を引いた様に像を残しながら、男が偽美鈴へと突撃する。

対する紛い物は、拳を握り締める。気も練り上げて纏ってある。

（それは、拙い ツ）

美鈴が叫ぶより速く、再び双方が衝突した。

甲高い音と共に火花が散り、加速から解き放たれた男の姿が視界に収まる。

偽物の拳が男の胴体に。

先ほどの段階で、あの鎧に相性の良い気の波長は判明しているのだ。男は、間違いなく絶命だろう。

だがしかし、男は止まり地を確りと踏むと、拳を繰り出した。命中した怪物の左の肩口から先が千切れ飛ぶ。

これは……どう云う事だ、と目を向いて男を見れば、胴体が自然に肥大化している。肥大化と云うか、胴体だけ、弾け飛んだ筈の装甲が元に戻っているのだ。

「やはり、油断したな……？」

どうやら、ここまでの流れは全て、男の策略だったらしい。

気の波長を覚えさせるのも、加速中に武器を弾き飛ばされるのも、相討ち覚悟で捨て鉢の攻撃を行ったのも。

どれも総て男の描いた絵図通りだったのだ。

美鈴ほどの使い手なら、波長など覚えずともそのまま気を徹す事が可能だが、あれはそうも行かなかった。だから何度も打たれることでの脱皮姿の波長を覚えさせ、覚えたそれを使えばダメージを

与えられると思わせた。

馬鹿の一つ覚え（この場合は正にそれだ）的にそれを使わせる為武器を弾き飛ばされたのは、加速なら殺せると思っていたがそうはいかなかった、そしてそれで追い詰められてしまつて自棄^{やけ}になつたと思わせる為。

また、武器があるならリーチが伸びる為にそれを避ける事・受け止める事など防御や回避を考えさせる　つまり警戒させてしまう。敢えて武器を捨てる事で攻撃への注意を蔑ろにさせた。

そして最後に、最早打つ手がないから捨て鉢で相討ち覚悟の攻撃を行うと思わせる事で、油断を誘つた。

どうして、なかなか面白い。

だがそれはいいとして……あの速さで背面に回ればあっさりと倒せたのではないか。

目で追う事が出来ても、体はそうもいかない。構えそのままに腕を突き出す事は出来るが回り込まれたら流石に間に合わないだろう。何故わざわざそんな効率の悪い事をしているのか……と、思えば硝子や錆びついた金属を擦り合わせる音と共に、偽美鈴の周囲の大气が揺らぎ、その姿が変化^{ワーム}した。茶褐色で、全体的にフォルムが丸いが怪物。どこか“虫”や甲殻類を思わせる造型である。「うわ……嫌だなあ、私の姿からあんなのに変わるなんて」

と、美鈴が洩らすのと同時に、怪物^{ワーム}の姿が消えた。

《クロック アップ》

続いて、男も見えなくなった。

あの、加速である。両者共に超高速の世界に突入したのだ。なるほど、これがあるからあんな回りくどい手段をとったのか。

もしそのまま躲す事の出来ない攻撃を繰り返せば、敵も同じ様に加速するだろう。加速した者同士、その速度に差異がないとするなら、その動きの中でもやる事は通常と同じ。

あの女は両腕が健在だった。

常人なら片腕が無くなった後に生える事はないので、片腕の戦闘経験は無いと考えていいが、あの女は妖怪。常軌を逸した再生能力を持つと聞いている。

恐らくは片腕を失った上での戦闘経験もあるだろう。

一番大きいのは成虫　シャコの特性を持つ、謂わばオドントダクテイルスワーム　への変貌だ。

類似する部分はあるものの、明らかに人体と異なる点が存在する。肥大化した腕がその最たる例だ。

他に肘や膝、尾？部からは突起が伸びる。腹部には畳まれた節足が多数存在。口腔部からは髭が伸び、前頭部からは紫色の触角が目玉は左右に飛び出している。

これら特徴の所為で、あの女の武術の経験が上手く活用出来ない造りが違えば当然動かし方も異なる。

もしこれが本妖^{ほんにん}ならば簡単に順応するだろうが、完全に本妖^{ほんにん}そのものをコピーとはいかない様だ。

流石は妖怪と言ったところか。

対象者に完全に擬態するワームでも、その能力を十全に再現出来ないらしい。

後ずさったワームが、それでも負けじと突進してくる。

その攻撃をいなし／機械音声　《ONE^{ワン}》＝処刑開始の合図。

返す刀で拳を打ちこみ／機械音声　《TWO^{ツウ}》＝カウントダウン。
ン。

距離を詰めつつもう一撃／機械音声　《THREE^{スリー}》＝無慈悲に最後を告げる。

逃れられない死に抗おうとするワームに回し蹴り／ゼクターホーンを倒す。

背を向けた天道の背後で、ワームが立ち上がる気配。

「ライダー……キック」

眩き、ゼクターホーンを戻す／機械音声 《ライダー RIDER KキI

CK《ッ”必殺”の証明。
ゼクター内部に溜まったタキオン粒子が頭部で突き出るカブトホ
ーンへ。

同じ様なタキオン粒子が重点・放出される音が後方から響く。ど
うやら、あのワームもチャージアップ可能な様だ。

面白い。

ホーンまで伝達されたタキオン粒子が、足先へと下りる。同時に、
必殺を狙ったワームが飛び掛ってくるのを感じた。

瞬間、上体を倒した天道Ⅱカブトの回し蹴りが、オドントダクテ
イルスワームの頭部を捉えた。脚部で波動に変換されたタキオン粒
子。波動は波紋となり、ワームの体を紫電となって駆け巡る。

人事不省といった様子で蹈躑を踏んで、カブトから遠ざかって行
くオドントダクティルスワーム。

ゆっくりと擡もたげられたカブトの右の人差し指が、天を示す。

《クロック CLOCK オーバー OVER》

そして、正常な時間流への帰還を告げる音声と共に、緑色の放射
爆発が。

その体を構成する原子全てが崩壊したオドントダクティルスワー
ムはこの世から完全に消滅した。

「……こんなところか」

そう呟く、仮面の下の総司の顔は苦い。

確実に仕留める為とはいえ、思った以上に攻撃を受けすぎた。気
を抜けば、膝をついてしまいそうなほどに。

不承不承辺りを見回し、弾き飛ばされたカブトクナイガンを捉え
たその時だった。

先程まで、自分の戦いを見守っていた中華服の女が、自分目掛けて凄まじい速度で飛んで来る。

痛む体を堪えて受け止め、女が飛来した茂みを見やると、そこにはもう一体のワームが。

自分の倒したオドントダクテイルスワームの色違い。だが、その体はより凶悪なものである。

鋼色のボディの、その拳は先程の者よりは小さい。いや、腕が太いために相対的に小さく見えるのだ。

総司に受け止められた中国風の妖怪が、すみませんと頭を下げた。「どうにもさつきから変な殺気を感じて　あ、洒落じゃないですよ　探してみたら、案の定居まして」

女が、面目なさげに右手で頭を掻く。

「一撃入れたら、カウンターで向こうからも貰っちゃいましたよ」両の足で地面に立つ女の左肩の肉は破裂し、その骨が体外へと露出していた。

「……そうか」

頷きながら、女を庇う様に並び立つ。

視線の先のワームも女の打撃で小さくないダメージを負ったのか、距離を詰めあぐねている風に見える。おそらく、このワームも女に擬態している。そして戦闘を眺めていたと云う事は、自分の行った先の奇策も認識している。

この、消耗した自分が無手で勝てる相手ではないだろう。

クナイガンが必要だった。

だが、遠い。

取りに行くにしても、自分がこの女から離ればクロックアップして距離を詰めてくる事は想像に難くない。

そうなれば、対処出来る自分は兎も角　女は、無事では済まない。

動きようがないのは、こちらと同じだった。

「あー」

「……なんだ？」

「私なら大丈夫ですよ。こう見えても鍛えてますから」

そう言って笑った女の、崩壊した組織の再生は始まっている様だが、直ぐに回復とはいかないだろう。

左腕が肩から千切れかけている。常人ならば、そのショックで死亡してもおかしくはない。

それでも平静に努めようとするその様が、痛々しかった。

「必要なんですよね、あれ」

ワームに意識を向けたままに、女がクナイガンに顎を向ける。

「取りに行ったらどうですか？」

回収しに行く事が意味するところは一つ。

答えられず、無言で佇む。

そんな総司の頭に、衝撃が走った。女が左手で総司の頭を殴っていた。

「何を考えているか分かりますよ。でも生憎、私はそんなに柔^{やわ}じやありません」

そのまま、続けた。

「人の心配するより自分の心配をしたらどうですか？ もう立っているのもやつとでしょう？」

凶星だった。仮面の下で苦々しく眉を寄せる。

そこへ、再び衝撃。

総司に真っ直ぐに目を向ける女。先ほどまでの穏やかな佇まいとは違った。全身が、気で満ち溢れている。

「紅魔館の門番、なめないで」

動かして傷口が開いたのかその痛みに涙目になりながら、女が、それでも力強く言った。

その言葉に、総司は決意する。

「お前、名前は……？」

「^{ほんめいりん}紅美鈴です。あなたは？」

「天道、総司」

「そうですか。じゃあ……」

女　美鈴が腰を沈める。

天道も同様に、足に力を入れた。

「お願いしますね」

「ああ。お前もな」

その言葉を契機に、二人は地を蹴った。

だが、ワームの行動は総司の想定していたものと異なった。

拳を突き出しながら、光の球を放ったのだ。並みの大きさではない。以前見た魔理沙の魔砲に相当するほどの気弾。

幻想郷に生活している以上、美鈴も弾幕　遠距離攻撃は可能だ。その事は魔理沙からも聞いていた。不得手だと云うのも。

万が一ワームが弾幕を使用したとしても本人のそれには劣る。美鈴が撃墜する事も、当然出来る筈だ。ならばこの方法をとる可能性は低くなる。

だが、それは間違いだったのだ。

ワームの砲撃は素早かった。両手に漲るタキオン粒子で補ったのか。

美鈴も顔を苦くしながら同じ攻撃で迎撃を試みたが、即座に放った以上、気の充填が不十分であり敗北を余儀なくされた。それでも総司がクナイガンを手にするまでは押し留められ、多少なりとも威力を減衰させた。

しかし、相殺出来なかった分のエネルギーが盛大に爆ぜ、粉塵を巻き上げる。

その、煙の中から奴はやって来た。

クロックアップ始動の為に腰へと伸ばした手がスラップスイッチを叩くより先に、カブトの体が宙に撥ね上げられる。

そのまま足場の無い空中で、しかも視界も利かない中、様々な方向からの打撃がカブトに襲いかかる。

「天道さん！」

叫びと共に、虹色の気弾が煙を裂いた。

如何にしてワームは直ぐ先も見えない粉塵の中で天道に攻撃出来たのか、その答え。

美鈴に擬態したワームは彼女と同じく、気で天道の位置を理解したのだ。

ワームは美鈴の射撃を軽々と躲し、腕を突き出し隙のある彼女へと向かって行く。

逃げる。

そう吠える時間すら与えられず、無慈悲にワームの腕は美鈴を貫く。

頭に浮かんだそんなヴィジョンは、完全に否定された。クロックアップしたワームのボディへ、美鈴の肘鉄が叩き込まれたのだ。

全くの予想外。ワームも同じだろう。

更に勢いのままに回転する美鈴の体からは鳳仙花の様な弾幕が飛び散る。紅と黄の、花弁を思わせる弾幕に、ワームは堪らず距離を取った。

形勢不利と見たのか、ワームは林の中へと飛びずさり去っていった。

「ふう」

着地したカブトに、美鈴がどうだと言わんばかりに親指を突き出した。

「言ったでしょう？ 紅魔館の門番をなめないでって」

「……その様だな」

「食事の準備は出来ています。お早いお目覚めを」
「……………あなた、誰？」

「…………イクサ？」

「ええ、神の使いや太陽の化身と考えられるわ。その名の通り戦^{イクサ}の神かも知れないけど。貴方、心当たりはあるかしら？」

「残念ですが…………御座いません。パチユリー様」

「太陽と月が顔を合わせる事は無いだと？ いや、ある」

「そんな言葉…………！」

「まずは俺が証明してやろう。太陽と月は決して相容れぬ存在ではないとな」

次回、月と太陽の境界

天の道を往き、総てを司る。

カブトと紅の門番小娘（後編）（後書き）

前回・今回登場のオドントダクテイルスワーム。オリジナルのワームです。

以前どこかの書き込みに、白サナギってウカやカッシスみたいな甲殻類上位種ワームになるんじゃないかというものがありまして、それを使わせていただきました。

本編で碌な説明もなされず、以後登場しない白サナギ。せっくなのでこういう形で登場させましたがどうでしょう？

カブト本編で神崎士郎を殺した以外に碌な活躍をしなかった白サナギ。彼への供養になっただろうか。いや、矢車さんをやさぐれさせる原因になったという活躍もあるが……。

月と太陽の境界（前編）

/ 0 1

紅魔館、地下。

月の光すら届かないその場所に、少女は居た。

悪魔の妹　フランドール・スカーレット。紅魔館の主レミリアの妹にして吸血鬼である。

体つきも顔つきも幼く、およそ十歳前後ぐらいにしか見えないが実際の所、歳は四百九十五　だったのは紅霧異変の時　今では五百歳を少し過ぎるほどだ。

その顔を悩ましげに歪ませ、フランドールは目覚めた。

「咲夜……？　ちょっと眩しいわ」

瞼を擦りながら、蠟燭に火を灯した人物へ批難がましくその真紅の瞳を向けた。

だが、返答の主は咲夜ではなかった。

「食事の準備は出来ています。お早いお目覚めを」

「……………あなた、誰？」

低い声。

起き抜けでばやける視界では、声の主を捉える事は出来ない。判るのは咲夜でないと云う事と、相手が男だと云う事だけだ。

紅魔館には男は居なかった筈。では、これは誰だろうか。

「フランドールお嬢様の執事です」

「……………私の？　執事？　メイドや使用人じゃなくて？」

ええ、と男が首肯した。

「人間？　妖怪？」

「人間です」

ふーん、人間か。

話している内に、だんだんと見える様になってきた。

燕尾服に身を包んだ癖つ毛の男。整った顔立ちをしていて、スラ

リした長身。

背筋を伸ばして、涼しげにフランドールに眼差しをやっていた。

「執事ねえ……」

お姉様^{あいつ}にでも頼まれたのかしら、と身を起こす。すると男が近付いて来て、フランドールの髪に手を伸ばした。

もう一方には、櫛。髪を梳かすつもりなのか。

別にいいわよ、と手で払うと男は、

「淑女たる者、身嗜みには気を払わねばなりませんよ」

と、髪を梳^すき始めた。

他人に髪を触られる気恥ずかしさに、うー……とフランは沈黙。

男は手馴れた様子で髪を整えていく。手際はよく、フランの金糸の様な細く滑らかな髪を痛める事はない。

生まれて初めて人間の男に触れられる何とも言い難い感覚に、フランは当てもなく口を開いた。

「えーっと……」

「なんで御座いましょうか、フランドールお嬢様」

屋敷では珍しい呼び方だった。

基本的に姉のレミリアと区別する為か、“妹様”と呼ばれているのだ。

自分だけの執事、だからだろうか。

この男は姉にはなんと呼びかけるのだろうと考えながら、頬が緩むのを覚える。

何か、話題は。

「そうだ！　ねえ、名前は何て言うのかしら？」

すると、男はフランの髪から右手を離す。

ちよつと残念そうに上げた声が、

「私は……天道を往き、総てを司る男。天道総司です」

と云う男の言葉に掻き消された。

「ふーん。知ってると思うけど、私はフランドール・スカーレットよ」

長いからフランでいいと告げると、総司は「そうさせて頂きます。フランお嬢様」と答えた。

そのまま髪を片側に結わえつつ、総司は再度食事の用意が出来ていると告げた。

しかし、どこにも見当たらない。その事を問いかければ上にあるとの事。

「えー……ここじゃダメなの？」

総司が首を振る。

曰く、食事とは神聖な時間。家族ならば共に食事を取るべきうんぬん。

その言葉に、憂鬱な気分に見られるのを感じた。

「さあ、フランお嬢様」

促す様にフランのいつものフリルの付いた赤いスカートとシヤツをベッドに置く総司。そのまま、フランのネグリジェに手を伸ばした。その手を、躲す。

着替えくらい自分で出来るからと言えば、総司は黙って一礼しドアに向かう。

「では、外でお待ちしています」

頭を下げると、扉が閉まった。鉄の、冷たい扉。

重たく響く音が自分の心情を現している。そんな風に思えた。でも、ここは総司に免じて……と沈む心を奮い立たせる。

衣擦れの音だけが、冷たい地下室に存在していた。

ナイトキャップを被り服を調えると、部屋の外に出る。直立不動だった総司が、追従してくる。

「ねえ、総司。太陽と月が一緒になる事ってあると思うかしら？」

「それは」

振り向きながら笑いかけ、続きを遮るフラン。

「何でもないわ。忘れて」

そのまま、思案顔の総司を従えて廊下を進んで行った。

総司が引いた椅子に腰掛け、長机に目をやる。

見た事のない料理が並んでいた。自分の“食事”はいつも、紅茶かケーキの形を取っていた。

他に腰掛けるのは紫色の緩やかな衣服に身を包んだ少女。ほぼ地下の図書館から動かないパチュリー・ノーレッジだ。不服とでも言いたげな半眼を本に向けている。

他に、赤い髪 of 妖怪、紅美鈴^{ほんめいりん}。門番と云う立場も相成り、彼女と顔を合わせる機会は殆どない。それに、門番なのにこんな場所に居ても良いのだろうか。

そして 自分の姉のレミリア・スカーレット。冴えた空気の月を思わせる青みがかった銀の髪に、蝙蝠そのものと云った様の羽が特徴的だ。

姉からやや距離を取って、メイド長の十六夜咲夜^{いざよひ かつや}が控えている。

「で、これは何かしら？ 咲夜」

「見ての通りサバの味噌煮ですわ。それに中華風冷奴に、温野菜のサラダです」

「私が言いたいのはそう云う事じゃないわ。そんなのも判らなくなつたのかしら？」

「嫌ですわ、お嬢様。判っていますよ、勿論」

レミリアが眉を寄せながら額に手を添える。

「吸血鬼が鯖味噌に冷奴って……」

風情の欠片もないわ、と目を閉じながら零すレミリア。

誇り高き吸血鬼と云う思いからかそれとも性格からなのか、姉は形や体裁に気を使い優雅に振舞おうとする。

確かに自分たち吸血鬼にはこの様な……よく言えば純和風の家庭的な色の料理は似合うとは思わない。姉の懸念も尤もであろう。

「ふん」

と、傍に立つ総司が徐に天を指差し、言った。

「おばあちゃんが言っていた……『食べ物が出てきた瞬間が、一番美味しい』とな。兎に角食べて、それから言え」

尊大な総司の物言いに姉は微笑を浮かべつつ眼差しを向ける。

「総司、貴方は屋敷の主に対する口の利き方を知らないのかしら？」

「言った筈だ。俺はあらゆる組織に属する心算はないとな。俺の往く道は俺が決める」

「確かにそう言っていたわね。まあ……食べれば判るか。貴方の様な言い方をするなら『ツユの味は見ただけではわからない。見かけにだまされるな』ってところかしら？」

「ほう、分かっているじゃないか」

「分かっているとも言いたい事はあるのよ。執事をするからには覚えておきなさい」

悪戯っぽく笑う姉。

「……で、話は終わりなの？」

パタン、と本を畳んでパチュリーが面倒そうに聞いた。気だるげに箸を持った手を、目の前の皿に近づけて行く。

その行動を、総司が言葉で制した。

「何よ？」

「『いただきます』と言え。『感謝』が必要だ……食材と料理人に対する『感謝』がな」

「……随分ともったいぶった喋り方ね。レミイが二人に増えたみたい」

「あら。随分とパチエの中で総司の評価は高い様じゃないか。良かったな、総司」

ふふん、と鼻を鳴らしながらレミリアがパチュリーを見て口端を吊り上げる。

当然だ、と誇らしげに天を指差す天道。

鼻白む言動に何を言う気力もなくなったのか、そんな二人を温度のない目で見るパチュリー。

力なく笑う美鈴が切り出した。

「えっと、じゃあいただきます」

皆もそれに続き、鯖に箸を付ける。

自分に配慮してなのか、鯖からは骨が全て取り除かれている。尤も、鯖がどう云う魚なのかはよく知らず、骨があると云うのも伝聞にしか過ぎないのだが。

覚束ない様子で解した鯖を口に運ぶ。

おいしい。

総司があれだけ自信を持っているだけの事はある。今まで食べたどんなものとも違う温かさだ。

目を配れば、皆一様に驚き、笑っていた。

「なるほど、確かに良い料理だわ」

「私もこんなのは初めて食べました……あ、違いますよ！ 違います！ 別に今までの咲夜さんの料理に不満があるわけじゃないですから！ 痛い痛い痛い痛いッ！ 本当にすよう！ 信じてください！」

それぞれの反応を満足そうに眺めた総司がレミリアに視線を向ける。

「確かに豪語するだけの事はあるわね。この点に関しては認めるわ」

「当然だ。この俺が作ったんだからな」

貴方だけじゃないでしょ、といつも音も気配もない移動で美鈴の左肩を掴んでいた咲夜が、総司を睨む。ここまで決定的なのは自分の御蔭だと言わんばかりに不敵に咲夜を見る総司。

それでも、二人ともどこか楽しそうだ。

いつもと違う、“温かい”食事だった。

嬉しい。皆で食卓を囲むと云うのはこんなに良いものだったか。

食事の温かさが、心にまで満たされていく様だった。これが、おいしいさの理由なのだ。

「そう言えば……貴方、イクサと云う名前に心当たりはある？」

黙々と箸を動かしていたパチユリーが、皿から視線を上げた。

「……イクサ？」

「ええ、神の使いや太陽の化身と考えられるわ。その名の通り戦の神かも知れないけど。貴方、心当たりはあるかしら？」

「残念ですが……御座いません。パチユリー様」

そう、と呟くとパチユリーは再び皿に向かう。

「何かあつたんですか？」

咲夜が聞いた。

パチユリーが、緩慢に顔を上げる。

「魔理沙が持ってきた外の世界の本に『妖怪ボタンむしり』と云うのが居るらしくてね。何でも『その命、神に返しなさい』と言いなから悪人を執拗に追廻し、その服のボタンを筆記取るらしいわ。」

他にも『イクサ』とか『753』だとか云う名前もあつて……思

うに『イクサ』は戦の神。ナゴサンは名古屋山三郎なごやまさんろうの事を現しているんじゃないかしら。名古屋山三郎は槍の名手として知られているから、戦の神に結びつけるのも頷ける。

きつと、余程自分の力に自信があるんだわ。白い太陽を思わせる姿に形を変え、怪物と戦っているのも目撃されている。太陽神と云えばやはり槍を武器として使うものも居るし、得てしてその力は凄まじいものだから、戦をするに十分な力を持っているでしょうね。

ボタンも丸くて多くは光っているから太陽の暗示と考えて良さそう。

命を神に返すと云う表現からも、彼は神に近しい立場に居ると想定出来る。きつと妖怪と云うのは、その奇妙な力から外の間人が誤解して、そこから広がったんじゃないかしら」

いつも通り、早口で小声であつた為にフランにはその内容が殆ど理解出来なかったが、どうやら幻想が存在しないと云って良い外の世界にも、まだそんなものは存在しているらしい。

外の世界は完全に幻想を捨て切っていないのだろう。

美鈴の「なんだかナマハゲみたいですね」という言葉で、その話

題は締めくくられた。

適当に談笑しながら、料理を平らげていく。

総司と咲夜はその様子に目尻を下げながら、満足そうに見守っている。

野菜のサラダも、中華風豆腐もとても美味だった。だが、どこか物足りない。

フランは満たされた気持ちになりながら、頭のどこかでそれが何なのか探っていた。

「どうぞ、妹様」

トン、と目の前に食後の紅茶が置かれた。

咲夜の入れた紅茶を飲む。芳醇な紅茶の香りと共に、いつも自分が味わっていた鉄っぽい匂いが口の中に広がった。

やはり。

先ほどの鯖、総司の作った料理には血が含まれて居ない事に気付いてしまった。

人間である総司にはそんな事は出来ないのだろう。当然と云えば当然だ。

今までの食事を台無しにする様な茫洋とした陰鬱な気分に見舞われたフランドールは、席を立った。

「……ご馳走様」

付き従おうとする総司に左の掌を向け、テーブルを指差す。

「ちゃんと後片付けもしないと、良い料理人って言えないんじゃないの？」

それでも食い下がるうとした総司へ、更に言葉を続けた。

「紳士たるものそう云うところを疎かにしちゃだめよ。私の従者って言うなら、勿論総司は紳士的で在るべきじゃないの？」

何も言えなくなった総司を置いて、フランは部屋を後にする。

残された紅茶からは、血の香りを乗せた湯気が漂っていた。

月と太陽の境界（後編）

/ 0 2

残った皿を片付けながら、咲夜は隣でテーブルを正す総司を見る。天の道を往き、総てを司ると自称するこの男。今までの仕事ぶりから考えて、決して誇大な自尊ではないと理解出来た。

掃除、洗濯、料理、庭の手入れ（庭の手入れは美鈴の仕事だが、今日は怪我をしていた為に交代したのだ）など、どれも水準が高い。妖精メイドへの指示も完璧で、居るだけで殆ど役にも立たないと言われている普段とは比べものにならないほどの働きを見せた。総司には、統率者の才能もある様だ。

おかげで随分と咲夜の仕事も減った。

いつもは屋敷の仕事をほぼ自分自身でこなさなければならず、所々時を止めて休憩を挿んでいるものの、やはり疲れるし根本的に大忙しだ。

それなのに、今日は時を止める必要すらないほど、荷が軽かった。性格と云うか物言いに問題があるものの（それでも幻想郷では珍しいものではない）、仕事は超有能。

一時的にとは言わずこのまま働いてくれないものか、と視線を送るが当の本人は涼しい顔で掃除をしている。

あくまでも、この屋敷に再び現れる筈のワームを退治する間と云う約束だ。

魔理沙、美鈴、そして総司から幻想郷を襲いつつある新たな異変について聞かされた。

姿形どころかその記憶や能力を模し、元となった存在を殺害するワーム。

明らかに今までの異変とは毛色が違った。とは言っても、咲夜は可能な限りスペルカードで応戦する心算^{つもり}なのだが。なんでルールを守らないヤツの為にこっちまでルールから外れなきゃいけないのか。

そんな筋合いはどこにもない。

その、ワームとこれまで幾度となく戦ったと言う総司。

色々とワームの性質を聞いた結果、咲夜は彼を暫らく屋敷に置く事を決意した。

とは云つても、最終的な決定権は館の主のレミリアが有していたのだが「面白そうだからいいじゃない」と云う鶴の一声で承諾。特に問題なく総司はこの屋敷で働く事となった。

その際のやり取りを思い出せば、頭が痛くなる。

「じゃあ……お嬢様の許可も出たし、暫らくこの紅魔館で使用人として働いて貰うわ」

「待て」

「何かしら？」

「俺は、どんな組織にも属する心算はない。何故なら、俺の器が大き過ぎるからだ」

「……何が言いたいなの？」

「だが、今回ばかりは仕方がない。それにしても、だ。どうせなら執事にでもしろ。それこそが俺に相応しい役職だ」

「……………。だ、そうですが……どうしますか、お嬢様？」

「いいじゃないか、面白そうだし。それに仕事も出来そうだし」

「当然だ。なんせこの俺だからな」

その後、他の使用人を総て集めるとのたまう総司に苦笑する咲夜へ「この男、中々面白い“運命”を辿っている様じゃないか」と笑いかけた主レミリア。

が、天道のあの自己紹介の間、薄く笑って余裕を湛えながら主の背中がピンと伸びていたのだ。緊張か、驚いている証拠だ。

やはり、変人揃いの幻想郷の中でも天道総司は奇天烈過ぎたらしい。

体面を重んじて取り繕う主とそんな主を驚かせた外来人との会話

に、咲夜はカチューシャを押さえ嘆息した。

因みに執事と云うのは主人の身の回りの世話に加えて、読んで字の如く屋敷の管理事業を執行する人間の事だ。

屋敷の使用人（原則的に男。女は女給と言う）の解雇・雇用から帳簿管理、食器や酒類の管理を行う。当然と言ってよいが、ぽつと出の人間に任せる業務ではない。

とは言っても屋敷の男性使用人は当の天道しかおらず、おそらく二・三日で居なくなるので異論を挿む事はしなかった。

お嬢様の我儘・無理難題も今に始まった事じゃなく、いつものそれに比べたらまだ常識的なものである。

結局、お嬢様の目に曇りはなかった。“そう、運命で決まっていたのよ”とでも笑うだろうか。

運命　紅魔館の主、レミリア・スカーレットは“運命を操る程度の能力”を持つ。

自分、十六夜咲夜は“時間を操る程度の能力”を、門番の紅美鈴は目を見張る体術と“気を使う程度の能力”。

図書館で本の肥やしとなっているレミリアの友人、食客のパチュリー・ノーレッジは魔女であり“火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力”を扱う。

そして天道が御執心のフランドールは“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”を有する、吸血鬼にして魔法少女だ。

侵略者、ワームがこの館に目を着けたのも頷ける。

紅魔館は幻想郷のパワーバランスの一角を担う存在なのだ。

他の勢力へは、総司と共に来た魔理沙が帰りがけにワームについての注意を呼びかけて行くらしい。

……と、総司と分担してケーキの用意を済ませた咲夜はこれまでの経緯を思い出しながら肩を鳴らした。

それにしても不可解なのは、総司のフランドールへの対応だ。自分やレミリア、パチュリーへは申し訳程度どころか殆ど敬語を

使わないのに対し、きつちりと敬語を用いて応対している。

聞けば、専属の執事になったそうだ。

執事が屋敷の主を差し置いて別の人間の専属と云うのも奇妙だが、フランドールに対しては他とは違う目を見せている。

フランドールの近くに居るときは、何かを懐かしむ様に目を細めて見守っているのだった。

もちろん男女関係のそれ（言いたくないがそうなら総司は幼児性愛者となる）とは異なり、なんと言おうか、慈愛に満ちた視線である。

兄弟姉妹や親子、肉親が向ける瞳に近い。

「ねえ総司。貴方、家族は？」

人となりはこれまでの言動で大凡あたりが付いたが、その身の上おおよそに付いては全くと言っていいほど分かっていなかった。

この男、自分の事について一度も話していないのだ。

どうやって幻想郷に来たのか、幻想郷に来る前は何をしていたのか、あのカブトムシは何なのか。

別段他人の素性に興味はないが、少し気になったので聞いてみる事にした。

それに、この屋敷に置く以上レミリア達に危害を加える可能性がないか、十分に確認しなければならぬ。

恐らく直接的な危険はない。だが、完全にそう断じてしまうのも軽率と思えた。

が、総司は詰まらなそうに、

「そんな事を聞いてどうする？」

と答える。

「質問を質問で返さないで。疑問文には疑問文で返せと学校で教わっているのかしら？」

眉を寄せながらの咲夜の返答に総司は嘆息。

不承不承総司が口を開いた、その時。

轟音と共に、館が揺れた。

「ああ」

反射的にベルトを巻いて身構えた総司へ、咲夜が目をやって、言った。

「……いつもの癪癪よ。妹様の、ね」

/ 0 3

壁に、クレーターが出来ていた。

足元には縫いぐるみのクマ。尤も既に爆発して原形を留めておらず、その破片も粉と化して消滅し始めている。

どちらも、自分がやったものだ。

吸血鬼の身体能力に、呪われたこの無敵の力。

無敵だった。それ故に、誰とも解り合う事は出来なかった。

人からも妖怪からも、家族からも疎まれるこの力。

一人で居ても鬱屈とした感情が溜まっていくだけ。

それでも、外に出る事は出来ない。今は、出たいとも思わなかった。

「いつそ……」

消えてしまえば良いのに。

考えても、自分の右手に浮かぶ“目”が、自分自身のそれになる事もない。

自殺も不可能。優れた身体能力が、それを許さない。

外の、日光の下に飛び出していけば死ねるが今は夜。それに、皆が外へ出て行く事を止めるだろう。

楽しい事があっても、途端に詰まらなくなる。

逆に心が曇っていても急に晴れ渡る事がある。

思い立てば外に遊びに行きたくてしょうがなくなるし、ついさっきまで外出したかったのに急に何もかも面倒になったりする。

いきなり悲しくなったと思えば、急に楽しくなる。いつもの事だ。

イライラするのは、あんまりないけど。それでもいきなりそうなる。
このまま、もう少ししたら気持ちも治まるのだろうか。

……嫌だ。

自分自身が、ここに居るのが居た堪れなくなる。

自分は変わり者だ。突然変異だ。化け物なのだ。

咲夜とは違う。美鈴とも違う。数居るメイド妖精や小悪魔とも、
パチュリーとも 何よりも姉とも違う。

自分は姉の様に自信もなければ高貴でもなく、人を従える様な力
も持たず、誰の手を取る事も出来ない。怪物だ。

魔理沙や霊夢と会って、色々なものと出会って、知ってからなお
さらその思いが確たるものになっていった。

今ならもう、興味本位であの二人に声をかけたりはしない。

自分の力は異質。少し手を伸ばしただけで、感じただけであらゆる
ものを灰燼に帰してしまう。

この金色の髪も、七色の羽も、心さえも姉とは違う。

同じなのは血を吸う存在と云う所だけ。だから人間とも違う。

人間でもなく、姉と同じでないなら自分はなんなのだろうか。

堂々巡りの思考に囚われて、膝を抱えて座り込んだ。

誰も来て欲しくない。でも誰か傍に居て欲しい。けど殺してしま
う。殺したくない。こんな姿を見られたくない。

……もう嫌だ。

こんな気持ち、早く治まればいいのに。直ぐに忘れられればいい
のに。

いつもは、ちょっと体を動かせば、消えた。
なのに何故。

解ってる。あの男だ。自分の執事だと言った、あの男の所為だ。
簡単にこの部屋に入り込んで、なんでも無い様に接したあの男も。
自分の事を気遣って、優しく接してくれるあの男も。
それでも心の底は決まってる。

吸血鬼を疎ましく思っているのだ。それに自分が恐ろしいのだ。

それだから自分にだけは敬語を使うし、料理に血を入れなかった。一緒だ。

決まっている。他と同じ。全部同じ。絶対的なルールだ。

吸血鬼は嫌われる。破壊の力は好まれない。故に自分は愛されない。望んではいけない。

それが道理なのだ。

零れた水は盆に帰る事なく、太陽と月が決して顔を合わせる事はない。

自分が“きゅっ”と手を握れば、あらゆるものは“ドカーン”と破壊される。

同じだ。決まりきった方程式だ。もう、 $Q \cdot E \cdot D$ 。（証明済み）なのだ。

自分が、誰かと共にある事は在ってはならない、起こりえない事なのだ。

それは解っている。解っているのに、何故。

「……総司」

あの男が。あの男の所為で。

望んでしまう。自分は姉の様になれないのに。自分は違うのに。それなのに……。

「なんでしよう、フランお嬢様」

その男は、何事もないとでも言わんばかりに扉の所に立ってこっちを見ていた。

「なんでもないわ」

口から心臓が出そうなほど吃驚したが、何とか耐えた。勤めて平静な声で、部屋から出て行く様に伝える。

自分で認識出来た。今の自分が少し手を握れば、この男は砕け散る。

そうしたくは無かったが、押さえられない感情があるのもまた事

実。

こんな姿も見られたくはない。

一番、この場に来て欲しくはない　居て欲しくはない人間だった。

「いや、そう云う訳にも参りません」

静かな声。

だが、その言葉が自分の心を一番掻き乱す。

苛立ちが募れば、右手を握ってしまいかねない。自分の感情が制御出来ないと言うのは良く解っている。ちょっとした拍子で破壊の引き金を引いてしまわない、その保障なんてどこにもなかった。

「いいから！　私の言う事が聞けないの！？」

きつ、と総司の事を睨み付けた。

早く、どこかへ行つて。殺したくなんてない。

反射的に弾幕を放っていた。

その弾丸が総司の体に叩き込まれる。当然、あっけなく跳ね飛ばされ、部屋の外へと放り出された。

こんな心算じゃなかったけど、これで解つただろう。自分に近付いてはならないと。

怪我でもしてなければいいが。

よろよると、総司が立ち上がる。着ていたコック服が破れているが、それ以外特に外傷は無い様だった。

安心しながら、扉の外に居る総司へ言い放つ。

「これで分かったかしら？　私は今機嫌が悪いの……放っておいてよ」

だが、総司は頷かず、コック服を地面へと脱ぎ捨てた。

そのまま、こちらに不敵な眼差しを向ける。

「駄目だな。料理服を破った悪い子には、お尻ペンペンだ」

そう言つて部屋へと踏み込んでくる総司。

正直な話、もう限界だった。

近付くなつて言っているのに。傷付けたくないのに。殺したくないのに。

それなのに、何で分かってくれないんだろう。どうして言う事を聞いてくれないんだろう。

何でこんな時だけ。

冗談を言っている場合じゃないのに。ふざけたい気分じゃないのに。

「さっきの……『太陽と月が一緒になる事はない』だったか？」

「それがどうしたのよ!？」

言外に立ち去る事を含めた強めた語気を孕んだ言葉と共に光の弾を打ち出す。

それを、天井を刳り貫いて現れた紅いカブトムシが、全て撃墜した。

甲虫を周囲に漂わせたまま、総司がこちらへと踏み出して来る。

「太陽と月が顔を合わせる事はないだと? いや、ある」

「そんな言葉……!」

「まずは俺が証明してやろう。太陽と月は決して相容れぬ存在ではないとな」

再び飛ばした光弾を弾き返したカブトムシが、総司の掌に納まる。それを

「変身……!」

《HEN SHIN》

腰のベルトに挿すと、その壁みたいに罅割れた声上がり、緑柱石の如き六角形の輝きが総司を覆う。

総司の長身が白銀と赤の鎧に包まれた。

鎧。

鎧だ。やはり、只の人間の総司はこんな化け物に生身で向かい合いたくないんだろう。

あは、そっかあ……。うん、そうだよな。

良いよ、そっちがその心算なら。

「それじゃあ、遊びましょう？」

壊れるまで、楽しませてね？ 総司。

「あははははは」

自分から放射状に放った紅の弾幕を、総司が躲し、切り、払っては撃墜して行く。

やっぱり、こんなものでは破壊されないらしい。当然だ。まだ、全然力を出しちやいないんだから。

折角なのだ。本気で壊すまで、壊れて貰っては困る。

テンポ良く切り払っていた総司だが、壁が近くなって足を止めた隙に、光弾が殺到する。

横に転がりながら躲した。でも、輪状に広がった弾幕はまだ止まっではない。

弾幕ごっこに慣れてはいないのだろう。確かにその身のこなしは見上げたものだが、霊夢や魔理沙、あの天狗に比べ無駄が多い。

起き上がり際の総司に紅弾が突っ込むが、相殺された。持ち替えたその手の短剣から、弾丸が撃ち出されたのだ。

「なんだ。総司も飛び道具があるんじゃない。私に使ったらどう？」
「ここよ、と弾幕を放ちつつ手を広げるが総司は迎撃に使えばかりだった。」

「言っただろう。悪い子にはお尻ペンペンだと」

「ッ！」

この期に及んでまだそんな事が言えるなんて。いいわ、その余裕なんてなくしてあげる。

スペルカードを切った。“禁忌「クランベリートラップ」”。

フラン・総司それぞれの後方の隅に魔方陣が形成される。

それぞれが角を取る様に直進を始め　その軌跡から光の弾が生まみ出され、総司に目掛けて飛んできた。

横っ飛びし、立ち上がる総司へと、周囲を巡りながら更に分裂した魔法陣から紫と青の弾が襲い掛かる。

弾幕の激しさに、総司は回避以外の行動をとれずにいる。

「太陽を自称する割りにはこの程度なの？」

大言を吐くにも関わらず、中身が伴わない。

その事、それ事体は悪い事ではない。弱いのが、罪だ。

弾幕を展開している内に、先ほどの怒りなぞもうどうでもよくなってくる。

実際の所、この男にさしたる中身などないのだ。思わせぶりに面を取り繕っているが所詮は虚飾。ただのパフォーマンスだ。

こんな相手に怒っている事さえ馬鹿らしくなってきた。

そのまま避け続けて、タイムアップ。

もう興味は薄れ、苛立ちも楽しみも弾幕と共に消えた。残ったのは虚無を孕んだ寂寞とした思いだけだ。それすらこんな男から齎もたらされていたのかと思うと、心底下らない風に感じる。

この程度の存在に、何を惑わされていたとも言うのか。

切り上げる様に二三度手を振ると、片膝を付く総司を見下ろす。

「判ったかしら？　総司じゃお話にならないの。早くどこかに消えなさい」

ところが、立ち上がった総司は肯んじるところか、

「フン、今ので弾幕の心算か？　……欠伸が出るぞ」

と、言い放ってくる始末。

こんなのもどうせ、とどのつまりは只の挑発。

何を狙っているのか。所詮はこうやって人のペースを乱す事で主導権を取る事しか出来ないのだろう。

さもない、哀れな男だと感じる。それだけだ。

「あら、そんな空元気なんてコインいつこ分にもなりやしないよ。コンティニューなんてとても出来やしない安いもの。命の値段にも届かない。」

「……命の値段も随分と安いけどね。ま、あなたみたいな小物なら適正価格？」

「コンティニュー……？」

総司の、低い笑い。

「それどころか、俺がいつ被弾した？ この分じゃコンティニューには程遠いぞ」

続けて、

「眠くなる……もつと気合を入れろ！」

鼻で笑ってきた。

そんなの虚勢だ。馬鹿馬鹿しい。不敵に笑っている心算だろうが、マスクの下じゃ苦い顔をしているに違いない。

無様だが、ここまで取り繕うのは寧ろある意味見上げたものだと思う。非常に低俗なものだが。

「最初ので随分堪えた風に見えるけど、寝ぼけてもうそんなのも忘れちゃったのかしら？」

「不意打ちを誇る事しか出来ないのか？ 哀れなヤツだな」

減らず口。減るのは自分の中での評価だけだ。恐らく、もうこんな男に心根が揺さぶられる事もないだろう。

自分を撃つ覚悟もなく、危ないところから逃げ出す事も出来ない、臆病者で虚栄心の塊。

これ以上、心証の悪化の仕様がないうちに、この男はいる。

流石に、もう相対している事も不快だ。

こっちも手加減や、逃げ出す余地なんて与えない。

それで死んだとしても構わない。よっぽどの愚か者だったら、生

きていても仕方がないだろうし。

そうして、二枚目のスペルカードを切った。

“禁忌「レーヴァテイン」” 手に握る悪魔の尻尾の様な黒色

の錫杖に魔力を纏わせ、真紅の大剣に変える。

それで、空間を薙ぎ払う。

総司は辛うじて避けたらしいが、剣の軌跡から生み出された紅の弾が総司目掛けて殺到する。

金の短剣銃で弾丸を撃ち出しながらステップ。右に回避したのを確認して

「そんなのじゃあ、もたないよ！」

レーヴァテインを中段に構えて滑空。横の斬撃。

舌打ちをして宙に逃げた総司の下へ、生み出された追撃弾が襲い掛かる。

当然足場はない。飛べない総司じゃ、喰らうしかない。

生まれる、その隙を逃さない。三度目の攻撃。今度は最初と同じ弧を描く切り上げだ。このまま、切断する。

やはりこの男じゃ、霊夢や魔理沙の様にはいかない。所詮はその程度だ。そんな存在に自分は何故心乱されていたのか。本当に愚かしい。

まあ、少しは楽しめたか。残りは殆ど不快だったけど。

さようなら、ハリボテさん。

心の中で総司に別れを告げ、剣を薙いだ。鎧の姿は無い。蒸発したか。

だが、そんな予想とは裏腹に総司は天井まで退避していた。弾丸の一つに蹴りをいれ、更に高く上昇したのだろう。

「さっきの、太陽と云うのはお前の事か？」

「……それがどうかした？」

レーヴァテインを再発現しながら、天井に張り付く総司を睨み付ける。

「笑わせる。こんな熱じゃ太陽には程遠い……ぬる過ぎるぞ」

「あなたが鈍感なだけじゃないの？ 中ってみればもつと良く分かるんじゃないのかしら！」

言いながら、手を突き出す。総司が剣を引き抜き、天井を蹴ると同時だった。

レーヴァテインの高熱の切っ先が、総司の持つ短刀に直撃する。最早鏝迫り合い等とは到底呼べない代物。

圧倒的な紅の河に、金色の棒を突っ込んだだけ。大きさと力の強さで言えば、比べ物にするのもおこがましいくらいだ。

ところが、総司は押し留めた。

どころか刀身から紫電を棚引かせ、紅の大河を真つ二つに分断して来るではないか。

切り分けられたレーヴァテインが放射状に拡散し、天井に激突。破壊し、熱と煙を撒き散らす。その勢いに押されるかの如く、総司はこちらとの距離をどんどん狭めてきた。

堪らずレーヴァテインを掻き消し、追撃の光の弾で無理やり間を離れた。

空中でぐるりと一回転して、着地。

鎧の所々から煙が上がっているものの、その姿は健在だった。

「偽者じゃ、本物には遠く及ばない……天の道を往くのはこの俺だ」「それじゃあ、その偽者に苦しめられるといいわ。どこまでも進んだら、どっちも同じだって事にね」

次のスペルカードを宣言。

“禁忌「フォーオブアカインド」”。

魔力で生み出した自分の分身と一緒に、縦横無尽に移動しながら紅弾の雨を降らせる。

この手の細かい弾幕には慣れたのか、軽快に躲す総司へ向かって黄色や緑の大きな魔力弾を放つ。

再び、こちらが優勢に立った。

四苦八苦、総司は弾幕を捌いている。

「どうしたの？ 私が判ったらコインをあげるわ！」

なんでもない風に見えて、実は先ほどのレーヴァテインの影響を受けているらしい。動きが精彩を欠いていた。

残りのスペルカードはこれを含めて7枚。何もしないなら、きつといずれ潰れる。

そろそろあの銃を使うだろうか。

それならそれで構わない。今より楽しめると云うものだし、所詮口だけの男で身の可愛さに自身の言葉も踏み躪る人間だと嘲笑出来る。

分身が見抜けずに、自分を気にして撃てないと云うならそれでもいい。

そんな中途半端なやつはこのまま潰れて貰う。大言雑語を撒き散らし、不愉快な人間と顔を合わせて居たくはないのだ。

総司が、金の帯剣を握り締める。

いよいよかと、魔力の濃度を上げる。

しかし、鎧を身に纏った総司は迷わず弾幕を突っ切って来た。それも、本物の自分目掛けて。

四方八方から迫り来る弾幕をその手に持つ短剣で切り払い、遂に自分の許に辿り着く。

「何で、私の場所が……！」

「おばあちゃんが言っていた……『本物を知る者は偽者には騙されない』とな」

天を指差し、総司が言い放った。

今は夜で、ここは地下だと云うのにその指の先に、太陽の姿が見える。

そんな錯覚を振り払うかの如く、叫びながら鎧の“目”を右手の中に発現。

「私の何が解るって云うのよ！」

どうせ壊れちゃうくせに！

右手を、強く強く握り締める。

紫電が奔り、総司が蹈鞬を踏む。

だが、起こったのはそれだけ。総司の鎧は壊れていなかった。

なんで……！？

これは絶対的な法則なのに。決まりきった事なのに。どうして。予期せぬ自体に衝撃を受けるフランへ、総司が右手を突き出す。殴られる。

咄嗟に目を瞑った。だがしかし、思っていた筈の衝撃が自分に降りかかる事はなく、鎧を解いた総司が自分の右手を握っているだけだった。

「フランドール」

「な、何……ッ」

右手を振り解こうとするも、更に強い力で握り締められる。

もっと力を込めれば、或いは振り解けるかも知れない。だが、起き得る事の無い事が起きたのだ。これも判らなくなる。

確りと手を取りながら、総司が屈む。自分に目線を合わせて、言った。

「妹の事を大事に思わない奴なんていない」

「そんな事」

否定か、それとも拒絶か。

何か言おうとすると、遮る様に総司が言葉を被せた。

「俺もそうだ。妹の為なら、どんな事だって出来る」

この男にも、妹が居たのか。

「だったら、なんでこんな場所にいるのよ！？ 妹を一人で置いて良くもそんな事が言えるわね！ あんた」

激昂したフランだったが、総司の目を見たら続ける事が出来なくなった。

何とも言えない寂しげな目をしていたのだ。

短い間だが今までは不敵に自信に溢れる目しか見ていない。こん

な、影を抱えた総司の眼差しは初めてだった。

黒い瞳に反射する自分の姿の、その奥の闇の色に目を奪われた。
フランは理解した。

総司は、妹の為に今の様に命を賭けたのだ。

もう会えないとしても、妹の為に何かを成し遂げたのだ。黒い闇の奥に灯る、一筋の明かりがそれを何より雄弁に物語っていた。

自分は、そんな男になんて事を言ってしまったのか。

申し訳なさを誤魔化す様に問いかける。

「ねえ……総司は、寂しくないの？」

ふっ、と総司が目尻を下げる。

それから、また天を指す。“おばあちゃんが言っていた”と切り出し、

「『絆とは決して断ち切る事の出来ない深いつながり。例え離れていても心と心が繋がっている』とな」

「心と……心が……繋がっている」

総司が立ち上がって、フランの肩を叩いた。

「ケーキがある。食べよう。皆で」

首肯して、総司の後を追従する。

そう云えば……。

「さつき、『太陽と月は決して相容れぬ存在ではない』って言うってたけど、あれは……」

「日食だ」

「日食？」

言葉だけならどこことなく聞き覚えがある様に感じたが、思い違いかも知れない。

あまり印象には残っていないと云うなら、そう云う事だろう。興味がなかったから聞き流したか、或いは見た事も聞いた事もないのか。

「ああ。十数年に一度、太陽と月が重なり合った時に見られる。太陽と月はあんなにも違う風に感じるが、空に浮かぶ二つは一緒の大

きさだ」

「へー」

「お前達姉妹も、それぞれ違う。だが、誰にだって自分とそっくり同じ人間なんていないんだ」

総司が、耳辺りの良い低音で続ける。

「それぞれ違うが、一緒にはなれる。二人ともお互いを思い遣っているんだからな」

自信に満ちた、優しい声色だった。

口を突き出し、溜め息を吐く。

「なんでそんな事が言えるのよ？」

自分でも、嬉しげに言ったと認識出来た。

総司が、微笑を浮かべながらこちらを向く。

「解るさ。何せ俺は」

その言葉を遮って、

「『天の道を往き、総てを司る男だから』でしょう？ 総司もあいつみたいな事を言うのね」

あいつ。自分の、姉だ。

いつもしたり顔で、最初から判っていた振りをするのだ。運命を操る能力があるから強^{あなが}ち嘘でもないんだだろうが。

自分の言葉に、総司の顔がきよんとしていた。

そう云えば、総司の前では姉の事を“あいつ”だなんて呼んではいなかったつけ。

さっきまでの全然動じなかったのに、こんな事で動揺するなんて可笑しいものだ。

「……今の、ナイショだよ」

「ああ、約束だ」

「ところで、これ……結構酷い事になってるね」

自分の部屋の壁の至る所が融解、崩壊していた。ベッドも蒸発し、壁には多くの弾痕が刻まれている。

正直、後で直す咲夜は大変だ。

自分も……大変怒られるかも知れない。自分は兎も角、総司は確実に叱られるだろう。ナイフを投げられる事だつてあり得る。

「……二人とも大目玉だな」

「怒られるのも、一緒だよ？」

二人で笑つて、どちらともなく差し出した手を取つて歩き出す。

天の道……なんだか、自分が太陽とでも言っているみたい。と云うか思いつきりそう主張している。これまでの言葉から考えるに。

御揃いだ。自分の七色に輝く羽も、金色の髪も、伝え聞いた太陽を思わせた。だから、あいつとは全然違ふんだとも思った。

総司のあの言葉は、きつとそう。自分が太陽だと思ふだけの偽物じゃなくて輝く本物になれと言いたかつたんだ。

日食か。一緒に見れるかな。いや、きつと見れる。

だつて今、総司たいうと月わたしが手を取り合つてるんだから、きつと。

これまで長かつたから、今直ぐになんてのは無理だつて判つてる。それでもいつかはきつと、手を取ってくれる。いや、手を取り合いたい。

手を、取り合つて笑うんだ。

「She got married and then there were none...」

いつか、魔理沙が言っていた言葉だ。

総司が何と言つたのか聞き返してきたが、なんでもないと誤魔化す。

強く、強く右手を握り締めた。

/ 0 4

満月が、闇夜を支配している。

幻想郷には特に人工的な明かりも無く、一際大きく輝く月は正に夜の女王と形容するに相応しい。

そんな事を考えながら、天道総司は眼前のワーム達を睨み付けた。隣に立つ紅美鈴が、構えをとった。

あの後フランドールと一階に上がり、咲夜とレミリアから散々に叱り付けられ、デザートの準備を終えたそのときにカプトゼクターが飛び込んできた。

ワームの接近を告げるもの。

予想していたが、早かった。どうにもワームには擬態主を殺害したいと云う本能が強いらしい。

ある程度高等なワームになればそれも押さえられると以前聞いたが、この連中はそうでもないのか。

フランドールとレミリア。

二人が打ち解け合うのにも随分と時間がかかるだろう。

こんな外来人の自分が口を出したところで直ぐに改善するなど都合の良い話などない。

今日明日中に二人が手を取り合って仲良く暮らす……と云うのはあまりにも現実離れしている。

これまで、お互い色々な思いを抱えてきただろう。

それらが総て無になり、何事もなかったかの様に親密に暮らし出す事が起こるほど、現実には生易しいものではないのだ。

フランドールも姉のこれまでの所業に少なからず憤りを覚えていただろうし、レミリアもフランドールに負い目がある。総司には、妹を幽閉したのは必ずしもフランドールを疎んで行われたものではないと思えてしまうがないのだが、しかしやはり多少なりともフランドールの持つ能力に危惧を覚えての結果だろう。

五百年。

言葉にすれば数文字だが、あまりにも重い。

その中でどれほどの感情が生み出され、心に積み重なっていったらうか。

五年、十年互いの事を避け合ってしまったえば関係は決まる。かく言う総司も、七年家族と離れていて、再会したその時妹に自分が兄だ

と名乗り出る事は出来なかった。

妹の為に歴史総てを修正する、その目的で血も滲む様な鍛錬を行っていたのにも関わらず、だ。

七年で、それなのだ。五百年の隔たりと云うのは根深い。人間である総司には想像も付かないほどに。

だがそうだとしても、それが一步を踏み出さない理由にはならない。踏み出すのと踏み出さないのでは、たとえ一步と謂えども大きく違う。

そんなフランドールの一步を阻む権利など誰にも無い。

そんな存在は、排除する。それが自分に今出来る、繋いだ手を寂しそうに離れたフランドールへの何よりの贈り物だ。

「仲良く、出来るといいですね」

隣的美鈴が突然切り出した。

「どうやら、彼女も同じ事を考えていたらしい。」

「やだなあ、何年紅魔館（まじか）にいてると思ってるんですか？ それぐらい考えてますって」

「……そうか」

「天道さんには感謝してますよ。何となく今のままじゃ駄目だっと思って、それを変えるきっかけが無かったから、なにも出来なかったんです」

美鈴が、気の抜けた笑いを浮かべる。

「きっと……パチュリー様も、咲夜さんも、レミリアお嬢様も妹様も、私も……皆何かのきっかけが欲しかったんです。『きっかけさえあれば』……そんな風に言い出せずに過（す）ごしていたんです」

だから……と、天道の方に向いて、

「感謝してます。私も、誰も彼も紅魔館の人間は」

満面の微笑を見せた。

月光に照らされた笑顔は、とても美しかった。

フランドールには随分と辛辣な言葉をかけてしまった。

妖怪といっても生身の少女、そんな相手に変身して挑んでしまった。

どちらも彼女の心を揺さぶって思いを引き出す為に仕方がなかった事とは云え、心に引くかかる。こればかりは、謝ってもしょうがないし、謝る事も出来ない。

贖罪などと宣う心算もない。

ただ、絶対にフランドールとレミリアの邪魔はさせない。

それだけが確たる思いとして心の中心に座り、眼前の敵を捉える。

「それじゃあ……」

「ああ……」

「紅魔館門番、紅美鈴！ 貴方達ワームなんか、一歩もここから先へは進ませません！」

「貴様らなどには……触れさせん。絶対にな！」

《HEN SHIN》

「……世界の破壊者だと？」

「なるほど……大体判った」

「幻想郷を破壊しようとする存在に、容赦はしないわ」

次回、スキマツアーへようこそ

天の道を往き、総てを司る。

月と太陽の境界（後編）（後書き）

次回で、紅魔館編も終わります。

いやー今回は（文章量的に）今までで一番長かったんじゃないかな？

色々所感については活動報告の方にしたいと思います。

それで、次の行き先なんですがおおそ未定です。

ユーザー以外の方も感想を書き込めるようにしているので、出来れば感想と共に行き先のご意見などを出してくれればなあ……と。完全にその通りには出来ませんが、参考にはさせて頂きます。

追記。

上記の行き先は未定、ですが正確には「各勢力のプロットは決めているが次にどこに行くか決めていない」という事でした。

ですが、手を広げすぎても収束させられないので、上の事は無かった事にしてください。

本編は流れを最小限に留めて、プロット通りに進めます。

それでは

スキマツアーへようこそ（前編）

/ 01

「キャスト、オフ」

《CAST OFF》

《CHANGE BEETLE》

カブトへの変身からすぐさまゼクターホーンを倒し、ライダーフォームへと換装するカブト。

弾き飛ばされた装甲がワームへと激突し、爆発を起こす。

裂帛の気魄と共に美鈴が地を蹴った。キャストオフによって足並みの乱れたサナギ体の中央に飛び込みながら黄と赤の弾幕を放ち、無理やりに距離を取らせる。

「こっちは私が！ 天道さんは成虫をッ！」

「ああ、そうさせて貰う」

一方、カブトはこの場で唯一の成虫、オドントダクティルスワーム・スキラウス目掛けて跳んだ。

振り下ろされるクナイガン。それを危なげなく回避するスキラウス。

このワームにも美鈴の戦闘経験が反映されている。

一筋縄ではいかない。

そう認識しつつ、クナイガンを持ち替えるとイオンビームを放つ。が、体から発せられた弾幕によって逸らされ、弾かれ、或いは相殺・撃墜され一発たりとも弾丸は届かなかった。

やはり、強い。

もう既にその身に与えたダメージは回復しているのだろう。動きに全く翳りがない。

この、鋼色のワームは以前戦ったものより一回りほど大きい。恐らくその力は前のもの以上。

加えてもう、搦め手は通用しない。その記憶は既に読み取られてしまっているのだ。

相対する天道はマスクの下で苦々しく息を吐く。

一方のこちらはこれまでの連戦の傷も癒えておらず、体調も万全とは言い難い。条件で言うなら圧倒的に不利。

だがそうだとし^って負けてもよい理由にはならない。

それに、負ける心算もない。

この幻想郷に住まう総ての存在をワームから守る。それにもまして誓ったのだ。フランドールの邪魔はさせないと。

ワームの様な、自分達の様な異邦の存在によってこの世界での平和が脅かされてはならない。

誰もを、総てを守る。

自分、天道総司はその為にここにいるのだ。

(言われなくてもやってやる。初めからその心算だ)

八雲紫と云う少女(尤も、醸し出される雰囲気は少女のそれではなかった)との邂逅を思い出し、仮面の下で天道は吼えた。

頭部を蹴りが掠める。

音速を遙かに超えて繰り出されたそれが生む破裂音を受けながら、カブトは拳を放つ。

だが、容易く躲された。

その回転の勢いのまま、ワームの裏拳が繰り出されるのを曲げた腕で受け止める。

凄まじい臂力だ。

堪らず弾き飛ばされる。地に痕を残し体勢を立て直すカブト目掛けて、更に追撃が飛ぶ。

暴風の如く繰り出される突き。重心を地面と平行に打ち出される、

中国拳法独特の技。

これを受け止めるのはマズイ。一撃で突き下される事も在り得る。ならば、敢えてその威力を逆手に取る。

どこからか取り出したクナイガンの、刀身を水平に構え拳に合わせる。

果たして、生まれる爆発。双方がその重圧に弾かれた。

チャージしたクナイガンの生み出すアバランチブレイクと、同じくチャージされたワームの拳が生み出した無色の衝撃。

紫電を放つ波紋が歪めた空間から、数瞬遅れてけたたましい金属音が夜の静謐に響き渡る。

空中で体勢を立て直し、地を抉り着地。粉塵が巻き上がる。

煙のヴェールを破り、色とりどりの弾幕が押し寄せた。すかさず横へ飛ぶ。もうもうと、削られた地面から舞い上がる塵芥。

カブトホーンの根元、シグナルがワームのクロックアップを知らせた。

この機に乗じて、攻撃しようとするのだろう。以前と変わらない動き。

（お互い……同じ手が、二度も通用すると思うな……！）

《CLOCK UP》

腰のスラップスイッチを殴打。

カブトの鎧に包まれた天道総司の肉体へタキオン粒子が放出される。

皮膚、筋肉、骨髄、神経系、内臓　血管に抽出され、血液とは比べ物にならない速度で駆け巡るタキオン粒子。

総ての音が遠ざかり、舞い上がる土煙の粒子悉くが動きをやめる。この世界で動くものはただ二つ。

以下は弾幕が飛び交う中で起きた出来事である。

カブトが、駆け出した。クナイガンからイオンビームを放ちながら距離を詰める。

同じく弾幕を展開しながら走り出すオドントダクテイルスワーム・スキラウス。

弾を相殺し合い、互いの拳の射程圏内に入る。

攻撃への転身はカブトの方が早い。美鈴もそうだが、幻想郷の少女達は射撃から白兵に移行するまでにやや隙がある。

攻撃の動きに合わせて弾幕を貼る事も可能だ。しかし、純粋な格闘への切り替えには隙があり、同じく格闘から射撃を行うのにも僅かなラグがある。

勿論、カブトとてそうであるが、それでもカブトの方がほんの少しだけ上なのだ。互いの攻撃目標の修正を含めて考えても。

狙うのはそこだ。それが、付け入る隙。付け入らねばならない隙。他にはもう一つ。

繰り出されたカブトの左ミドル。重心移動で紙一重に避けるワーム。

拳を繰り出そうとしたその瞬間、イオンビームで牽制。そしてすぐさま後へ飛ぶ。

やはり、体捌きが悪い。美鈴本人の技量に及ばぬ上に、体の機構が人間のそれとは大きく異なる。

もしこれが単純に拳や足を使う格闘ならば違っただろう。だが、今のワームが模しているのは中国拳法。

中国拳法に於いて拳や足と云うのは左程重要なものではない。

第一は剋。即ち全身の力。重心移動と体捌きだ。

どんな武術でもこれらは実践されるべきものだが、こと中国拳法に於いても拳はあくまでも衝撃の伝達点或いは通過点に過ぎず、必要なのは全身が生み出した力。

肩関節と股関節の一体化、背骨の開き、重力を利用した力の増幅などなど。

あくまでも一例だが、ワンインチパンチ。寸剋とは、言ってみ

るなら拳から接する体当たり。

体重の五パーセント程しかない腕を叩きつけるより、百パーセントをぶつける方が強いのは自明の理だ。

遠心力を御して威力を乗せた拳だろうが、捻って加速させたパンチだろうがそもそもにして二十倍も違うのだから比べるまでもない。そんな中で、ワームの肉体というのはどのように作用するか。

自動車の免許しか持たない人間が船を動かせるか 答えは否。構造が全く違うのだ。はつきり言って、邪魔でしかない。

そして、ここに来て中途半端に美鈴となってしまった事が仇となる。スツカリと肉体に染み付いた技は、最早プログラムと言って良いほど正確に発現する。

だが、ソフトウェアを極めて正確に再現したところで、実行するハードが生み出す結果はまるで異なるのだ。

期待通りの威力とはならず、オマケにバグを生む。

これが、ここまで天道総司が生き延びれた理由の一つだ。

尤も……それでも、何も技を持たないワームに比べれば恐ろしく隙がなく驚異的な存在とも言えるのだが。

その技術と肉体の齟齬 それこそが尤も付け込むべきチャンスなのだ。

もしも本物の美鈴ならば、その食い違いを修正可能だろう。だが、違う。妖怪と云う規格外の存在は流石のワームと謂えども完全に模倣出来ないのだ。

人間の記憶を模倣するワームと、人の記憶から排除された妖怪 そう云う意味では、ワームと妖怪の相性は最悪とも言えた。

だが、

(それにしても 重い)

その最悪を補って余りある能力。たとえ『十』再現出来ずとも、『六』や『七』……ともすれば『一』でもワームの力の底上げには十分だ。

（外の世界の）人間を幾ら模してもワーム自体の力が増す事はない。

元々、こと戦闘力だけを鑑みれば生物としてのポテンシャルはワームの方が上。人類の編み出した技術がそれに加わる事はあっても、あくまでも多少強くなる程度だ。

だが 妖怪は違う。

ワームとして本来持つ力に、妖怪の大いなる力の一端が付与される。存在そのものの特性が変化するのだ。

人間に擬態したワームの遺伝子にも変化が見られる。所々に顕在する人類の意匠 髑髏がそれだ。

人間ですらワームの遺伝子に影響を及ぼすのなら、果たして妖怪と云う規格外ならばどうなるかは最早言うに及ばず。

幻想郷の住人に擬態したワームは、外のそれとは比肩するのも馬鹿らしいほどの“強さ”を有しているのだ。

そしてモンハナシャコの特徴を持つオドントダクテイルスワーム・スキラウスは通常の段階で、ワームでも上位に入れるほどの膂力を持つ。

これに美鈴 妖怪の身体能力が上乘せされるのだ。

突破口が見えたと云っても、非常に細い糸の上。

一撃でもまとともに喰らってしまえば、天道総司 カブトの運命はそこで終わりだった。

全身を駆け巡るタキオン粒子が、神経細胞を破綻させていく。

段々と爆音じみて聞こえるほど心臓の鼓動が高鳴り、それを受け全身の細胞が悲鳴をあげる。

象とネズミの時間は異なる。

生物の体に流れる固有の時間は心臓の大きさ、鼓動の回数によって決まる。

鼓動が速いほど、（他の生き物から比べて）早い時間を生きる事になる。

ワーム、及びマスクドライダーの持つクロックアップは、タキオン粒子によってこれを無理やり引き起こすものだ。

勿論、実際に心臓の鼓動を増させるわけではない。タキオン粒子で体細胞を加速させることにより、異なる時間軸へと対象を切り離す事がクロックアップの本義。

だが、急速に流れる時間が変わった事によって脳が誤認を起こし、事実を後から擦り合わせる様に電気信号をひた流し、心拍数を上昇させるのだ。

そのままでは心臓が壊れるか、それとも時間の解釈を狂わせた脳がいつまでも加速し続けるか　どちらにしても使用者は壊れてしまう。

そこで、影響が及ぶ手前で時の加速を停止させる　これこそが、クロックオーバーの意義なのだ。

この事から必然的に使用者の肉体が健全であるほど加速時間は増し、逆に疲労や身体的不具合があるほど加速時間は減る。

故に、攻撃を受け過ぎてしまうとクロックアップは強制的に解除されてしまうのである。

また、そもそもの生物的特性として会得しているワームと、後付的に得た人類ではクロックアップへの親和性が異なる。

その為に基本的にマスクドライダーシステム装着者がワームに遅れて能力を使用する。

先にクロックアップするのは、相手に使わせないで屠る自身があるか、クロックアップしないとか不都合がある場合だけである。

これらの事を総括すれば　今、天道にはクロックオーバーまでのタイムリミットが迫っていると云う事実が導き出せる。

只でさえ度重なる戦いにより、天道は疲弊していた。

片やオドントダクティルスワーム・スキラウスはほぼ万全の体調。明らかに、分が悪い。

だが、そうだとでも天道総司が諦める理由にはならない。

天道総司は如何なる場合でも諦めない。

七年前、隕石によって家族と離れ離れになり、天道家に引き取られたその日から 日下部総司は、天道総司となったのだ。それはマスク。

日下部総司と云う顔の上には、常に天道総司という仮面がある。ワームと戦う為に、そして家族を取り戻す為に 日下部総司は自分を捨てた。

家族の手を最後まで握れなかった日下部総司から、唯我独尊・傲岸不遜にて完全無敵の不屈の男、天道総司への“変身”。

それが必要だった。

初めはサイズの合わない仮面だった。

だが、やがて、日々鍛えられるうちに天道の仮面は自分自身の血肉と変わらなくなった。

それでも捨てきれない日下部総司が、瞳の中の闇として残った。

だが、今回の 隕石を退ける事でその闇にも光は生まれた。

今の自分は天道総司。

天の道を往き、全てを司る男。闇を切り裂き、光を齎す不滅の太陽。

故に 天道総司は諦めない。

いつ如何なる時でも、運命は味方する。味方をさせる。

その為には自分自身は自分の信じるべきものの味方をやめてはならないのだ。

最早己を殺しはしまい。

フランドールの、紅魔館の味方をする事こそが 今の天道総司

の使命。そして、望み。

その為に、ここで諦める道理はない。理由もない。

放たれ、静止する弾幕を蹴った。

空中を足場にする様な、超立体的な動き。

いかに中国拳法と謂えども 完全なる対空の技は存在しない。

武はあくまでも人間同士、或いは野獣と戦うべきもの。

弾丸を遥かに上回る速度で宙を跳ぶ生物との戦闘など、その理念

に組み込まれる事はありません。

尤も 紅美鈴の“歴史”の中には存在する。

しかし、ワームにそれを完全に再現する事など不可能。

中国四千年の歴史が軽くないのと同じく、中華小娘・紅美鈴の歴史も虫けらに模倣出来るほどささやかなものではない。

既に音を比べるのもおこがましいほどの後方に置き去りにしたカブトが、スキラウスの背部を狙った。

けれどもスキラウスはそれを認識し 美鈴の記憶から最適な技を選択、迎撃を図る。

この速度なのだ。カウンターが決まってしまえば、カブトは只では済まされない。

スキラウスが地を確りと踏み付け

(それを、待っていたぞ)

その瞬間、カブトのクナイガンが炸裂。目標を、千々に砕く。狙われたのは地面。

踏み込む力の行き場を失ったスキラウスのバランスが崩れる。

そこへ、カブトの拳が突き刺さった。

言うなれば ライダーパンチ、だろうか。

硬く握り締められたカブトの拳がオドントダクテイルスワーム・スキラウスの強固な外骨格を粉碎する。

脳漿が噴出し、脳髓を打ち砕くその瞬間に 生体反射とも、迫り来る死の恐怖を払うとも取れるワームの振り上げた手が、カブトを弾き飛ばした。

甲高い金属音を残し、一人と一体は現実世界に帰還した。

《CLOCK OVER》

/ 02

「まあ、多少は楽しめたわね」

完全に治った肩を慣らしながら、美鈴が息を吐いた。

手傷は全く負わず、一方的にワームを殺害。殆どのワームが彼女を模倣したが全く及ぶ事なく、四散していた。

気を込めた一撃ならば、如何なる外骨格であっても関係はない。

寧ろ、これと云った特殊能力を持たず空を飛ばずに襲い掛かるサナギ体など美鈴にとっては恰好の得物だった。

自分自身と戦うと云うのは貴重な経験になるかと思っただが、実力差がこれでは無いも同然。

初めに少々時間が取られてしまったが、それ以降は一方的な殺害だった。

天道はどうしただろうかと、顔を向けたそこに、丁度鎧姿の天道総司が突っ込んで来る。

ひゃつと上げた声とは裏腹に内心は空。反射的にその体を受け止めていた。

「大丈夫ですか？」

「……すまん」

いえ、良いんですよと天道を地面に下ろし、飛んできた方向を睨む。

「あいつは……」

「後一步、と云うところだったが」

カブトの視線を追う。

顔面の半分が砕け、脳髓を曝け出したワームがそこに居た。

両手から激しく、紫色の火花が散っている。ワームが腰を落とし、構えを取った。

ゆっくりと手で円を描き、気を集中させていく。あの型は マズイ。

“極光「華嚴明星」”だ。

美鈴の持つ気による砲撃の中でも最大の威力を持つ一撃。それに、更に奴自身の力を上乘せさせるもの。

受けるのは不利と取った美鈴が、地を蹴ろうとし、天道を見る。

立っているのも精一杯といった様子の天道総司では、躲せない。
紛れもない経験に裏打ちされた武術家の勘が継げる。

かといって、残して逃げる訳にも往かない
美鈴の取るべき行動は必然的に一つ。

ならばせめて以前の様に敗北はするまいと誓い、スペルカードを
宣言した。

「 極光『華嚴明星』」

先ほどのワームのそれを再現する動き。

美鈴の体を気が充足し、駆け巡る。今までで最速、最大、最高密度の砲撃を敢行するべく気を凝縮する。

天道が、何事が呟く。

その直後に大気を砕きながら 紫電を纏った砲撃が美鈴たち目掛けて駆け出した。

血流とは別の経絡が心臓の鼓動を超えた速度で脈を打つ。張り裂けそうなその最高潮で、虎 或いは龍の顎あぎとを現す様に両手を突き出し虹色の気弾を放った。

空中に自らと同色の波紋を撒き散らしながら加速を続け、ついに二つは相対する。

ぶつかり合う二つの塊。

紫電と共に周囲の大気が歪みを立てる。力の余波で地表が引き剥がされていく。

辺りの、音が消えた。

生まれる、突発的な暴風。

爆心地である二つの球体から放射されたエネルギーが宙に浮かぶ破片を粉碎する。

やがて 美鈴の気弾が、負けた。

敵対する気の球を飲み込み、多少は減衰したものの 未だに人を飲み込むには十分な大きさの虹色の破壊球が、最早阻むものは居らんとて天道と美鈴の元に殺到した。

絶望的な光景を目の前にして、美鈴は口角を吊り上げる。

「頼んだわ」

ライダー、キック。

全ての音が上書きされる台風の中で、落ち着き払った天道の言葉と罅割れた 《R I D E R K I C K》 機械音声を聞いた、そんな気がした。

高らかに足を振り抜き、極光に挑む男 天道総司。
紫電を纏ったその足が、馬鹿らしい大きさの球体へと叩き付けられる。

圧力で、天道の鎧が、体が軋みを立てた。地に沈みこんだ足からその凄まじさが伺える。

しかしそれでも、天道総司は一步も引かない。
太陽に挑む飾羽の蛮勇者の如く。或いは、自らこそが太陽と宣言する大いなる恒星の如く。

強大な光を前にそのささやかな棒切れの様な足は喰らい付き、押し留めている。

接触部から逆らうかの様に噴き出す光線。それに対抗せんとて巻き起こる更に強い光を持つ放電。

激しい炸裂音が連続して美鈴の体表を揺らす。
今は全てが轟音に塗り潰され歪んだ世界だが、それでも確かに決によって生まれた衝撃は美鈴の耳朵を打った。

天道を覆う鎧の表面にうつすらと浮き出る、六角形の文様。足先に近づくほど色濃くなっている。

これが、限界なのだと理解した。このままでは鎧が六角形の切片となって弾け飛ぶ。

認識すると同時に美鈴は動いていた。

天道の背中に手を沿え、気の流れを叩き込む。

肋骨、脊椎、大腿、脛骨を通過し 足の甲から放射される、美鈴の、虹色の気。

そして、決着。

光を放つ球体と、光を背負う男との均衡が崩れさる。

果たして 破壊の光球は、その身を主へと叩き返された。
巻き起こる爆発。

世界が音を取り戻すとき、立っているのは 二人だけだった。

「何とか、やりましたね……」

肩を撫で下ろし、美鈴が一息吐いた。

その瞬間、天道が美鈴を突き飛ばした。そして、宙を舞う天道。
幾度となく叩きのめされた天道の体が地に落ち、その鎧が細かな
六角形となり弾ける。

「天道さんッ!!」

叫ぶ美鈴の体を、何かが弾き飛ばす。正体は判っている。ワーム
だ。

しかし、すぐさま体勢を立て直す事は出来ない。予想外の一撃に
加え、かなりの気を消費していた為だ。

そのまま天道の元へと転がり行く美鈴。

入れ替わりに美鈴の居た場所に立つ影 二足歩行するエビ

の意匠 ワーム。

一蹴りにワームが距離を詰めてくる。

美鈴は、死を覚悟した。

だが

「おいたはいけませんわ、お客様」

その行く手を阻む、多量の刃物。

右手にカード、左手にナイフ 非の打ち所のない硬質のナイフ

の様な美貌が映える完璧で瀟洒な立ち姿。

メイド長、十六夜咲夜。

彼女が手を振り下ろすと同時に前後左右上下の空間に固定された

あらゆるナイフが動き出した。

血に餓えた刃。指揮官の意思を汲む優秀な兵隊達。正確無比な銀の雨。月に花開く金属の薔薇。

ゼロから最大加速。

それらが一斉に、夜空に咲いた。

「尤も……うちの使用人達に手を出す様なお客様なんておりません
がね」

人間とは次元の違うワームでも躲しきれない無数の棘。クロック
アップを使用しても同じだろう。

幾つかは回避したものの、それ以上のナイフがワームの体に命中。
人間に出せる速度を遥かに上回ったナイフはその質量も相俟って
無理やりにワームを遠ざける。

ふう、と溜め息をついて咲夜が二人を流し見る。

そして、笑う。

「良くやったわね、美鈴」

そして、嗤った。

「これからは私の“時間”よ」

何事もなかったとでも言いたげに立ち上がるワームに向かって
。

走り寄るワーム。それに向かって殺到するナイフ。

咲夜の能力によって極限まで加速したナイフがワームに命中する。
が、無傷。

銀のナイフではワームに、文字通り歯が立たないのだ。

その様子に口を開き、ワーム目掛けて咲夜も飛んだ。ジャンプに、
極めて低空の飛行を組み合わせている。

近接し、血を思わせる紅を纏った斬撃を叩き込むが、その装甲に
傷を付ける事は出来ない。

咲夜の与り知らぬところだが このワームは地球に棲むエビに
似た能力を持つキヤマラスワーム。

特に深海底での戦闘を得意とし、それ故他のワームに比べ、外圧には強いのだ。

投擲される刃が欠けたナイフを防ぐ事もせずに突撃するキャマラスワーム。

勢いを殺す事も出来ない事実へ硬直する咲夜に向かって、右腕三叉に分かれ一部がハンマーの如く変形した鉤爪を振るった。敵前で硬直するとは、大いなる……致命的な隙。

咲夜の体が切り裂かれる。

そう、キャマラスワームは認識したが

現実違った。

腕は空を切り、カードが一枚。
かいな

空に佇むスピードのジャックが嘲笑の眼差しを向けていたのだ。

「それと“置き土産”ですわ」
サービス

ジャックの一つ目をナイフが射抜き 三百六十度全方向に置き去りにされたナイフと共に、キャマラスワームの体に激突した。

だがしかし、その一つとてキャマラスワームの外装を傷付けるには至らない。

背中から突き出した悪魔的な三対の触手も、歪に肥大した右手も、腰から大臀部を覆う装甲も、脆弱そうな印象を受ける黒い関節部も全てが咲夜の攻撃を拒絶していた。

何事もなかったかの様に咲夜へと向き直るワーム。

流石に辟易した咲夜の言葉遣いも、ぞんざいなものへと変化する。「やれやれ……ナイフが通らない相手は二人目ね。こうも硬いと私の自信の方がコナゴナにブツ壊れそうだわ」

お互い、決定打に欠ける。

咲夜はワームの装甲を突き破る手段を持たず、ワームは咲夜に攻撃を中てる事が出来ない。

痺れを切らしたのはキャマラスワームの方だった。

クロックアップを発動させると同時に 天道達へと走り出したのだ。

“時符「プライベートスクウェア」”。

スペルを宣言しつつ、退避させるべく天道と美鈴の元に走り出す。そこで、咲夜は信じられない光景を目の当たりにする。

全ての物体の運動が緩やかになるこの世界で、ワームだけは通常と同じ様に行動しているのだ。

ここに 理由として、それぞれの時間操作の特性が存在する。咲夜の時間操作は基本的に“自分以外の物体の時間の流れを遅くする”。

一方、成虫ワーム及びその生体機構を元に作成されたマスキドライダーのクロックアップは“自分の時間のみを加速させる”。

この「プライベートスクウェア」とクロックアップの加速と減速の倍率が同じならば それぞれの時間は、まるで変わらない。

それ以外の存在が置き去りにされ、二人だけが、異なる時間に突入した。

地を駆ける速力はワームが上。

自分の攻撃では、このワームを止める事は出来ない。

その事を理解しつつもスカートから取り出した（スカートの中の空間は拡張されている為見た目以上に収納可能であるのだ）ナイフを放つ。

咲夜の手から解き放たれたナイフはそれぞれがジグザグに軌道を変化させながらワームに纏わり付く。

兎に角、進路の妨害。

鬱陶しそうにワームがナイフを払うが、それ自体の時 状態変化 が停止されており、簡単に破壊されない。

その間に空中を蹴り付ける事を繰り返しワームに追いつくと、思い切り踵から蹴り付ける。

刺々しいワームの体表に咲夜の踝くるぶしが血に染まるが、それは重要ではない。

蹴りによる加速で何とかワームを追い越し、天道と美鈴を左右に

弾き飛ばす。

そこで、初めに設定していた（本来なら制限時間はない）咲夜の時間停止のリミットが、過ぎた。

背後にはクロックアップ状態のワーム。

「『一手』遅れたな」

醜悪な声。

鍵爪の生えた右腕が、突き出される。

“一手”と云うのは戦闘に於いては決定的な隙である。

戦闘者、その技量が高ければ高いほどそれはより致命的なものへと変貌する。

そしてそれを誰もフォロー出来ないのならリカバリーは不能。

別の時空で一対一でキヤマラスワームと戦闘を行った加賀美新の様に、十六夜咲夜は殺害される。

この場に於いて異なる時の流れに介入できる生物は十六夜咲夜とキヤマラスワームのみ。

疲労とダメージの大きい紅美鈴は言うに及ばず、変身が解除された天道総司、その他紅魔館の面子も誰も時間を操作する術は持たない。

十六夜咲夜の運命は決定された。

いや、この運命はいつでも、何処でも決まっているのかもしれない。

即ち 天の道を往き、総てを司る男が覆すと云う事で。

時空を寸断し現れたカプトゼクターが、キヤマラスワームの右腕の軌道を無理やり逸らした。

既に攻撃態勢に入っていた為、完全に逸らす事は出来ず咲夜の肩口、柔肌を傷付けてしまったものの。

そのまま、襲い掛かるゼクターがキヤマラスワームの動きを封じる。

何とかゼクターの攻撃を掻い潜り咲夜たちに向き直るまでに、ク
ロックアップは終了してしまう。

現実　　真実の時間軸への引き戻し。
だがそうだとて、依然として有利なのはキャマラスワーム。
腕を振りかぶり、咲夜達を引き裂かんとし

「　時計『ルナダイアル』。仕掛けさせて貰ったわ。『五秒』の
時点だね」

空中にあつた懐中時計に触れてしまった。
キャマラスワームの時間が極限まで減衰され、ほぼ停止する。
タキオン粒子が体に満ち溢れている為に、体は動かなくても周り
の状況が確りと認識出来る。

即座にクロックアップを再発動し、この停滞から逃げ出さんとす
れば　　勝ち誇った様に静かに、且つ寧猛に嗤う十六夜咲夜。

「そしてやれやれ……終わりよ。貴方の時間も」

その言葉の意味を理解するより先に、強烈な衝撃がキャマラスワ
ームを襲う。

方向は、背後。

貫いたのは、赤よりも尚濃い紅の槍。

「　完璧”だ、咲夜”
　　パーフェクト

愕然と、背後を振り返る。

遠方　　窓際のテラスで嗤う“永遠に紅い幼き月”レミリア・ス
カーレット。

そしてその妹、フランドール・スカーレットが右手を突き出して
いるのが見えた。

「　きゅっとしてドカーン！　ってね」

それが、粉微塵になるキャマラスワームが最後に見たものだった。

/ 0 3

キャマラスワームを退けた人間達を遠目で見る黒いフードの存在。彼、或いは彼女のここでの目的は果たされた。彼女に課せられた術式が、擬態による殺人衝動を押さえつける。もう、この場ですべき事は何も無い。

「天道さん、返事をして下さい！ 天道さん！」

たとえカブトの資格者が倒れていたとしても、その隙を突く必要などないのだ。

あくまでもすべき事は一つ。

命令以外をこなす必要などはない。

フードを払って闇に消えるその顔は
十六夜咲夜そのもの
だった。

スキマツアーへようこそ（前編）（後書き）

所感などは、活動報告の方に記させていただきます。

スキマツアーへようこそ（後編）

/ 0 4

混沌とした意識が覚醒する。

自分は。

「あら、目が覚めたのね」

声がした方に目をやると、金髪の少女が空間に腰掛けてこちらを見ている。

胡乱とした表情で体に触れる。五体満足。傷など、何処にもない。紫を基調とした服装で、手には日傘を持っている少女が怪しげに微笑む。少女、と言う言葉は相応しくないのかも知れない。得体の知れない圧力があつた。

辺りを見回すと、にかわ膠に墨を垂らした様なマーブルの灰色の壁とも幕とも付かないものが展開している。

体を起こすと、軽快な金属音が鳴った。ベルトだ。

あの時、これは手渡した筈だった。今、自分が持っている筈がない。

死後の世界なのかとも思われたが、それにしても感覚がはつきりとしている。詳しくは判らないが、どうやら自分は生きているらしい。

「私の名前は八雲紫。やくも ゆかり幻想郷へようこそ……『天の道を往き、総てを司る男』さん」

少女　八雲紫に目をやり、続きを促す。

今、聞きたい事は山ほどあつたが、一先ずは女の話を最後まで聞いてからだ。

「その、幻想郷とやらに何があつた？」

「あら」

八雲紫が口に手をやる。

あざとい、白々しい動きだ。演劇の様に自分自身の行動を計算し

てやっている風に感じられた。

「どうしてそう思うのかしら？」

簡単な事だ。

「お前は、俺を知っている。恐らく何をやっていたのかもな。そして、ベルトがここにある以上……俺のやる事は限られる」

何故、自分の名前を知っているのか。幻想郷とは何なのか。ベルトがどうしてここにあるのか。消えた筈の自分が生きている理由。

それらは一切不明だ。だが、判る。

自分がする事はワームと戦う事だ。恐らく、幻想郷とやらにもワームが現れたのだらう。もしかしたら、自分がここにいる事と何か関連があるのかも知れない。

「説明しろ。何をやるかはそれから決める」

自分の言葉に、女が嗤った。

静かな、夜の泉に映った月の如き笑み。一見だけでは判らない得体の知れなさが含まれている笑顔。

正体を図りかねる。少なくとも外見相応の年齢ではない。或いは、人間ではない可能性もある。

ワームと戦闘を行う内に、不思議とそう云った機微が判る様になった。行動のどこか、表情のどこか、醸し出される雰囲気のどこかに人間とは異なるものが含まれているのである。

だが、ワームとは考えがたい。

それなら自分と共に、ベルトを置く訳がない。

カブトとなった自分を容易に打破出来る。そんな確信があつての行動かも知れないが、それはあまりに非合理過ぎる。

兎に角、現段階では判断の材料が不足している。正確な結論を導き出すには至れない。

「それじゃあまず、ここ、幻想郷について」

説明が終わったが、それは信じられない内容だった。

人間が　妖怪、妖精、死霊、神　それら滅び去ったもの、現

実に存在し得ないと考えられていたものと共生している世界だとはあまりにも荒唐無稽な話だ。直ぐには信じきれない。泥酔した人間の妄言ですら、もう少し掴みどころがある。馬鹿げていると断じても良い。

だが、自分の勘が告げる　この事は紛れもない真実だと。

そして、それなら説明が付く。

歴史を修正する事でタイムパドックスで消えた筈の自分がここに
いる事が。

しかし、ワームは別だ。

七年前に襲来したワームは元より、自分と共に過去へと移動した隕石も実体のある存在。女の言葉に従うなら、幻想になるには早過ぎる。

誰しもがその存在を覚えている、筈だ。

若しくは自分の行動が総て“無かった事”になったのか。七年前へとタイムスリップした隕石も自分と同じく存在を抹消されたのか。

「……いいえ。それは違いますわ」

思考を読み取ったかの様な女の台詞。

薄ら寒いものを感じる。

「どう云う事だ？」

「貴方の行動によって貴方の世界の未来は確かに書き換えられ、総ての人間は異なる道筋を辿る事となった」

同じ時間に同一の存在が居ると云う矛盾を抱えた貴方以外は、と八雲紫が告げた。

ならば、ワームは何故。

「しかし、歴史を改竄する事によって大きな時空の歪みが生まれた。それが幾つかの影響を齎した」

まず一つ、と女が言う。

「衝突によって死に切らなかった、貴方達が戦っていたワームは三十五年前にタイムスリップし、“ネイティブ”と呼ばれる事になる」次に、と続ける。

「矛盾した存在が、消える筈の存在が“時の狭間”に閉じ込められ完全なる消滅を免れた」

それが貴方達、と傘の先を自分に向けた。

自分も、ここにいるワームも抹消を免れた矛盾した存在　そして、それが幻想郷に現れたのだろう。

だが、自分以外に矛盾した存在が居る筈がないのだ。

ワームは確かに実体を持っていたのだと、目の前の女自身が保証したのだから。

「人間の記憶と云うのは……」

突然、八雲紫が切り出した。

「儚いようで居て、非常に力強いわ。砂の様に至極簡単に零れ落ちてしまう一方で、総てが消滅させられたとしても“誰かが覚えてさえ居れば”元通りに出来るくらいに」

すつ、と八雲紫の目に影が差した。誰からも覚えられていない、追いやられた妖怪の事を想っているのか。

それから軽く微笑み、頬に手をやった。

「空に映る月が消えたら、水面に映る月は消えます」

でも、と区切り、

「月の姿を運んだ光はその事を覚えていて。月が初めから存在しなかった事になっても光が残るとしたら、その光は何処へ行くのでしょうか？」

「その答えが、ここか」

ある存在に擬態した筈のワーム。それは、その擬態元の記憶をそっくりそのまま受け継いでいる。

そしてワーム自身が言う様に、醜悪なものに加工されながらもワームの中で“人格”　記憶は生き続ける。

八雲紫の言葉通り、記憶の力が凄まじいものだとしたら。

歴史の改変でそもその擬態対象が存在しなくなったのに、その記憶を持っているワームが居るとするなら。

そのワームは、紛れもない矛盾。

「ええ。今回の世界の歪みによつて、存在しないはずの光が幻想郷に流れ着いたのです」

尤も、既に殺されたワームはその限りではないらしい。

故に　　そこまで数は多くないのだとか。

「待て。“今回”の世界の歪みとは……何だ？」

八雲紫が、憂いを湛えた目を向ける。

そして、小さく呟いた。

「……世界の破壊者？」

反芻した自分の言葉に、女が頷いた。

そもその事、時の狭間に閉じ込められたものがどこかへと漏れ出す事はないのだと言う。

加えるなら、少なくとも“この世界に於いて”記憶はそこまで強烈な力を持たないのだとか。

世界は、世界によつて独自の法則がある。

そして世界同士は基本的に交わる事がない、らしい。

だが、そんな世界の壁を破壊するものが現れた。その影響で色々な世界の法則は混ざり、歪められ、新たに作り出される。

この幻想郷も例外ではない。世界の破壊と融合の波紋を受けようとしている。しかし、それを最小限のところで八雲紫が食い止めているのだそうだ。

その最小限の影響が自分とワーム。

本来何処に行く事もなく“時の狭間”を彷徨っただけだった筈の存在が、顔を出し、そして“忘れ去られたものが行き着く幻想郷”へと打ち上げられた。

偶然、それぞれの性質が近しいから起きたイレギュラーの様だ。

ふと、八雲紫を見る。

良く見れば、体の所々に傷があった。その、“世界の破壊”を防いでいて出来たのか、それとも幻想郷に流れ着いたワームとの邂逅によつて生まれたものなのか。

どちらにしろ、この女に余裕がないと云う事実を理解するには足

るものであった。

「なるほどな。それで、動けないお前に代わって俺がワームを倒せば良いと云う事か」

「ええ。理解が早くて助かるわ」

その事、それ事体に異存はない。

人間の尊厳を踏み躪る様なワームを許す事など出来ない。そして、その理不尽に立ち向かうだけの力が自分にはある。

八雲紫の話ではクロックアップの法則も乱れ、タキオン粒子の流れるもの以外でも対応可能らしい。

だが、幾らこの幻想郷の住人とは云っても容易に対処は出来ない。暮しているのは強力な妖怪・神だけではなく、人間や妖精と云った弱者も居る。

また、妖怪は成り立ちそのものに能力が関わってくる。

その妖怪の存在を模すという事は、必然的に能力を手に入れる事に繋がる。

人々の記憶を糧にするワームと、人々の記憶から大きく離れた場所に来てしまった妖怪とでは相性が悪く、如何にワームと謂えども妖怪の能力や経験を完全にコピーする事が不可能らしい。

完全ではないとは言え、それが脅威である事には変わらない。

ワームとしての身体能力に妖怪の能力の一部が付与されるなら、大元の妖怪を打ち崩す事も十分にあり得る話だ。

加えて、他のルールを聞いたところで出した推論だが、この八雲紫は幻想郷の住人に殺し合いを望んでいないのだろう。

言葉の節々から、子供を見守る母の様な思いが受け取れた。

「幻想郷は総てを受け入れると言ったな。ならば、ワームも受け入れたらどうだ？」

八雲紫の心中を決るような発言。

それに対し、断固たる目でこちらに返してくる。

はつきりとした決意が浮かんでおり、先ほどまでの様な芝居がかった胡散臭さは感じられない。紛れもない本気の瞳だ。

「幻想郷を破壊しようとする存在に、容赦はしないわ」

短いが、力強い発言だった。八雲紫の心根が窺い知れるほどにいいだろう。

その言葉に、総司も決意する。

この幻想郷に暮すものについての細かな知識。幻想郷の歴史。それらの説明を八雲紫に促した。

戦うにしろ、守るにしろ知らなくてはならない。

この世界の事を、この世界で生けとし生きる総ての存在についてを。

博麗神社、紅魔館、魔法の森、白玉楼、永遠亭、彼岸、妖怪の山、天界、旧地獄、命蓮寺　その他在野の存在。

どんな能力を持っているのか、過去に何をやったのか　それらを念入りに聞いた。

「なるほど……大体判った」

総司の言葉に何故だか八雲紫は小さく笑った。

世界の破壊を根本から正す為に、他にも異世界から戦士を呼ぶらしい。

その者の世界も、総司の世界と同じく今回の破壊の影響の中心に位置する世界だそうだ。尤も、その人間については総司の知るところではない。

その事は、八雲紫に任せることにする。その者の行動に総てが掛っていると言っても過言ではないが、総司に出来る事はあくまでワームと戦う事だ。

そして、天道総司は幻想郷に降り立った。

幾らか路銀は貰ってはいたし、服もある。

あの、託した先での役目を終えたのかカプトゼクターも呼べば来る。ベルトは外の世界の“余った一本”を攫ってきたらしい。

バイク　カプトエクステンダーも後で届けるそうだ。

今のところ、特に障害はない。

ワームがこの幻想郷で何を企んでいるのか知らないが、大方元の世界への帰還か、この世界の支配か。

どちらにしても取れる手段は不明。

博麗神社の巫女 of 能力を使用でもするのかと思ったが、八雲紫によれば彼女の能力はワームに模しきれるものではない。

ありとあらゆるものから解き放たれる能力を使用すれば、ワーム自身の擬態した記憶からも解き放たれてしまい、逆説的に能力の使用が出来なくなるそうだ。

精々、姿を模し術を使うのが限度らしい。

ならば博麗の巫女を排除する傾向に向かうのではないかと問えば、強力な護衛を付けるとの事。

総司に出来る事はないので、放っておく事にした。

後々集まる情報を聞きに行くか、この件に首を突っ込まない様に釘を刺しに行くか。

幾ら強力な能力を持つとは言っても、ワームを倒しきるだけの攻撃力がない事も事実。動かないで居てくれるのが、一番の助けた。

他に気になるのは紅魔館、白玉楼、永遠亭、妖怪の山、旧地獄。

彼岸は生者の身では往く事が不可能な為、除外。天界や命蓮寺の住人の能力は強力だが、余り幻想郷からの脱出に使えるとは考えられないので優先度が低くなる。

妖怪の山は幻想郷でも最高峰の技術を持っている事が気懸かりで、旧地獄の一部妖怪もその恩恵に与っているらしい。

どちらも、いずれ向かわねばならないだろう。

白玉楼は、八雲紫が異世界から呼び寄せる人間を逗留させる事で手を打った。

永遠亭の技術水準は幻想郷に留まらず、外の世界を含めてもそれを上回る。もしかしたら、マスクライダーシステムに比類する何かを有しているかもしれない。

しかもその住人の特性からして、戦闘によつての被害は生まれず

ワームも手を焼くだろうと結論付けた。

となれば、目下の目標は紅魔館だ。

或いはこれら幻想郷の強者と協力し、大元から叩き潰す事が出来ればよかっただろう。

だが、八雲紫に擬態したワームが 劣化したとは云え彼女の能力で 次元の狭間に籠もっている以上、目に付いたワームを倒すしかない。

場当たり的な行動しか、現状では出来ないのだ。

索敵はカプトゼクターの察知だけでは足りないので、八雲紫の友人 体を霧に変化できる鬼のサポートが付けられた。

霧となって行動していれば、流石のワームでも模す事は出来ないだろうと云う推論に基づいての事だった。

出現の傾向からワーム達の目的を探る。

それによって、総司の行き先も変化させねばならないが故、初めから行き先を決める事は躊躇われた。

適当に宿を取りながら、呼び出されてワームを倒す。

多くは只の人間に模したものであったが、次第に幻想郷の事を理解したのか“能力持ち”が襲われる事が多くなっていた。

そうしてワームを屠っていく内に、天道総司は金髪の魔法使いと出会った。

霧雨魔理沙、その人である。

そして、時間は現在に戻る。

/ 0 5

混沌とした意識が覚醒する。

自分は。

「あら、目が覚めたのね」

声がした方に目をやれば、レミリア・スカーレットが紅茶を嗜んでいた。

体中の節々が痛い、戦闘は可能だろうと結論付ける。

「あれから、どれだけ時間が経った？」

「そうね……大体、十時間ほどかしら」

駆けられた布団を剥そうとして手を止める。

フランドールが、その裾を掴んで寝入っていた。

「ついさっきまで起きてたのだけれど」

レミリアが静かに言った。

寝苦しそうに、フランドールが体を揺らす。

自分が倒れた事になんり狼狽していたのか、その金髪が乱れている。起こさぬ様にそっと手を置き、髪を正す。

可哀想な事を、してしまったと思う。

自分が倒れた事に責任を感じてしまったのかも知れないし、見知った人間の危機を目の当たりにして心を深く傷付けてしまったかも知れない。

絹糸の様な金髪に触れながら、自らの力のなさを実感する。

もっと、強くあらねばならない。

「その子から聞いたわ。貴方にも妹が居たんですって？」

「……ああ」

ことん。

カップをソーサーに置いたレミリアが、椅子から下りた。

そのまま、こちらに歩み寄ってくる。

「なら聞かせなさい」

ずい、と宙に浮いたレミリアが顔を寄せた。

お互いの息が掛かるほど近い。

白磁の様な、病的に白い肌では隈が目立つ。レミリアは、一睡もしていないのだろう。

細められた赤い瞳に、反射する自分の顔。お世辞にも、万全とは言い難い。憔悴していた。

「妹を持つ者として、姉としての私の行動をどう思うかしら。何かしら言いたい事でもあるでしょう？」

獣じみた鋭い瞳だった。

溢れるのは自信、傲慢、矜持　王としての強い意志。一点の曇りもない目。

不安で、正しい答えを求めている。

そんな風にも取れる問い掛けだったが、その双眸は雄弁にレミリアの信条を現している。

誰の意見も必要としない、絶対の信念に基づいた光だ。

「いや、無いな。お前は既に自分で答えを見つけている」

既に自分自身で色々な事を考え、導き出したのだらう。

総司に言える事など皆無。

レミリアも、レミリアなりにフランドールの事を気遣ったの行動だったのだ。

確かに、幽閉と聞けば大抵の人間は異を唱える。だが、誰にだって大切なものを守りたいと云う気持ちはある筈だ。

閉じ込める事で、触れさせない事で傷つく事を避ける。

フランドールのあの力を以ってすれば敵を破壊するのは容易だ。吸血鬼の強力な肉体もある。襲われたところで、返り討ちに出来るだらう。

ところが、幼いその心まではそうはいかない。

また、敵だけではなく、友人までも殺してしまう事もあり得るのだ。

愛しいもの、親しいものをその手で破壊する。それはフランドールの心にどれだけの衝撃を与えるだらうか。

或いは成長につれ、敵さえも無残に殺害した事を悔やむ可能性もある。そうなった際に、過去をやり直すなど不可能だ。

傷を背負って乗り越える事も出来るが、少女の様に純粋なフランドールだ。その心が、その傷が原因で死んでしまう事だって無いとは言いきれない。

確かに大袈裟だったのかも知れないし、他にやり方だってあったのかも知れない。

だが、レミリアの行動は紛れもなくフランドールへの愛によるも

のであった。

愛には、色々な形がある。

時には愛ゆえに相手を傷付けてしまう事もある。

しかし、この愛は　まだ取り返しがつくところにあると、総司には感じられた。

フランドールにも言ったが、お互いを思い遣っていればきっと一緒にはなれる。

何処までも時間はあるのだ。

人よりも長い生ゆえ、一度いがみ合ってしまったえば取り戻す事は厳しい。だが、手を取り合う時間が多いのもまた事実なのだ。

「そう……。人間にしては良く判っているわね」

「当然だ。俺を誰だと思っている」

「……………どうせなら、その物言いも直せばいいんだけどねえ」

と、総司に避難がましい目を向けたレミリアはティーカップの傍まで戻ると、ベルを振った。

途端に、音も無く、気配も無く十六夜咲夜が傍らに立つ。

極めて優雅な動作で咲夜に注文を飛ばすレミリア。

「紅茶のお代わりを頂戴。それから、総司が目を覚ましたわ」「了解です」

言い終わるや否や咲夜の手にはティーポットが握られ、カップに紅茶が注がれた。

時を操る能力　かなり、厄介な能力。ワームに利用されてしまえば苦戦する事は想像に難くない。

ハイパークロックアップを以つても単純には打倒できまいし、それに何より、八雲紫からハイパーゼクターの使用は禁じられていた。咲夜が擬態されない事、それを祈る事しか出来ない。

万が一再び紅魔館にワームが訪れたとしても、昨夜の様な連携を見せれば十分に打倒可能だろう。完全に倒す事が出来ずとも、その間に自分が駆けつけければ良い。

可能ならばこのままここに留まりたかったが、未だにやらねばな

らない事は多い。

さしあたっては、移動手段　カプトエクステンダーが必要だ。
あれがあるなら、この幻想郷中を渡り歩くのに指して時間はかからず済む。

八雲紫の話では、今日にでも届く筈だが、果たして　。

「そう云えば　」

もう一人分の紅茶を用意した咲夜が口を開いた。

同時に、

「　魔理沙が来てましたわ」

「　私、参上だぜ！」

勢い良く扉が開く。

右手の親指で自分自身を指し、翼の様に左手を後に。それから歌舞伎の大見得の様に両手を張った奇妙なポーズを取る魔理沙。

衝撃で紅茶を零しそうになった咲夜の米噛みに、青筋が浮いた。

レミリアは羽をぴんと張り、目を大きく見開いた。

そして、ドアが立てたけたたましい音によってフランドールが目覚める。

やれやれと、総司は溜め息を吐いた。

「それで……何の用だ？」

人数分のティーカップの前に、皆がテーブルに着く。フランドールはいない。総司が改めてベッドに運んだのだ。美鈴は昨日の今日だが元気に門番をしている。

フランにはあーなのにつれない言い方だなー、と魔理沙が口を尖らせて笑う。

それから、何かしらのカードを指で弾いて総司に飛ばした。

トランプ大の切片で、前衛的だが写実主義的な絵が描いてある。カプトエクステンダーだ。

「これは、何だ？」

「寧ろ私が聞きたいくらいだ。見た事がないぜ、そんなの」

息を吹きかけ紅茶を冷ましていた魔理沙が、顔を上げて答えた。
博麗神社に置いてあるので、これと引き換えに取りに来い、だそ
うだ。

「狐が届けたんだから葉っぱにでもなるんじゃないか」

「紅茶の葉なら丁度良かったんですが」

「巫女に渡すならお茶っ葉の方がいいんじゃないの？」

「柊の葉じゃなきゃいいさ」

と、魔理沙が茶化し、咲夜がこれまでの完璧さからは思いも寄らない真意を測りかねる発言をし、パチュリーが眠たそうな目を上げ、レミリアが笑いながら虫を手で払う動作をする。

総司は、再び溜め息を吐いた。

そして「幸せが逃げる」と皆が口を揃えるのに、もう一度吐きそうになったのは言うまでもない。

「いいのか？」

身支度を済ませ、紅魔館を立ち去ろうとする総司を見送ろうとするのは、拳法の型をやっている美鈴だけ。

咲夜は屋敷の修理に追われ、レミリアは欠伸をしながら寝室へと戻っていった。

パチュリーは、その内、貴方の世界の話でも聞かせてもらつわと本に目を落としたまま気だるそうに後ろ手を振った。
「ああ。二度と会えない訳じゃあない」

用事によつてはまた立ち寄る事もあるだろう。

これ以上、余所者の自分が居てもやる事はないし、かえって邪魔になる。総司は、そう判断した。

会いたくなつたら会いに来れば良い。

「そう云えば、そうだな」

と、何処からか（と云う言葉は正確ではないだろう）持ってきた本を数冊小脇に抱えた魔理沙が笑う。

やはり、懲りてないらしい。

それでも量は減らしたのだとか。いつか、キッチンと返す様になる日が来るかも知れない。来ないかも知れない。

「じゃあ、行くか」

箒に跨る魔理沙の手から本を奪い取り、そのまま美鈴に手渡す。不満を言う魔理沙をじろりと睨み付けた。

少なくとも未だに紅魔館の敷地内に居る以上、執事である。屋敷の品を無断で持っていかれるのを黙っている訳にはいかない。

慌しく紅魔館から出てきた小悪魔（通称。名前は無い。本の整理を行っていた）が本を受け取って、一礼をすると再び屋敷に戻っていった。

彼女とは殆ど話さなかったが、またいつか話す機会があるだろう。「あー……気を取り直して、じゃあ行くか」

改めて箒に跨る魔理沙。総司も、後に乗る形となる。

ゆつくりと重力に逆らう様に浮かぶ箒と総司達。目指すは博麗神社。幻想郷の、東に位置している。

「総司！」

言葉と共に、何かが飛んできた。

素早く掴み取って見れば、金色のコインだった。

一方にはカプト・マスクドフォームの肩にある、カプトゼクターかたじを模ったエンブレムと太陽。

もう一方には、フランドールの羽を思わせる菱形の宝石と満月が刻まれている。

「コンティニューしに来てね！ いつでもいいから！」

「ああ、約束だ」

太陽を指差し、総司と魔理沙は立ち去る。フランドールが日傘に隠れながら手を振っている。

スキマツアーへようこそ（後編）（後書き）

今回の東方天地人は……

一！ 紅魔館編、終了。

二！ 次で六話。やっと半分

三！ ゆかりん「おのれデイクイードー！」

（後書き、所感は活動報告の方に）

空飛ぶ巫女達の不思議な一日（前編）

/ 0 1

乱雑に物品が置かれた部屋の中で、顔を突き合わせて呻る三人。

「うーん……河童の技術をしてても無理か」

「流石にこれだけじゃあ……実に興味深いんですけど、幻想郷にあるものだけで再現するのは難しいでしょうね」

「そうかー。相手が相手なんだしこれぐらい有った方が安心なんだけど」

蛙を連想させる帽子をぴよこりと動かし、洩矢諏訪子^{もりや すわこ}が伸びをする。

目の前の机の上には複雑な設計図と、バラバラに分解された金属のパーツが所狭しと並べられていた。

「肝心のクロックアップが殆どブラックボックスですからねえ……原理の根底のエネルギーも判らないし」

水色の洋服を身に纏った少女、河城^{かわしろ}にとりが欠伸を上げる。

「あの石」でもあれば出来るかも知れないが、そうそう都合よく手にも入らないだろうな」

残念そうに解体されたパーツを見渡し、顎に手をやる紫髪の女性
八坂神奈子^{やさか かなこ}。

皆の間に沈黙が流れる。

にとりは頭を抱えうわ言の様に何らかの数式を吐き出し、諏訪子は興味も薄れたのか、それとも元々無かったのか退屈そうにとりの部屋を見渡す。

神奈子は思案げな表情のまま外を見て、憂鬱そうに呟いた。

「ワーム、か……」

/ 0 2

「そう云えば、早苗が変な事を言ってたな」
「ほう、なんだ？」

箒に揺られながら魔理沙が言った。

幻想郷最速の名（今では天狗によってその座も危ぶまれている）
を見せ付ける為にかなりの速度を出していたが、それでも後の総司
は涼しい顔で聞き返してくるだけだ。

ひよつとすると、外にはこれより速いものがあるのかも知れんな
と魔理沙は漠然と感じつつ、答えた。

「何だか、ワームについての知識があるみたいだったぜ。クロツク
アップがどうこうと言ってたしな」

「……………そうか」

応じつつ、総司も考える。

もしかしたら、早苗（妖怪の山の神社の巫女、外の世界から来た
と聞いている）は、自身と同じ世界から来たと云う可能性もある。
詳しく話を聞いてみる必要があるだろう　と、天道は山の神社
を次の目標に決めた。

「次の行き先は決まったな」

魔理沙がはにかんだ。

やれやれ、と総司も嘆息した。

なるべく巻き込んでしまう事を避けたいと思う。だが、止めて
も魔理沙は首を突っ込んでくるだろう。単なる好奇心だけに留まら
ず、彼女の中にも幻想郷の異変を放つてはおけないと云う気持ちも
存在している。

もし総司が同行を断れば、魔理沙は持ち前の探究心で彼女独りで
も異変解決に乗り出してしまふ。そんな事は十分に考えられた。な
らば、一緒に居る方がまだ良い。

これが妖怪ならば究極、放置してもそこまで心配はない。人間に
比べて余りにも頑丈な上に、肉片の一つからでも生存出来る再生能
力を持ち、ワームでも模し切れないほどの経験を有している。

だが、魔理沙は人間だ。

異変を幾つか解決し、魔法を使えると云っても年頃の少女。ワームにもその人格全てを擬態されてしまう。

魔力と云う未知の超常の能力に対応し切れていない様子だったが、魔理沙を殺すのには 言ってしまうば 魔法を使う必要はない。ワームの成虫としての能力を完全に発揮すれば、容易くとはいかないが、十分に殺害可能だろう。

如何に魔理沙がこれまで異変を解決してきたとしても、ルール無用で襲い掛かるワーム相手では荷が重い。

ならば、自分の目の届く範囲に置いておく方が 同行させるのが無難で、合理的だった。

そんな理由から、天道総司は魔理沙を伴うと決定していた。

「よつ、と。おーい霊夢！」

「私はお茶じゃないわよ！ ああ、お茶飲みたい」

箒で境内を掃除していた紅白の巫女 博麗^{はくれいれいむ}霊夢が、振り返りながらそんな事を宣った。

^{おおよそ}大凡腰ほどまで伸びた黒髪とそれを束ねるフリルで飾られた赤いリボンが、主の動きに追従する。

非常に面倒だとしても言いたげな表情だったが、魔理沙の傍に立つ天道とその手のカードを見ると少し晴れた。

「貴方が……化け猫の言っていた外来人？」

「ああ。おばあちゃんが言っていた……『俺は 』」

「 あ、そこらへんは聞いているからいいわ」

太陽を指差した総司をぴしゃりと遮って、霊夢は箒を放り投げる。危なげなく掴み取った総司は、怪訝な顔で霊夢を見た。

「それで天道さん。早速で悪いんだけど、掃除してくれるかしら？」

霊夢が ほとんど感じられないが 多少は申し訳なさそうに（それこそ申し訳程度だ）言った。

「こう云う肝心な時に限ってあの酔っ払い鬼がないのよねえ、ま

「つたく……。最近見ないし……。寺に参拝客は取られるし……」

「いや、参拝客がいないのは元からだぜ。駄目駄目神社だ」

などと嘯く二人だが、当の天道には話が見えない。

バイクを引き換えるとは聞いていたが、掃除を頼まれるとは一言も伝えられていなかった。

魔理沙に視線をやれば、お手上げとばかりに体を動かした。彼女も、知らないらしい。

どう云う事かと問うてみれば、

「え？ 頼み事をしているんじゃないの？ ……あれ？ 頼み事があるんだったっけ？」

などと宣うので、仕方なく掃除する事にした。

確かに都合よくバイクを置かせて引き取りの場にするとは行かないだろう。

一方的にこちらの為に神社を使うのでは心証が悪くなる事だつてあるかもしれない。その為に、なるべく円滑に関係が築ける様に八雲紫が取り計らったとも考えられた。

尤も、博麗霊夢はそんな事に拘る人間ではないと聞いているが……。

或いは、霊夢を巻き込まない為に『外来人の荷物を預けるから取りにきたら好きに使ってくれ』とでも言ったのか。

何にしても構わんかと、総司は掃除を始めた。総司が掃除 紛らわしい。

天道の道を往き、総てを司ると云う言葉にもれず、総司は本殿への道を綺麗に掃き終えた。

そんな様子を尻目に『のほほん』とお茶を飲む霊夢が、年上の男性を顎で使う事に多少の負い目でもあるのか時々丁寧語を使いながら、境内の裏手の掃除を総司に言いつけるのだった。

魔理沙がその隣で「天道は料理だってスゴいんだぜ」とさも自分の事であるかのごとく誇らしげに話す。

それを聞いた霊夢が、

「ふーん。なら、このまま家の入り婿にでもなってくれたら楽なの
に」

なんて呟けば、魔理沙がそれに乗っかって話を進める。

「そりゃあ、駄目だ。天道は私の嫁だからな」

「そう……重婚は流石に拙いわね。厄いわ」

「どっかのえんがちよみたいな事言っつなよ。汚くてもうここに来れ
なくなるぜ」

「それなら尚更都合が良いわ……寧ろ願ったりよ。ねこいらす
いらず」なんて御利益ある神様ね。……お煎餅から手を放しなさい」

「駄目だね。そいつは聞けないな」

「アンタさっきから“ダメ”ばかり言ってるわよ」

「そりゃあ、お前みたいなの近くにいる所為だな。ダメが移った」

「駄目ならそりゃ鬱るでしょ。当然よ」

「判らんな。駄目なら鬱にも気付かずに幸せに過ごすかも知れない
ぜ」

「随分と幸せなのね、駄目って」

「まあ、この神社に良い例がいるんだからな。とつくに証明されて
るだろ」

「駄目なのに良いって面倒臭いわね……。あつ、お煎餅美味しい」

そんな気の抜けた炭酸水を思わせる、淡々と盛り上がる二人の会
話を耳にした総司は盛大に溜飲を下げた。

幻想郷でも 少なくとも博麗神社は、平和らしい。

恐らく、ワーム達は外の世界への帰還する目論見だろう。

もし、霊夢に擬態して無理やりに幻想郷を現実へと叩き戻すのな
ら。

そうなれば幻想郷は消える。

この平穏な日常を、豊かな自然を、ここ幻想郷で暮らす生けとし
生けるものの持つ有り触れた景色が破壊されるのだ。

許せる理由はない。

自分の居た地球の様にしてはならない。

誰かに、自分と同じ気持ちを味わわせていい道理など存在しない。
人間・妖怪・妖精・動物・植物、オケラからアメンボまで
その全てを守らねば。

思い強く、簾を握り締めた。

漸く境内の清掃を終えた総司にお茶が差し出される。煎餅は、既に二人の腹の中に消えていた。

「大分片付いたわ。ありがとう、天道さん」
「当然だ」

『我に不可能は無し』と云った態度そのままの総司に、霊夢は呆れて頬を掻いた。

「それで、頼まれてた“ばいく”なんだけど……今持ってくるわね」
言って、腰を上げる霊夢。

見送りながら、茶を啜った。

「ん？ 何だ、これは」

何の気なしに卓袱台に放置されていた新聞を手に取り、魔理沙は声を上げた。

「どうした？」

「ああ、ちよつと待ってくれ……えーっと『白玉楼に謎の龍宮城！
龍神の警告か！？』だってよ」

言って、魔理沙が新聞を突き出した。

記事には竜の首が生えたと云うか、竜の胴体が城に変化したのか
判らない建造物の写真が収められており、何とも奇妙だった。

流石の総司もこれには驚いた。

「なあ……これもワーム絡みか？」

「いや、違うな」

と、断ずる総司。

詳しく正体は判らないが、これも八雲紫が呼んだ援軍だ。

どうみても自分達「外の世界」には相応しい外見ではなく、どち

らかと言えば幻想郷よりのフォルムだ。

まあ、世界にも色々あるのだろう。

空になった湯飲みを手に急須の元へ向かう総司に、背後から声かけられる。

「ところで……この異変だが、霊夢にも協力させなくていいのか？」

「ああ、擬態されたら厄介な事になる。ましてや殺されでもしたらな」

その能力の性質からしても、擬態される……と云う事も早々ないだろう。

擬態とは確実に相性が悪い能力だ。

使用した途端、擬態と云う他者に依る性質と霊夢の能力の他者に依らない性質が矛盾を起こすだろう。

擬態され得ないと言っても良いが、それでも確実とは言えない。

仮に殺されたり、或いは擬態で能力が模倣されれば、この幻想郷は破綻する。

八雲紫の口ぶりでは殺されても問題はないようだが、彼女が霊夢に対して好感情を抱いていると云うのを総司は見抜いていた。

そんな八雲紫を気遣う気持ちもあつたし、総司自身、そもそもワームに人を殺されるのが許せない。

よって、この異変解決に霊夢を同行させるのは憚られた。

「じゃあいいのかよ、霊夢をここに放つといて。一緒に居た方がいいんじゃないのか？ 危なくないか？」

「その必要はないよ」

中空から、二つの影が飛び出した。

「ん……？ ああ、お前らか」

黒い猫の耳を生やした少女 チエン 橙。

道士服から、金色の、惜しげない数の狐の尻尾と耳を覗かせた女

性 やくもらん 八雲藍。

共に、八雲紫の手の者であつた。

「おいおい…… ホントにお前らで大丈夫なのか？」

「ああ、こいつらなら擬態に対抗出来る。最高に相性が良いと言ってもいい」

総司が代わりに答えた。

元々の妖怪に、式が貼り付けられた存在 式神である二人。

藍は八雲紫の、橙は藍の式である。

式は、それ主人の命令を十全に履行すれば限り主人と同等の力を発揮出来る。

しかし、一度その命令から外れた事をすれば能力は格段に低くなるのだ。

もしワームが式ごと彼女達を模したのなら 『命令から外れる為』弱くなり、式のない彼女達を模したのなら『式の差分』劣るものとなる。

故に式神は、ワームとの戦いに於いて最上の戦力だった。

「うーむ、なるほどな」

特に自分に言える事など無いので、魔理沙は納得した。

橙が耳をピクリと動かしした。

「藍様、そろそろあいつが戻ってくるよ」

「では、天道総司……くれぐれも頼んだぞ」

「当然だ。大船に乗った心算で任せておけ」

「幻想郷に海はないから船は役に立たないけどな」

と、魔理沙が茶化す間には二人とも煙の如く消えてしまった。

どうやら、霊夢に見付かつてはならないらしい。これは大事と異変に関わらせない為だろうが、尤も、霊夢は勘が鋭いので既に気付いていてもおかしくはない。

それに、動くとなったら何があっても動いて適当に解決してしまうだろう。

魔理沙は、自己のライバル（一方的である）について、そのような分析をしている。

概ね、当たっている筈だ。

金属製の赤い車体を這う這うの体で霊夢が押して来る。

頭と足四つを取って車輪を二つ付けた馬を思わせる外見。これがバイクと言うものかと、物珍しく見やる。

明らかに鈍重そうである。どうやって動くのか。

まさか船の如く空気を漕ぎ分けて動く訳でもあるまいし、そんな装置も見当たらない。

「何だこれ？ 新しい手押し車か？」

「重いわよ、これ。手で押すにしてもね。跨って坂を転がり落ちる為じゃないの？」

「何だそりゃ……。上り坂はどうするんだよ？」

「それは……こう……下り坂の勢いそのまま登るのよ」

「随分と危ないな」

「まったく、随分と危ないわね。外の人間の気が知れないわ」

「相当危ない奴らばかりなんじゃないか？ 早苗や天道をみれば判るだろう」

「まあ、そうね。危ない奴ばかりだから危ないものが流行るのね。鶴亀鶴亀」

瞬間、突然の暴風が、二人の会話を中断させた。

「何が危ないんですか？」

一陣の風と共に降り立った黒髪の少女　ゴシップ天狗、射命丸しゃめいまる文。あや

「私にも聞かせてよ　って、何これ！？ 凄いわね！」

青い長髪をはためかせて地を揺さぶった、岩に座った　不良天人、比那名居天子。ひななゐてんし

厄介な二人に目を付けられた、と魔理沙は臍を噛む。

「面倒なヤツがなんで二人揃って来るのよ」

「いや、偶然そこで会いました」

「面倒って随分な言い草ね。この間の忠言が耳に痛かったのでしょ

うか？」

にべも無く対応する霊夢に、射命丸が鷹揚に応じ、天子は冷笑で返す。

只でさえ騒ぎが大きくなる幻想郷で、この二人は特に不味い。どちらにも刺激に餓えているのだ。

射命丸は生活の糧と奇妙な使命感と知識欲から、天子は退屈しのぎからか、騒ぎに大きく騒ぐ。

ワームについて知らせて注意を呼びかけた魔理沙だが、それでも大事になるのは避けたいと思った。

擬態して人間に成りすますと云うワームの特性がそうさせたのだ。下手をすれば、人々の間で疑心暗鬼が起こりかねない。ただの人間が知ったところで対処なんて出来まいし、知らせる益はなかった。注意など、精々、見知らぬ妖怪が出るから警備をするようにとか、里の外に出歩くなぐらいである。

里の守護者やワームと戦って勝利出来るだろう有力者には知っている限りの特性を告げた。勿論、出来るだけ情報を広めない事とその理由も忘れずに。

その情報の有無が勝敗を分けるとも限らない為だ。

しかし、この二人にかかったらどこまででも広められかねない上に、下手をすると直接ワームに向かいかねない。

そうなると場当たりの戦いとなりワーム達の動向（目的）を探るのも難しくなるし、相手の戦力を増やす事にも繋がる。あまり良い事とは魔理沙には思えなかった。

恐らく、天道もそう考えているだろう。

「これは何ですか？」

「何これ……ガラクタかしら？」

早速二人とも興味深げにバイクを眺め、霊夢に質問していた。

（余計な事を言っつなよ……！）と目で霊夢に合図を送る。自分と霊夢の仲ならきつと理解してくれるだろう。

「ああ、バイクって危険な乗り物よ」

「おい!？」

思わず大声でツツコミを入れそうになった。いや、入れてた。煩わしそうに答える霊夢は、さっきの言葉通り本当に面倒だと思っ
っているんだろう。

厄介な奴らにとつと立ち去って貰う為に質問に答えたようだ。
判ってはいたが　そう云えば、こう云う奴なんだよなあ、霊夢
は……。

魔理沙は、帽子の上から頭を抱えなくなった。

「あ、魔理沙さんではないですか。こんにちは」

「魔理沙とか云う可愛い女の子の事なんて知らんな。それにまだお
はよふの時間だぜ」

「確かに私もそんな名前の可愛い女の子なんて知りませんね。それ
に鳥目は朝が早いから『こんにちは』でいいですよ」

「やれやれ、そんな常識を知らないようにで新聞屋とは恐れ入るな」

「新聞屋じゃなくて記者ですからね。新聞を配ってるのは手が足り
ないからです」

「二本とも十分ある風に見えるが……」

「鳥は手じゃなくて足なんですよ。いや、羽かな」

「手が無いなんて随分と身軽だな。まあ、少なくとも頭は軽そうだ」

「酷い言い草ですねえ……訴えますよ?」

冷淡だが心地の良い諧謔を交えたやり取りを続け、何とか話題を
逸らそうと試みる。

が、そんな魔理沙の目論見は見事に撃破された。

「ねー、これ何に使うのよー?」

チツ、この不良天人が……!

嘗てないほどの殺気を湛えて天子を睨むが、本人はどこ吹く風と
言った様子でバイクに目を輝かせている。

「そうですね。是非ともその辺りを伺いたいものです。使用法、持
ち主、由来……中々興味深い」

射命丸もそれに続いた。

どうしようか……。魔理沙の思案を、総司の声が中断させる。

「それは俺のものだ」

二人が、ハツとして総司を見た。

今の今まで気が付かなかったのだ。ごくごく自然に、当然とばかりに完全に雰囲気溶け込んでいた。

空に太陽が昇る事を不思議と感じるものが果たしているだろうか。それほどまでに、天道総司は違和感無くこの場に存在していたのだ。

……言ってしまったえば、天道並みの奇天烈さも珍しくない、と云う事に繋がるだが。

「えっと、格好からして外来人の方ですか？」

「へえ、随分と珍しいのね。生きたままここに辿り着くなんて」

途端に営業用の笑みを浮かべて質問する射命丸に、総司が「ああ」と首肯する。

「では早速、この道具についてお聞きしたいのですが……」

「ねえ、外ってどんなところなの？」

二人の質問に対し、溜飲を下げる総司。

怪訝そうに窺う二人へ、総司がやれやれと切り出した。

「人にものを尋ねる前にする事があるだろう。まず、お前らの名前を言ったらどうだ？」

通常なら尊大と取られるだろう態度だ。

しかし言っている事は至極真つ当であるし、こんな喋り方は別段幻想郷では珍しい事ではなく、寧ろ余計な諧謔が入らない分丁寧な対応に属するものだ。

二人とも特に思うところも無く、自己紹介を始めた。

「ああ、失礼しました。私は射命丸文。幻想郷の真実を白日の下に晒す為に、日夜飛び回っています。お見知りおきを」

「比那名居天子よ、よろしく。地上の人間にありがたい言葉を伝えるにやって来ているわ」

嘘こけよ、と内心苦笑する魔理沙。

二人の言に満足そうに頷くと、総司は徐に人差し指を立てる。

ああ、またあれが来るのか　と、生暖かい目で全員の反応を眺める。

度々目の当たりにすれば、辟易するよりも寧ろ楽しむ余裕が生まれてくるのだ。

「おばあちゃんが言っていた」

この辺りで二人は既に、当惑した顔を見せる。

当然だろう。いきなりおばあちゃんの話を読まれても何の事だか理解できない。

そんな二人を尻目に、天道は悠々と中天に輝く太陽を指し示し

「俺は『天の道を往き、全てを司る男』」

と、キツチリと自己紹介を行った。目を白黒させる二人を置き去りにしたまま。

「ええと……では……天道さん……？」

いち早く硬直から抜け出した射命丸が、恐る恐る問いかけた。外の世界の人間とコンタクトをとった事がないのだろう。

無理もない。大半の外の世界の人間は、知能の低い妖怪に喰われる。後は現実になんて気が狂ってしまうか。どちらにしろ、彼らの人格がどうだとは、今まであまり伝えて来られていない。

精々光を放つ箱を耳に当てて青ざめるとか、良く判らない情報だけだ。

外の世界へ向かえるのは八雲紫だけ。彼女以外、外の住人の人となりを知るものは居ない。居たとしても、それは昔の人間についてだ。現在の、外の世界がどうなっているかは、流れ着くものから思いを馳せるに留まるのみ。

そんな中で、天道は随分と貴重だろう。

天狗が鼻息を荒くなってしまふのを何とか平静に取り繕いながら詰め寄るのも、尤もである。

この道具が何かと問われれば、風よりも早く走ると言う。
どんな原理なのかと聞かれたら、美味しい料理が美味しいのと同じだと応ずる。

質問が天道について移っても、やはり回答は似たようなものだ。

幻想郷に來た理由 『この地上に光の届かない場所はない』

。

ここまで無事だった訳 『俺が往くのは天の道だ』。

天道の目的 『太陽が輝く事に理由など無い』。

どれもこれも、はつきり言って常人なら「何だそれは」と憤慨するような答えばかりだ。

ここまで奇天烈な相手に根気良く取材するするなど見上げたものだ
なと射命丸を見るが、適度に相槌を打ちながらも明らかに苦笑一色。些か同情を禁じえない。

それに、今まで腕を組んで黙っていた天子が助け舟を出した。

「ねえ、ちよつとは真面目に答えてあげたらどうかしら？ その天狗も困ってるじゃない」

「俺は事実を言ったただけだ。なんの問題がある」

「事実、事実ねえ……。そうだとっても言い方ってものがあるでしようが。人間の身で、何様の心算なの？」

「俺は俺だ」

天子が溜め息を吐いて、天道に、呆れたような冷ややかな目を向ける。

「盛者必衰。奢って他人を蔑ろにする者に正しい道なんて訪れないよ」

「それがどうした。俺は天の道を往き、総てを司る男だ。俺の邪魔をするな」

言い捨てて、天道は二人に背を向け、そのまま、バイクに跨った。二人をちらりと見た後、魔理沙も後を追う。そんな二人の行く手を天子が遮り、緋色の ひんすけ 緋想の剣を抜き放ち、地面に突き刺す。

「邪魔をするな、と言った筈だが」

「そもいかないでしょう？ 思い上がった人間に忠言をするのも天人の役目ですから」

実際のところ、天子がどう言う意図でそう言ったのかは判らない。ただ尤もらしく理由をつけて暴れたいだけなのかも知れないし、本来に天道の態度を改めようと考えているのかも知れない。或いはその両方か。

変則的な弾幕ごっこを挑んで、忠言と称して好き勝手な事を言っていたりもした。それはそう云うスタイルなのだと思える。

元々、真剣にそんな言葉を相手に掛けようとは思えないタイプの人間だ。だが、瞳孔が若干開いている事から、怒りを持っているとは読み取れた。

もしかしたら、本気で天道に対して憤慨しているのだろうか。

それも仕方がない、と感じる。

今回、やけに喧嘩腰な対応だ。上手く言えないが、いつもはもつと余裕を持って、何だかんだと他人の事も思い遣っている筈だ。幾らなんでもここまで邪険に扱ってはいない。

天道が無意味にそんな事をするとも思えない。だが、何か考えがあつての行動としてもその真意は不明だった。

「魔理沙……しっかり捕まっている」

と、そんな言葉が掛けられる。意図が判らずとも、言われるがままにしがみ付く。

カキン。

ブオオオオオオオオオオ。

天道が流れる様に“何か”を行つた。瞬間、この鉄の馬が嘶いた。凄まじい爆音に、思わず身を竦める。天子も、霊夢も同様だった。天道が右の握り手を捻る。唐突にバイクが加速し、呆然と見る天

子の横をすり抜けた。正に、一陣の風。

勢いのままに三人を後方に置き去りにし、神社の長い石段をバイクが駆け下りる。先ほどは風と言ったが、馬だ。段差ごとに激しく視界が上下する。

箒に乗り換えたい。確かにこれは危険な乗り物だったと云う魔理沙の思いさえも、余りのスピードに吹き散らかされていった。

……お尻が痛いぜ。

/ 0 3

蹴り飛ばした路傍の石が草むらに消えた。

音さえ立てずに視界から外れたそれは、今の気分と同じだった。

怒りのぶつけ先を失い、暗澹たるものを胸中に燦らせた比那名居天子は、鬱屈とした気持ちに任せて緋想の剣を薙いだ。

なんなのだ、あの天道総司とか云う男は。

ただの人間の癖に、あの様な「人生向かうところ敵無し」とばかりの傲慢で尊大な振る舞いをする。

あまつさえ礼儀も知らず、他者を慮ろうともしない。

外の世界はあんな人間ばかりなのだろうか。

あの瞬間、バイクの興味や外の世界への関心を打ち消し塗り潰すほどに、天道総司の人物や行いは天子を苛立たせるものであった。

今度出会ったら、多少お灸を据えてやるべきだろう。あの物言いには確かに腹が立ったし、何とか目にものを見せてやろうとも感じた。しかしそれ以上に、相手によつてはあの言動それ自体で殺される事もあり得る。その点を案ずる気持ちを持ち合わせないほど、天子は冷酷な人間ではない。

何よりも外の世界の事を聞く折角のチャンスなのだ。何かしら、刺激的な話を耳に出来る可能性がある。その折角の機会を倦む事の苦しみを理解しない能天気な妖怪に殺されるなんて、非常に勿体無い。

ただまあやはり、是非とも痛い目を見せてやりたいと思わせる性

格をしている。きっと、“自分が天道の事を思つて態度を改めさせようとしていた”なんて発想には行き着かない程度には傍若無人で我儕な男だろう。

会話を思い出しただけで米噛みがひくついてきた。叫び出したい激情に駆られるが、何とか押さえ込む　　うん、やつぱ無理。

「なんなのよ、アイツ……次に会ったら許さないんだから！」

あのバイクの速度に追いつけないと判断し、非常に業腹であるが天道の追跡は射命丸に譲った。

そのまま神社で時間を潰そうかと考えていたが、霊夢への質問は要領を得ず、おまけに他にも二組の来客が。

何とも手持ち無沙汰と云う様子で神社を飛び出し、今は近くの森に居る。

「あーあ、つまんないなあ……」

天人にとつて退屈は致命的だ。退屈を感じ始めたら死の前兆とまで言われているほどに。

それも尤もだろう。

長い生なのに、あたかも悟ったかの如く老人めいた諦観と平穩で生活していたら魂が澱んでしまう。流れの止まった水は腐るだけだ。感動を覚えないで生きているなんて、それこそ植物と一緒にではないか。何の為に生きているのだろうか。

親の、さらにその上司のついでで一族天人になつて、やれ“不良天人”だとか、やれ“下賤の者”と疎まれ蔑まれた上で、“さあそんな事は忘れて水に流してその後は緩やかな隠居同然の生活を送りましょう”などとは真つ平御免である。

仮にそうは思っていないくとも、陰口を叩いてた奴にへこへこ頭を下げて何事も無かつたかの様に笑つて暮らせと　　そんなの、あり得ない。実際にそう暮らすなど言うに及ばず、肯んずるのも以ての外。それこそ死んでいるのと同じではないか。

折角の生なので、もっと楽しみたい。

どうして嫌われて排除されて、そのまま運命を受け入れねばなら

ないのだろうか。

もっと、自分は……。

ガサリ。

「誰？」

先ほど石を蹴り打った茂みから人影が歩み出てくるのを、天子の
緋^{あか}い目は捉えた。

空飛ぶ巫女達の不思議な一日（前編）（後書き）

長らく、お待たせをばいたしました。

そのわりに話が進んでないw

申し訳ねえ……申し訳ねえ……

画面の向こうの皆が暖かい気持ちになってくれるよう頑張ります！

空飛ぶ巫女達の不思議な一日（後編）

/ 0 4

「　　どうやら、振り切ったみたいだな」

痛む尻を擦りつつ、魔理沙が後を見た。

あのまま付き纏われていたら非常に厄介であったが、諦めたらしい。

それとも走る姿をカメラに収めたのか　特殊な機能を持ったカメラだと八雲紫から聞いていたが、特に何も起こっていない。

天道自身としてはあの射命丸文に不穏なものを感じた　ワームのそれだ　のだが、その勘は外れていたのだろう。

何かあれば、ほぼ目に見えない規模の霧と化した鬼の伊吹萃香^{いぶきすいか}が知らせてくれる手筈となっているので、こうなっては完全に総司の思い違いとなる。

幻想郷の住人の人となりは聞いていても、それがどんな人間（或いは妖怪）か、実際に付き合っ肌で感じてはいない。

魔理沙のようにある程度一緒にいるなら兎も角、初見の妖怪がワームか否かを見抜くのは、困難と言えた。

「……と、スマン、天道。ちょっとここで下ろしてくれ」

魔理沙の言葉に停車する。見れば、どこか古ぼけた家の前だった。この主人に用があるらしい。総司も、この店については聞いていた。

もしかしたら何かしら情報や外の道具が手に入る可能性もあるとの事で、先行していて欲しいと頼まれた。

意味深な笑みを浮かべる天道に怪訝な顔を向ける魔理沙を残し、バイクを発進させる。

目指すのは、妖怪の山。

「　　やれやれ……変身！」

妖精を襲っていたワームを蹴散らし、再びバイクに跨る。

ワームの数はそれほど揃ってはいないと思うのだが、それとも余裕があるのか。

妖精を襲ったところで別段得られるものはないはずだが……。

それともこんな襲撃にさえも意味が在るのか。

なんにしても、あまり悠長に構えていられない事は確實。時間を与えれば、確実にワームのアドバンテージは増すのだ。

カブトの鎧を纏ったまま、妖怪の山目掛けて一目散に走り抜ける。
「よう、遅かったじゃないか」

魔理沙が手を上げる。

ワームと戦闘をしている間に、すっかりと追い抜かされていたらしい。

二・三言交わしつつ、山に登る。

「何者だ！」

哨戒の天狗が、剣を構えながら言った。複数に、すっかりと取り囲まれる形となってしまうている。

突破するのは、非常に骨だ。

魔理沙が面倒そうに顔を隠した。度々進入していて、顔を覚えられてしまっているらしい。

溜め息一つ、総司は不敵に返す。

「人の名を聞く前に、自分が名乗ったらどうだ？」

天狗の群が、ざわついた。顔を突き合わせている者もいる。

見知らぬ乗り物に、それに乗る自身に満ち溢れた男。これを目にしてうろたえずにいる事は不可能と言ってもいい。

もしかしたら、何か偉い妖怪なのでは……と思わせるオーラを、総司は確かに有していた。

「いい加減にしろ。お前らのお遊びに付き合っている暇はない」

白い髪为天狗の一人が言った。かなり殺気立っている。

戦闘ならば早めに済ませるべきだろう。時間が惜しい。時が過ぎ

れば、その分ワームが有利となるのだ。

天狗の山は排他的で、聞けば魔理沙も大抵無理やり通っているらしい。

だが、それにしても排他的過ぎるくらいがある。何事かあったの
だろうか。

「待て、説明し

踏み出した。瞬間、天道の周囲が爆ぜた。

恐らく、警告。

「なんの心算だ？」

言って、天道は驚愕した。

天狗の背後に立つ影。

ライダーシステム。あれは、確かネオゼクトの織田が持っていたカブティックゼクター。

だが、織田は死んだ筈だ。それとも、自分と同じ様にここに居るのか。

一体、ここで何が起こっていると云うのか。

「……何者だ？」

正義。仮面ライダー2号」

誰何する天道へ歸される返答。まるで舞台の役者とも言わんばかりの相手の口上に頭が痛くなるのを感じた。

鎧の主はゼクトクナイガンを片手に天道達へと歩み寄る。天狗は、それを遠巻きに眺めている。

色々と事情を聞く必要があるし、降りかかる火の粉は払わねばならないだろう。

事と次第によつては
いや、恐らく確實に倒さねばならな
い。

十メートル。ヘラクスの動きが止まった。

来るか。

カブトゼクターを呼び寄せるべく構えを取る天道に対し、

「み？」

ヘラクスがやけに甲高い呻きを上げる。思わず魔理沙が聞き返した。

「みみみ、み、水嶋ヒロ！？ さささサイン下さい！」

霊夢は心底ウンザリしていた。

今日は来客が多い。厄介事も。

外来人が危険な荷物を取りに来たり、それを撮りに来た天狗の暴風が折角掃き溜めた落ち葉を吹っ飛ばしていったり、お寺の連中が寺を盗まれたり、亡霊のところに竜の城が建つたなど。

お寺は何かしてくれ、亡霊は何もしないで、落ち葉は結局霊夢が集めた。

それなりに面倒な気分だったが、それをどこか楽しんでる自分が居た。

このまますれば何か起こるだろう。異変は大体夏頃に起こるものだし……。

暑さの苛立ちを異変解決にぶつけてもいいだろう。もしかしたら霊夢の活躍で神社の知名度が増すかも知れない。最近出来た寺よりも、こちらのありがたみが判ると云うものだ。

そう思えば、少々気が晴れる。それでもやはり億劫だと感じる気持ちの方が強い。

何も起きなきゃいいなあ……と茶を啜る霊夢だったが、スッパアンツと余りに勢いよく襖が開かれ、思わず噴き出した。

意図せず煎餅が濡れ煎餅になる。海苔が生き生きと踊る。畜生。

怒気を孕んだ瞳で、襖を見やる。

そこに居たのは不良天人、比那名居天子。やけに切羽詰まった顔をしている。

「何よ、あんた……どうしたの？」

「大変なの！ いいから来て！」

優雅なグリーンティータ임は終わりを告げた。

厄介事の予感はいかか、霊夢は頭を押さえて独りごちた。

天子が連れてきたのは、血塗れで呻いている射命丸文ではないか。腹部と胸部にかけての深い切傷。覗き込めば、プラプラと千切れた組織から向こう側が見窺える。酷い怪我だ。

だが、人間なら確かに致命傷としても 妖怪にとっては、それこそなんでもないような傷である。

だと言うのに、文は顔を青くしたまま喘ぎ、こちらの言葉にも応答しないではないか。

これは何かおかしい 霊夢の勘が、告げる。天子にその場を任せ、永遠亭へと一目散に飛び出した。

故に、この先のやり取りを、霊夢が知る事はない。

幸か、不幸か……。

/ 0 5

「それで、この山の警戒具合はなんなんだ？」

天道に纏わり付く早苗を離して、魔理沙が問うた。

曰く 河童がワームに襲われた。たまたま現れた鬼がそれを退治したらしい。

何よりも唐突にワームが山に現れた事が波紋を呼んでいるそうだが、折角解析しようとしてたゼクターも盗まれてしまって、困ったものです」

天道の腕に抱きつきながら、早苗が答える。

おい、こつちを見る。質問してるのは誰だと思ってるんだ。

やけにしな垂れて婀娜っぽい動きをする早苗に苛立ちを抱きながらも、平静に努めようと試みる。

出会ってから、「まさか水嶋ヒロさんも幻想郷に来るとは……あの、お互い何か運命を感じませんか？」や「よろしければ守矢神社に……その、いつまでも居てくださっても」などと頬を染めて宣っていた。

いたく興奮気味であつた。それはそれは、痛く。とても痛々しい。脳の調子を疑うほどに。悪いものでも食べたのか。

生暖かい目で見守つてやるべきなのかも知れない。

「うん、無理だ。なんか気持ち悪いぜ」

「どうしたんですか、いきなり。食べすぎですか？　なんならトイレにでも行つててください」

その間に私は天道さんとたつぷりお話してますから　とても言いたげな早苗の笑み。

コイツこんなに面食いだつたかな、と思いを巡らせるも、早苗のそれは男女の感情と云うよりもどちらかと言えば憧憬に近い。

少女が絵本の中の魔法使いに向けるような……。

「それで……お前は、何故俺の事を知っている。ワームや、ゼクタの事もだ」

「えーつと……天道さんは、自分が指名手配犯になつた事はご存知ですか？」

「指名手配！？　天道がか？」

驚愕の表情を見せる魔理沙に、読んだ事もない本の話に割り込んだ際のパチュリーと同じ表情を見せ、溜め息を吐く早苗。

会話に割り込むな、とその態度はあからさまに告げている。

面白くない。面白くないが、仕方なく口を挟むの止めにする。

「いや、知らないな。説明しろ」

「……知らないなら、いいんです。それより、ハイパーゼクターはどうされました？」

天道が、今まで見た事もないような顔を見せた。触れてはならない部分に触れた　そう判断するには十分な。

早苗が、少し悲しそうな表情をし　それから、言葉を選んで口を開いた。

「私が何故貴方　天道さんの事を知っているかは、上手く話せません。それでも事情は承知していますし、私は貴方の味方です」
「何を根拠に」

「私が、仮面ライダーとしての貴方を信じているからです」

理由はそれで十分、なのだろう。早苗にとっては。

仮面ライダー。魔理沙も天道のあの姿を見てそう判断したが、どうやら早苗もそう呼んでいるらしい。先程、早苗は自身の事を仮面ライダー“2号”と言っていた。

“2号”と云う事は、1号がいると言う事。それは天道の事なのか、それとも……。

「マスクライダーだから、仮面ライダーか」

天道が、息を下げた。そして微笑む。

「言いたくなつたならその時話せばいい。ただ、話せる範囲の事は全て聞かせて貰うぞ。いいな？」

早苗が、勢いよく頷いた。

完全に置いてきぼりにされてしまったが、一先ずは決着が付いたらしい。

自分抜きで話が進む事に釈然としない気持ちを覚えるも、何とか飲み下す。天道がそれで良いと言うなら、自分も従うべきであろう。「えっと、それでは」

ゼクターを手に入れた事、戦力の強化と、解析しワームへの対策として使おうとしていた事、その設計図を盗まれた事などを伝え聞いた。

暫く早苗は仮面ライダー2号こと、ヘラクスとしてワームとの戦いに当たるそうだ。

バイクとやらは運転の許可が何だ免許がなんだと言っていたが、要約すれば品も無ければ乗る事も出来ないらしい。

「何がライダーなんだか判らん」と笑えば、「電車に乗っても車に乗っても原付バイクにしか乗れなくてもライダーはライダーなんです！」との事。

よく判らないが、ライダーと名乗ってしまったらそれで勝ちと云うところがあるようだ。

尤も、早苗は飛ぶ事が出来るし、クロックアップと飛行を併用す

ればバイクは必要ないのかも知れない。

自在に飛ぶ事が出来ない天道のカブトに比べれば、それはそれでフォームへの有効な武器足り得るだろう。

魔理沙としてもライダーに変身したかったが、盗まれてしまったなら断念せざるを得ない。香霖のところによらずに、さっさとこちらを目指せば良かったかもな、と少々残念がる気持ちもある。

あの「変身」と云う掛け声はそれほどまでに魅力的だった。

腕を天地左右に散々振るキレの良いポーズをとった後変身して飛び去った早苗「ヘラクスの背中を見て、そう思った。

ただし、ちよつと声を寸詰まらせて「私は風神の子！ 仮面ライダーヘラクス……アーツ、エツ！」と云う掛け声は御免である。なんだあれ。

「さて、天道……次はどこへ行く？」

天狗達に囲まれバイクを止めた場所に戻ってから、隣に立つ天道を見上げる。

その時だった。

地符「不讓土壤の剣」。

大地が鳴動した。余りの震動に、総司はその場で踏ん張る事を余儀なくされた。

見れば、壁。魔理沙とは分断された。

そして、相対するのは剣を持った比那名居天子。その目には、紛れもない殺意が滾っている。

「お前、何の心算だ？」

「アンタと交わす言葉なんてないわ」

言い捨てて、地を蹴る天子。

先程のやり取りでここまで憤慨するものなのか。そうだとしたら、器量が狭すぎる。

取り押さえて、落ち着かせてから説明をさせる。事情が判らない以上、迂闊に攻撃などは出来ない。それしか方法が無いのだ。

何にせよ、向こうがその気な以上、こちらが無防備でいる理由も無い。

明らかに、言葉だけでは済まなそうな気配だった。
「変身」

《HEN SHIN》

「もう一度聞く。お前、なんの心算だ？ 説明しろ」

「言ったはずよ。アンタに言う事なんて何も無いって！」

問答無用で天子が踏み出した。

繰り出される緋色の刃に金の刀を合わせ、跳ね上げる。そのまま左手で体を掴もうと

「甘い！」

跳ねられる勢いそのままに後転してつつ繰り出される蹴り上げ。それに怯む天道へ、追撃として回転して飛び来る岩が。

サイドステップで何とか回避をするが、凄まじい踏み込みと共に再び繰り出される剣。何とか受け流すも、攻撃が続く。

強い。斬撃そのものは闇雲に繰り出されるだけで、特に武道の経験などは見られない。

だが、重い。

それが脅威なのだ。先の読めない攻撃。型に嵌らない無法さ。

“比那名居天子”の“意思”が捉えどころ無い “天意” 無縫だ。

生半可に武術を習得したものより、純粋な身体能力に頼る素人の方が恐ろしいとは誰の言葉か。

これが純粋な命の奪い合いならば良いだろう。天道は歴戦の勇士。素人の隙だらけの動きなど、正に恰好の獲物だ。

だが、天道に天子の命を奪う心算はない。

殺さずに制圧するには、比那名居天子は強すぎた。
容赦なくカブトの体を緋想の剣が攻め立てる。

殺意の攻撃と、相手を鎮圧する心算の攻撃ではどうしても差が出る。加えて戦闘スタイルの違い。

防御に意識を割かず、常に攻勢の天子。余程身体の硬さには自信があるのか。

一方のカブトは、元々攻撃を躊躇している事もあり攻勢に出られない。その隙を見逃す天子ではない。剥き出しにされた敵意。天道の“排除”に一部の情を挟んでいない。

通常、防御を考えないで攻撃を行っていれば当然ながら相手の攻撃を受けやすくなる。傷は付かないにしても、動きを阻害される事はある。そうならば必然的に手数は 思い描いていたものより 少なくなる。

故に、天子の行動は阻害される事を前提で組まれており、元来的に手数が多い。

つまり、そこでもし相手が碌に攻撃を行わない この場合の天道 ならば、天子は一方的に相手を攻め立てられるのだ。

初めから戦う心算の無いカブトにとって、これは致命的だ。只でさえ余り抵抗は出来ないというのに、相手が実力者ならば、尚更状況は悪化する。

連続した蹴撃に続く斬撃が、胸部の装甲で弾けた。

「聞き分けが無い……！」

蹈鞴を踏んだカブト目掛けて空中に浮かんだ石から放たれるレーザ。逆手に持ったクナイガンで切り払う。

クロックアップで逃げ出そうにも、キャストオフした破片が天子を傷付けるとも限らない。幾ら硬いと云っても、ヒビロノカネ以上の強度とはまずいかないだろう。

防戦を余儀なくされる天道に、更なる追撃が入る。

強い。

天人だけあって、かなりの実力。魔理沙や咲夜、霊夢を下したと云うのも間違いではないだろう。

その時は弾幕ごっこ 今度は殺し合い。言うまでもなく、

全力である。

仕方ない。

「一体何を企んでいるの？ まさか、このままやられる……なんて殊勝な心掛けは持っていないでしょう？」

天子が、息を整えつつ、言った。

それを鼻で笑って返すカブト。

「この程度で俺を倒せると思っていいのか？」

明らかな挑発。

それに、天子は乗った。天道が想定しているのと同様かそれ以上に、かなり熱しやすい性格のようだ。

「このッ！」

「……随分と感情的だな」

息を吐いて、距離を詰めながらの切り払い。ただの妖怪ならば、或いはこれで上下に体が分かれてしまっただろう。

アーマーを避け、スーツを狙った一撃。明確な殺意が読み取れる。鎧の可動部・関節部を狙うのは定石だ。必然的に装甲が薄くなる。殺す心算ならば、ここを攻撃しない手は無い。

「だが無意味だ」

繰り出されたそれを手で撥ねると、返す刀で天子のボディを打った。

定石とは 言い換えるなら、読みやすいのだ。

敢えて天子を激昂させる事で、その攻撃の位置を絞った。

首を上手く切り払うなど、特に鍛錬か、経験もなければ行える筈が無い。

これまでの無法な太刀筋、そして普段は弾幕ごっここと云う点から首筋を狙われる事はないと踏んだ。加えるなら、天子が横薙ぎの攻撃を普段から多用している事もある。慣れない行動は、されにくい。こんな時は自然と体に染み付いたそれを行ってしまうものなのだ。果たして、予想は的中した。

申し合わせたように払われた剣の横腹を叩き跳ね上げ、腹部への

一撃。

特に鍛錬していないのならば、これで戦闘不能だ。ならずとも、攻撃は止む。その隙に武装を解除して、取り押さえてしまえばいい。幾ら刃物が通らないと言っても、それ以上の強度のスーツの相手に衝撃を与えるカブトのパンチの前では、無意味。

勿論加減はしたが、十分に痛みを与える事は出来ただろう。

それが、天道のミス。

剣を奪い取ろうと、手を伸ばしたその時だった。

「痛く、ない……！」

天子が、嗤った。そして切られるスペルカード。

“要石「天地開闢プレス」”。

凄まじい勢いで繰り出された緋想の剣がカブトを宙へと跳ね上げた。そして、ダメージから硬直するカブト目掛けて

「はああああああああああああああああああ！！」

襲い掛かる、特大の石と天子。

躲しようが、無かった。

どうせ天道に突っかって、弾幕ごっこをしようとしても言うのだろう。とは言っても天道もワーム相手じゃないと戦わないだろうな。

そんな風に楽観していた魔理沙も、今の揺れと派手な金属音には流石に驚き、すぐさま盛り上がった土壁の上に飛び乗った。天狗が続く。

意外な、異様な光景だった。

砕けた巨石と、傷だらけで息も絶え絶えに地に伏せる天道。

「咄嗟に鎧を弾き飛ばしたのか……でも、防ぎきれなかったようね」
天子が、緋想の剣を片手に呟く。

そのまま一歩踏み出す。明らかにおかしい。まるで、戦闘不能な相手にトドメを刺さんとはかりに。

殺そうとしているのか……！？

「おい！？ お前、何やってんだ！！」

思わず声を荒らげる魔理沙に、天子が、乾いた　乾ききった瞳を向けた。

闇が見える。荒野を吹きすさぶ嵐の如き感情の内に、消えようのない闇が。

何よりも雄弁に、どんな言葉よりも簡潔且つ正確に　天子の中の殺意を物語っていた。

「コイツはあの天狗を襲ったのよ」

一同が、息を呑んだ。

“あの天狗”が誰を指しているかなど明白だった。これほどの騒ぎにも関わらず、駆けつけて来ない筈が無いのだ。

誰よりも早く硬直から立ち直った魔理沙が、叫んだ

「馬鹿な！　天道に限ってそんな事がある筈　」

「『無い』と言い切れる？　本当にこの外来人が自分の邪魔になる妖怪を殺さないって言える？　無実を証明できる？」

言葉が詰まった。

確かに、途中で一旦天道と別れている。それに、早苗が言った指名手配と云う言葉。

信じたくはないが、一度頭の片隅に浮かんでしまった疑念を否定しきれず、言葉が出ない。

「兎に角、私は信用しない。私はコイツを許さない」

「なんでお前がそこまで……」

「私さあ、正直あの天狗が嫌いだったんだ。天人様、天人様って…

…私が強いのは私が努力したからだし、私の能力ちからよ。それを天人で

一括りにするなんて……一番嫌いな奴の対応」

でもね、と。

「だからと言って、信用するならあの天狗の言葉よ。この男の所業を許す事は出来ない。コイツは『超えてはならない一線』を越えた」
その言葉に続けて、自分自身に言い聞かせる様に小さく、しかし強い響きを漏らすと天子はスペルカードを掲げた。

“「全人類の緋想天」”。

終わりだ。

この一撃で、天道総司は絶命す。

変身は解除され、満身創痍。対抗手段など存在しない。いくらベルトで身体能力が底上げされるとあっても、耐え切れるものではない。

気質が収束し、赤熱する。

そして、放たれる

「私が私で在れる場所を奪う存在に、容赦はしないわ……。誰であらうとも」

「やめろッ！」

“恋符「マスタースパーク」”。

紅の閃光に、色鮮やかな光線が割り込んだ。

混ざって、弾けて あたりが、染まる。一切が光に塗り潰される。

目を開けている事は、神とて不可能だろう。

壮大な爆裂音を上げて、地形が削れ飛んだ。

不毛の地、正にその呼び名通りだ。二本の光線に薙ぎ払われた山の一角は熱を撒き散らすだけとなっていた。

他に一切は無い。

草も、木も、虫も 天道の姿すら。

熱線が焼き払った大地を見ながら、天子が心底残念そうに、しかし逆になんの感慨もなさそうにも聞こえる呟きを漏らす。

「ふん、川に落ちたか……。いつそ消えればよかったのに」

「お前……！」

胸倉を掴んだ魔理沙の手を興味なさげに払いのける天子。

その目は、漆黒の殺意に支配されていた。死が、充満している。

幻想郷のあらゆる生 相手の死すら内包するその生をも否定する、別種の死。

なんなのだ、これは。

なんの言葉も届かない。総てが、この暗闇に飲まれてしまう。幻想郷で目にする事のない感情。捕食でもなく、怒りでもなく、純粹且つ單純な殺害の意思。

光の利かないどこまでも暗澹たる泥土に独り落とされたような恐怖に、魔理沙は愕然と身を竦ませた。

見たこともない。知らない。知りたくない　　純然たる生物が持ちえる、生物の営みから外れた負の感情。

斬られる。自分は間違いなく斬り殺される。天子が望めば、いますぐに。

自然と足が震えた。立っていられない。全身が総毛立った。泣き出しそうだった。恥じも外聞も無く叫び声を上げて、逃走したい衝動に駆られる。

自らが弾いた魔理沙の手を掴み、天子が言った。冷たい手。冷たい声。温かみとはかけ離れた表情。

「貴方がどちら側でも構わないわ。あの外来人を信じて、それに従いたいなら自由。それでも、私の邪魔をするなら容赦しない」

考えなさい。この事がどんな意味を持つのかを。

言外にそう告げていた。

言い返す事も出来ず、魔理沙はその場に立ち尽くした。

直に、辺りは暗くなる。

太陽の支配する時間は終わる。

「天道……」

魔理沙の思いも、這い寄る混沌たる夕暮れへと、消えた。

この騒動を見聞きした天狗が、号外を出すのは早かった。

見出しは概ね共通していた。つまりは

“ 外来人、天狗記

者への暴行。記者は重症”と。

それは新たな異変を告げる開幕の鐘。

幻想郷を脅かす、害意を持つ外夷

“ 外”との戦い。

遠巻きに　　酷く遠巻きに　　遙か上空からそれを眺める者が居た。

射命丸文、それを模したワームである。

実のところ、射命丸に致命傷を与えたのは彼（若しくは彼女）だ。元々、二箇所を同時に襲えば対応が出来ないと踏んで行ったもので、対象が射命丸であった事に然したる意味は無い。

河童の持つゼクターを奪う事に比べれば、ホンのおまけだ。

河童と合わせて天狗の山への牽制も兼ねた程度のもの。いつでも狙えるぞと云うメッセージ。

幻想郷の賢者がこんな事態なのに何をやっているのか、果たして自分の隣に居るものは信頼できるのかと云う疑心を抱かせる目的。

否応にも山の警戒に人員を割かなくてはならないだろう。外からだけでなく、中にもいつ現れるか判らないのだ。

勢力で言えば、一番多数を有している妖怪の山が厄介だ。その総数は自分達を上回る。幾ら個々の力で勝るとは言え、総力戦では分が悪い。

奴らを釘付けにする。それで十分だった。

加えて、余興とでも言わんばかりに傷を負った射命丸文を模し、比那名居天子を煽動。その後、本物の射命丸文と入れ替わる。

本物が誰かに事情を話す心配はまるで無い　そもそも会話など不可能だ　が、それ以外の人間でもある程度冷静に話し合えば誰がやったかなど直ぐに判明する。

それでも良かったのだ。同じく、猜疑心を煽るだけで。

だが、これが予想外の成果を齎した。読み込んだ“記憶”にある限り幻想郷の人間はとりあえず戦ってから話を付ける事が多いがそれ以上にあの天人は直情径行にあつて碌な会話もせず、よもやマスクドライバーカブト　天道総司を再起不能にするとは。

後は探し出して抹殺すれば、自分達の障害が格段に少なくなる。

この世界に流れ着いたゼクターの一つを手中に収め、計画は順調

に進行している。

山の巫女が変身する事、何故だかこれらシステムや自分達の存在を知っている事がかりだが、自分達との戦闘経験など皆無だろう。

排除するのはそう難しい事ではないし、これも山に封じ込んでおける。

依然として問題はない。自分達の居た世界に戻るのも、幻想郷を乗っ取るのも容易だ。

そして、ワームらしい冷酷な笑みを浮かべた射命丸の写し身は次元のスキマ　マール模様壁へと消えた。

太陽は沈み　夜明けは、遠い。

日はまだ、昇らない。

これからは、蠢く怪異

冒流的な闇の為の時間。

「絶望的ね。 生きているのが不思議なくらいよ」

「外来人も、ワームも……総て私が倒す」

「だから、天道　地獄に堕ちろ」

次回、東の国の終わらない夜

天の道を往き、
総てを司る。

空飛ぶ巫女達の不思議な一日（後編）（後書き）

今回の東方天人、3つの出来事は……

1つ！ 山の巫女、東風谷早苗は仮面ライダーが大好き！ 早苗「
おのれワーム……！」 この私が許さん！」

ヅ
V
ク

2つ！（0・—0）「いい踏み込みだ。感動的だな……。だ
が無意味だ」

3つ！ 天子「アヤ、アアア
「！！」 カラミソ！

天子「下界は私の居場所になってくれるかも知れないところなんだ……！」

天子「勝った……私はカブトに勝った！ ……勝ったんだ」

天子「魔理沙……お前はいいよなあ……」

川落ちと善意の擦れ違いと仲間同士の戦闘って平成ライダーの醍醐味ですよ。大好きです。

「好きなんだ。生まれついて……そういうのが（いい笑顔）」って具合に。

他に天子のキャラクター像についての捉え方や所感は、活動報告の方にも。

次回も読者の皆様が暖かい気持ちになってくれるよう頑張ります！

補足「天狗の資料」Misterious Memo」

【仮面ライダーカブト】

平成ライダーの第7作品。2006年放送。

詳細は以下のサイトを参考にされたし。

公式HP（テレビ朝日）<http://www.tv-asahi.co.jp/kabuto/>

名前：天道総司てんどう そうじ

種族：人間

能力：天の道を往く程度有能力

カブトゼクターの資格を有する程度有能力

身長：180cm

職業：不明

所在：不明

二つ名：天の道を往き、総てを司る男

幻想郷にやってきた外来人。

カブトゼクターの資格者。ゼクターをベルトに挿入する事で仮面ライダーカブトに変身する。

テレビ版では更に修行し白包丁を持つことを認められるレベルの料理人となったが、映画版にはそんなエピソードが存在せず、また特に自分自身で料理を行っていない為、映画版はテレビ版の総司程の料理の腕を持たないと推測される。

映画ではワームの乗った隕石に由来する病気を患った妹の事を思い、ついには過去へ遡り歴史を修正する。修正された歴史がテレビ版となる（厳密には少し異なる）様だ。

ちなみに次回作（仮面ライダー電王）ではこの様な行動を行う事を目的とするものが敵である。何とも皮肉的。

名前：サナギ体 W O R M

種族：ワーム

能力：擬態する程度の能力

職業：不明

所在：不明

二つ名：なし

隕石に乗って飛来してきたらしい未知の異界生物。

防御力に優れた強固な外殻で、内部の成虫体を守る第1形態。

人の姿形のみならず記憶までも写し取る能力を備え、完全に人間に擬態する。

既に多数が気付かれないまま、人間社会に浸透して生活している。

また、ゼクターの資格者に擬態する事でゼクターを使用できる事から、擬態相手の資質や能力を写し取る事も可能だと推測される。

白いサナギ体はクロックアップした物体を視認する事も出来る。

非常にやっかいな生命体。

名前：アラクネアワーム ルポア

種族：ワーム

能力：主に自分の時を加速させる程度の能力

職業：不明

所在：不明

地球に棲む蜘蛛に似た能力を持ち、左右の腕についた消化粘液の入ったウェブシューターから蜘蛛の糸を飛ばして絡めとる攻撃を得意とする。

両肩からそれぞれ3本、計3対の細い節くれだった腕の様な装飾。どことなく顔はプレデターに似ている（と思う）。

テレビ版ではクロックアップ状態ながらクロックアップを使用しないカブトに敗北し、本作東方天地人においても魔理沙とクロックアップを使用しない総司に敗北する。

「天の甲虫、魔女の幻」に登場。

名前：オドントダクティルスワーム O D O N T O D A C T Y L U
S W O R M

種族：ワーム

能力：主に自分の時を加速させる程度の能力

職業：不明

所在：不明

身長：221cm 体重：110kg

地球に棲むシャコに似た能力を持つ。

両拳は人間の頭以上の大きさに肥大しており、常にタキオン粒子が循環している。細身ながらそのパンチは容易く戦車をも叩き潰す。さらにチャージアップする事で、ライダー達の必殺技と遜色がないほどの攻撃を繰り出す事が可能。

また、ヒヒロカネほどではないがかなり強固な装甲を持つ。

茶褐色で、全体的にフォルムが丸い。肘や膝、尾？部からは突起が伸びる。腹部には畳まれた節足が多数存在。

口腔部からは髭が伸び、前頭部からは紫色の触角が。目玉は左右に飛び出している。

胸部の足を素早く動かす事で地面に潜り、そこから飛び出して襲い掛かる戦術を得意とする。

体色が鋼色で、腕部が更に肥大した“オドントダクティルスワーム スキラウス”の姿が確認される。

両者ともに美鈴に擬態。前者はライダーキックにより消滅した。

「カブトと紅の門番小娘」に登場。

名前：キャマラスワーム CAMMARUSWORM
種族：ワーム
能力：主に自分の時を加速させる程度の能力
職業：不明
所在：不明

身長：221cm 体重：127kg

地球に棲むエビに似た能力を持つ。

長い触覚で暗闇でも敵を察知して、右腕の鉤状の巨大ハンマーで叩いて碎く攻撃、また深海底での攻撃を得意としている。蹴ると痛そうな外見。

天道総司、紅美鈴を不意打ちで戦闘不能にさせるが、駆けつけた十六夜咲夜に引き止められ、レミリア&フランドールの攻撃により消滅。正にフルボッコ。

「スキマツアーへようこそ」に登場。

・マスクドライダーカブト

マスクドライダーカブトは装甲・パワーに優れるマスクドフォームと、スピードに優れるライダーフォームを有し、ライダーフォームにおいて腰の左右にあるスイッチを叩く事で全身にタキオン粒子により時間流を操作する程度の行動 クロックアップが可能となる。またカブトゼクターの側面、カブトムシで言う処の足に当たる部分の3つのスイッチ「フルスロットル」を順番に押す事でゼクター内部に溜まったタキオン粒子をチャージアップし、頭部の角「カブトホーン」へと送りこむ。そして、「カブトホーン」から脚部に送られたタキオン粒子は脚部で波動に変換される。

この状態で放つ上段回し蹴りがカブトの必殺技：ライダーキックであり、原子を崩壊、消滅させる程度の威力を持つ。

・カブトゼクター

自分の意思を持ち飛び回る、マスクドライダーへの変身ツール。赤い甲虫型の姿を持つ。

ジヨウントという時空間を寸断し飛び越える移動方法（ワープの様なもの）で、全くタイムロスなしに資格者の元まで飛んてくる。

その材質はヒビロノカネであり、非常に堅固。飛び回ってワームを直接攻撃する事もある。

【東方Project】

同人サークルの上海アリス幻楽団のZUN氏によって制作された弾幕系シューティングゲーム及び弾幕格闘アクションゲーム、小説や漫画のシリーズ。後者は、黄昏フロンティアとの共同プロジェクト。PC-98で5つ、Windowsで13作品制作されている。

上海アリス幻楽団と言っても、個人サークルであり製作は全てZUN氏1人である。

どの作品も、大凡のストーリーは幻想郷を舞台に少女たちがなにかんだ起きた異変を弾幕ごっこで解決するというもの。

キャラクターの会話は皮肉や風刺、エスプリ、ウィットに富んだものでありどこか殺伐としている。

名前：霧雨魔理沙きりさめ まりさ

種族：人間

能力：魔法を使う程度の能力

身長：やや低い（平均的な少女の身長に対して）

職業：魔法使い

所在：魔法の森 霧雨邸

二つ名：普通の魔法使い

魔法の森に住む人間の魔法使い。魔法使いには種族としての魔法使い（人外）と、職業的な意味での魔法使いがいる。

前者には、生まれついてのそれと、人間から至ったものの二種類が存在。

蒐集癖を持ち、役に立つものや立たない物、他人のものに限らず集めている。

本人曰く、「死ぬまで借りているだけ」。妖怪に比べたら寿命が短い人間なので、いずれ返却されるだろうが何とも笑えないブラックジョークである。

飄々としているが、才能だけでそこそこ強い霊夢に追いつくために影で努力している。ただし、それを表で見せようとはしない。

弾幕はパワー、らしい。

「天地人」の「人」を担当。別段能力が優れているワケでもワームに対する知識を持っているワケでもないが、努力で追いつく係。

どこぞの戦いの神（笑）と違って察しは良いし、どこかの鍬形や馬と違って騙されにくい。寧ろ騙す側。

名前：十六夜咲夜いざよい さくや

種族：人間

能力：時間を操る程度の能力

身長：高い

職業：メイド

所在：紅魔館

二つ名：完全で瀟洒な従者

銀髪のメイドさん。

時間を操ることは空間を操ることに繋がるらしく、紅魔館を外見よ

り拡張している。

時の加速、減速、停止は出来るが爆破したり吹き飛ばしたり巻き戻すことは不可能。

衣服の中の空間をいじってナイフを多量に溜め込んでおり、途中で弾切れになったら時間を停止して回収しているらしい。

完璧そうに見えて意外に天然らしいが、多分騙されない人。マズイパスタも食べない。体がボロボロにもならない。

名前：紅美鈴

ホン・メイリン

種族：妖怪

能力：気を使う程度能力

身長：高い

職業：門番

所在：紅魔館

二つ名：華人小娘

紅魔館の門番。眠っていたりサボっているのは二次創作特有の設定かと思いきや、東方非想天則にて確定されてしまった。ちなみに時系列的には、天地人本編は星蓮船より後で非想天則より前。

武術の達人。純粹な近接戦闘の技術だけなら幻想郷でも上位だが、弾幕ごっこというルール上あまり役に立たない。恐らく一番割り喰っている妖怪。

多分騙されやすい。

名前：フランドール・スカーレット

種族：吸血鬼

能力：ありとあらゆるものを破壊する程度能力

身長：低い

職業：不明

所在：紅魔館

二つ名：悪魔の妹

情緒不安定。レミリア・スカーレットの妹。吸血鬼にして魔法少女だそうだ。「僕と契約」した風には見えない。

東方紅魔郷の時点で495歳。気が触れているので外に出してもらえず、自分から出ようとしなかった一箱入り娘。文花帖（書籍）では館の外で隕石を破壊していたので、多分それぐらいには外に出てる。

当然、紅魔郷Extraまで咲夜を除いて人間の生きている姿を見ることがなかった。

レミリアを慕っているという設定だったが、文花帖（書籍）において「あいつ」呼ばわりしている上、会話がなんか黒い。

物体の力が集中していて壊れやすいところ 「目」を自分の掌に投影して、握ることであらゆるものを破壊する程度の能力を有している。

公式妹枠なので、天道との相性は悪くないだろう。

名前：パチュリー・ノーレッジ

種族：魔女

能力：火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力

身長：やや低い

職業：知識人

所在：紅魔館

二つ名：動かない大図書館

紅魔館の食客。^{ウツウツ}レミリアのお友達。外見は紫もやしと称されるが、どこかの世界の破壊者とは関係ない。

喘息持ちの上に貧血で長い呪文が唱えられない。調子が良いときは出来るのでそのときはカーナリー強い。

病弱で無気力そうなんだがロケットまでつくったりと妙にアクティブ。

本から得たり、変な解釈をしておかしな知識を持つ。レミリアに余計な知識を吹き込んで、それに咲夜さんが振り回される……らしいぜ。

動かない大図書館とは何ともイカしたネーミングだが、よくよく考えると普通図書館は動かない。

名前：レミリア・スカーレット

種族：吸血鬼

能力：運命を操る程度の能力

身長：低い

職業：紅魔館当主

所在：紅魔館及びその近辺

二つ名：永遠に紅い幼き月

紅魔館の当主で吸血鬼。フランドールの姉。500年と少し生きている割には言動が幼い。

小食で、食べきれず吸おうと思った血の大半を服に零してしまう。

それが「スカーレットデビル」の由来。何とも情けない。

名前：八雲紫 やくも ゆかり

種族：妖怪

能力：境界を操る程度の能力

身長：高い

職業：不明

所在：不明

二つ名：神隠しの主犯

胡散臭く、何処にいるのか、何をやっているのかよく判らない妖怪。神出鬼没で色々な場所に現れる。幻想郷に限らず、外の世界にも。かなり古く生きており、幻想郷の賢者とか呼ばれる。

一日の殆どを寝てすごしており、冬には冬眠するらしい。寝てる間は藍に任せっぱなしで、起きている間も藍に任せっぱなしだそう。今回は流れ着いたワームに擬態され能力をコピー、さらに世界の破壊者の生み出す波紋を食い止めていると縁の下でかなり働いている。ついでに、仮面ライダーキバの主人公、紅渡を幻想郷に連れてきたりもしているのだが、残念ながら本作では彼に登場や活躍の場面は無い。

・幻想郷

人里離れた内陸の山奥、辺境の地に存在しているらしい。当然ながら海は存在しないが東方香霖堂では魔理沙が寿司を作っている描写がみられるので、何らかの方法（あるいは妖怪）により、海の幸も齎されているのではないだろうか。

また、現実世界と陸続きの場所であるが幻想郷は強力な結界で外部と隔絶されている。自殺者や犯罪者などでまれに迷い込んでしまうものもいるらしい。そうでない人間が迷い込む事もある。

結界は2つ。「幻と実体の境界」と「博麗大結界」。

前者は外の世界で勢力の弱まったものを幻想郷に呼び込むと云うもので、これによって妖怪、また他の生物や道具を引き寄せている。妖怪以外に、たとえば朱鷺や初代ゲームボーイ、紙、型落ちしたパソコンが確認出来る。後者は幻想郷と外の世界との往来を遮断する結界。東方求聞史記によると「常識の結界」らしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2926o/>

東方天地人～ The Legend of Total Eclipse

2011年10月9日03時31分発行